とある。「よるはすがらに云々」は、晝は日ねもす思ひ暮すに對した叙法で、一部を省略して想像にまかせてある。されば、比較的省筆の必要の尠い詩形の尨大な長歌の如きは、皆聯對して叙してある。萬葉に見えた、

「ぬば玉のよるはすがらに、赤羅引く日も暮るゝまで、「赤根さす晝はしみらに、ぬば玉のよるはすがらに、

「茜さす晝はしめらに、ぬば玉のよるはすがらに、

の類なほ多い。

○

涙川枕ながるゝうきねには夢もさだかに見えずぞありける

釋 ○うきね　浮宿。水上に泊るをいふ。それに、憂きをかけた。

大意　涙が川なしてそれが爲に枕が流れる、かういふ憂いつらい浮寢では、寢入り兼ねて、思ふ人の夢もしかとは見られ無い事でサあつたわい。

評　涙の多量なることを川に譬へ、さて「枕流るゝ浮寢」とあくまで誇張し、水上の假泊は夢も結び難いのを下に踏んで、「夢も見えず」と歎息した。その眞意はせめて戀人を夢になりと見たいからである。萬葉集卷四、

しきたへの枕をくゞる涙にぞ浮宿をしける戀のしげきに

を本歌とした歌である。

○

戀すればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬものゆゑ

釋 ○影となりにけり　「影となる」は痩せ衰へて、影法師のやうになるのをいふ。影法師もいろ〳〵あるが、朝夕の細長く地に影を引いたのがふさはしい。故に萬葉集には、「朝影になる」と詠んである。○ものゆゑ　ものながらの意。

大意　戀に打ち込んで居ると、自分の身はかう痩せ衰へて、影法師のやうになつてしまつたわい、さうかといつて思ふ人に添ひもせぬ故、何の詮も無い事よ、影ならば人に立ち添ひさうなものを。

評　「影」の一語に就いて、一趣向を立てた。只この影は實在の影でないから、沙上の堂舍で、決して理路に陷らない。上句は奈良時代にしば〳〵繰り返された想で、萬葉集に、

朝影に吾が身はなりぬかぎろひのほのかに見えて行きし子故に　（卷十一）

朝影に吾が身はなりぬから衣すそのあはずて久しくなれば　（同）

夕づく夜あかとき闇の朝影に吾が身はなりぬ汝を念ひかねに　（同）

年もへず歸りきなむと朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ　（卷十二）

などある。但下句はこの歌の生面で、その痴呆の想は警策といふべきである。

二三の句、新撰萬葉に吾が身ぞ影となりにけるとある。

○

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらむ

釋 ○かゞり火　和名鈔に、「夜篝火、師說云比乎加々利遐須、今案、漁者以レ鍼作レ篝盛レ火照レ水者名レ之、此類乎」とある。漁夫が篝を焚いて水面を照射し、魚の寄り來るを待つて捉へることは、川でも海でもすることである。○なぞも　「何ぞ」に「も」の歎辭の添つた語。

大意 篝火こそ水の上に浮いて燃える物であるが、その篝火でも無い自分の身が、なぜにまあこのやうに、涙の川に浮いて焦れ燃えるのであらうか。

評 人に戀ひ焦れて涙に身の浮くばかりなので、浮いて燃える漁火の影を聯想し來つて、涙の川を流しかけた。「涙の川」のことは、既に上にいつた。構想ます〳〵尖奇に走つてゐる。結句、諸註「思ひの火の燃ゆる」と解いたのは、似て非なるものである。これは身の燃ゆると續くので、別に思ひといふ物の燃えるのではない。詞の上にも見えぬことである。後撰集戀四に再出したのには、「女につかはしける」と詞書があつて、二三の句あらぬ思のいかなればとある。六帖には、二句あらぬ物から、結句浮きて見ゆらむとある。

○

かゞり火の影となる身の佗しきはながれて下にもゆるなりけり

釋 ○かゞり火　これも前の歌と同じ漁火である。○影となる　上の「戀すれば」の條に既出。○ながれて　流れてに、存在れてをかけた。存在れてのことは、上の「山高み下行く水の下にのみ流れてこひむ」の條に既出。○下にもゆる　心の内にはげしく思ふを喩へていふ。

大意 篝火の映つた影は水の下で燃えるが、丁度そのやうに、戀に痩せ衰へて影のやうになる自身のつらいことは、死にもせずに生き長らへて、心の内でばかり思つて、胸の燃えるのであつたわい。

評 同じ材料を用ひても、この頃のは修飾多く、眞摯の點に缺けてゐる。萬葉の後に出て、更に生面を開かうと試みた結果である。上に擧げた萬葉の朝影と、この集の影とを比較して、その風調の變化を味ふがよい。歌は上のと同調同體同巧である。

○

早き瀨にみるめおひせばわが袖のなみだの川に植ゑましものを

釋 ○みるめ　和名鈔、「海松云々、水松、狀如レ松而無レ葉、和名美流」とある。布は昆布、荒布など、海藻につけて呼ぶ稱。さて海松布に、見る目をかけた。○涙の川　例の混喩。

大意 海中に生える海松布が、川の迅い瀨に生えて育ちもするものならば、戀しい人を相見ることの無いのを歎く爲に、早瀨になつて流れる、自分の袖の涙の川に植ゑようものを、さすれば海松布の名の如く、戀しい人を見る目もあらうと思ふに、生憎海松布は早瀨に生える物でないから致し方もない。

評 渴ける者は水を擇ばず、戀する者は手段を問はない。はかない物種につけても、せめてはかうもあれあゝもあれと希つて、多少の慰藉を得ようとする。このはかない痴愚の想は、戀の迷の甚しさを想はせるものである。海松布の名によつた着想は、やゝ纖細に流れるが、その希望の不合理なのが、大いに詩味を生じて、怨嗟の意が殊に深さうに聞える。それを「海松は海にこそ生ずれ河にはいかで」など難じた說もあるが、味者の言であ

る。平安朝になつて殊に戀の歌に海松布の弄語が非常に多い。海松などは海邊に遠い都人のさう目に觸れる物でもないのにと思はれるが、實際はこれを塩漬などにして食料に用ひてゐた。そして模樣などにも海松(ミルブク)を使つてゐる處から見ると、やはり當時の都人士の生活に卽してゐる物であつた。

六帖には作者を貫之とし、結句植ゑて見ましをとあるが、語勢がやゝ弱い。この歌の趣では、この句は力强いのがよい。本行のに從つておかう。

○

おきへにも寄らぬ玉藻の浪のうへに亂れてのみや戀ひ渡りなむ

釋 ○おきへにも　沖にも邊にもの意。沖は海の遠き奥をいひ、邊は海端(ハタ)をいふ。○玉藻　玉は美稱、藻は海草のすべてをいふ。

大意　自分の戀は沖の方へも海端へも寄らずに、玉藻が浪の上で亂れてゐるやうに、思ふ人にえいひ出しもせず、又思ひ切ることもえせずに、どちへも就かず、心が亂れてばかり居て、月日を經る事であらうか。

評　亂れてのみ戀ひ渡るのは實に堪へ難いことである。然るにさうした境地に立たなければならぬとなつては、その苦悶は同情に値する。

わが國は海國である。神代の歷史は海の歷史である。かゝれば沖つ藻邊つ藻の歌詠に上ることは久しい。天孫の御歌その始をなし給ひ、奈良時代の歌詠に至つては、枚擧に遑がない。人麿の句に、

香青なる玉藻沖つ藻、朝羽ふる風こそ寄せめ、夕はふる浪こそ來よれ、浪のむたかよりかくより、玉藻なす寄り寐し妹を、（萬葉集卷二）

と見え、祝詞には、

沖つ藻は、邊つ藻は、

と連ねた。玉藻のか寄りかく寄りすることは、奈良時代からの常套語となつたが、それだけ餘計に「亂れて」とかゝつた意味が確實性をもつ。

○

あし鴨のさわぐ入江のしら浪のしらずや人をかく戀ひむとは

釋 ○あし鴨　鴨は蘆邊に住むゆゑにいふ。蘆鶴(アシタヅ)の語例と同じい。○しらずや　「や」は歎辭。

大意　蘆鴨の騷ぐ入江の白浪のしらといふやうに、知らぬことよ、人をこのやうに戀しう思はうとは。

評　上句は白浪のしらずと同音を疊んだ序である。「靑き中にちらり〳〵と波の白く見ゆる景色面白し」と景樹は評した。但萬葉集卷十一、

あし鶴のさわぐ入江のしら菅のしられむ爲とこちたかるかも

の序詞を借用したのである。「知らずや」の「や」の用法は弱くて、浮泛の感がある。上來の語勢では呼格に解したいが、すると意が齟齬してくるから仕方がない。冷靜に考へると、戀は全く思案の外である事を痛感する。六帖には、下句しらずや君はわが戀ふらくをとある。思ひ入つた趣が見え、高古の風があつて、倒裝の語調も自然でよい歌である。萬葉の下句に優つてゐる。本行のは或はこれを誤り傳へたのではあるまいか。

人丸集には、二句入りて鳴く音の、結句しらずや妹をとある。
以上六首は江河等に寓せた戀である。

○

人知れぬおもひを常にする河なる富士の山こそわが身なりけれ

釋 ○おもひを常にする河なる　思を常に爲るに、駿河をかけた。
大意 戀しいあの人に知られぬ思を、いつもくするこの自分の身に、譬へる物は外には無い、底の火は餘所に見えずに、不斷うへに烟が立つて燃える、あの駿河に在る富士の山がサ、卽ち自分の身であつたわい。
評 「富士の山の烟も立たずなり」と、序文中に見えたが、都良馨の富士山記には、
其頂中央窪下、體如二欹甑一云々、其甑中、常有二氣蒸出、其色純青、窺二其甑底一、如二湯沸騰一、其在レ遠望者、常見二烟火一。
とあれば、この歌も貞觀頃の作であらう。富士の火の底にばかり燃えて、餘所に見えぬのを、わが心火の燃えながら、思ふ人に知られぬのに想到して、普通ならば譬喩の叙法を采るべきを、直に富士の山はわが身なりと斷定したのがこの奇處、嶮處、はた好處といはう。「おもひ」に火を寓せたか寓せぬかゞ問題である。歌としてはそんな小細工をせぬ方がよいが、時代としては或は寓せてあるかも知れない。

○

とぶ鳥の聲もきこえぬおく山のふかきこゝろを人は知らなむ

釋 ○おく山　深山をいふ。秋下「奥山に紅葉ふみわけ」の條に既出。○ふかき心　一方ならず思ふ心。
大意 飛ぶ鳥の聲さへも聞えぬ程の、深い山のやうな、深い思ひ入つた私の心を、外の人などはどうでも、あの人はどうぞ知つて貰ひたいわ。
評 「奥山の」までは序で、深山の形容を悉した。「聲も」のもは例の強い用法。「人は」のはも調が強いので差別の意が生ずる。全體かう力强い調なので、その一途に思ひ込んだ情緒の動きが見える。

○

あふ坂のゆふつけ鳥もわが如く人や戀しき音のみ鳴くらむ

釋 ○ゆふつけ鳥　木綿附け鳥の義で、鷄のことか。顯昭いふ、「世の中騷がしき時、君の御祈に四境の祭といふ秡あり。鷄に四手を附けて、陰陽師に因しき事を祈りつけさせ、四境の關に放さるゝなり。されば木綿附け鳥といふ。逢坂はこの平安城にては東方の關、四境の一也」と。なほ雜下「誰がみそぎゆふつけ鳥か云々」の條にいはう。
大意 逢坂の關に放してある木綿附け鳥といはれる鷄も、自分のやうに人がサ戀しいのかして、自分と同じやうに、聲をばかり擧げて鳴くのであらうぞ。
評 上に「足曳の山時鳥わが如や云々」と詠んだのと同想。そこの評を參照されたい。「戀しき」は「や」の係辭の結であるが、連體言なので、直に結句の「音」といふ體言にいひ續けた。いはゆる續斷えて絲絶えざる語法。

○

あふさかの關に流るゝいはし水いはで心におもひこそすれ

釋 ○いはし水　岩間の清水をいふ。これは逢坂の關の清水の事と思ふ。

大意　逢坂の關に流れる岩清水の岩といふやうに、口にはいはずに居て、心にばかり思つてゞ居るわ。

評　上句は、岩清水いはでと、同音を疊んだ序である。譬喩ではない。されば廣陰の「岩清水の滿ちこぼるゝ如くに胸に餘れども、口にはいはずして」と釋いたのはわるい。「いはで思ふぞいふにまされる」で、つゝしみと羞恥との壓迫にあつて、下燃えにのみ燃えてゐる胸の苦惱は、戀知らぬ人の想像以外である。聲調流麗、齒牙に碍らない。

下句、六帖にいはでしもこそ戀しかりけれとある。

○

うき草のうへは茂れる淵なれや深きこゝろを知る人のなき

釋 ○うき草　和名鈔に、「萍、和名宇木久佐、無レ根浮二水上一者也」とある。

大意　うはべに出して見せぬ自分の心は、丁度浮草が水の上は茂つて、その底の見えぬ淵であればかして、この深い心底を知つて呉れる人が無いわ。

評　初二句、うへはうき草のとあるべきを、調に任せて倒裝した。比興が巧で、感哀も等閑でない。語勢も亦毫釐の弛みがない。「深き心を知る人のなき」、かるが故に、戀する人は意中の人の同情なさに煩悶し、世を憂ふる人は默つて已むより外はない。但部立に依れば、戀の意とばかり見るがよい。

○

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

大意　胸の迫つたあまりに、大聲に喚ばはう聲に、谺の響いて答へぬ山はあるまいとゞ思ふわ、といふが表面の意で、これ程に深く思ふからは、思つて呉れぬ人はあるまいと思ふ、といふが裏面の意。

評　有情の山を以て無情の人に對へた映帶の味ひが至極面白い。「山彦の答へぬ」の擬人、いよ〳〵その諷喩の意を深めて妙である。結句の字餘り、春上の「鶯の鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ」と同じで、語調强く、一途に怨めしく思ひ込んだ態度が哀れである。

後撰集戀五に再出したのには、「返しせぬ人に遣はしける」と詞書を添へ、その返しとて、

山びこの聲のまに〳〵とひゆかばむなしき空にゆきや返らむ

の歌を擧げてある。

「山は」を六帖には空はとある。

○

心がへするものにもが片戀はくるしきものと人にしらせむ

釋 ○するものにもが　「が」は希望の辭。がなと同じい。○片戀　片思と同じい。

大意　互に人の心が取り換へられる物でまああつてほしい、さらば、自分の思ふ心と、あの人の思はぬ心と入れ換へて、片思は苦しい物といふことを、つれないあの人に思ひ知らせようわ。

評　「心がへ」は面白い落想ながら、あながち斬新でもあるまいか。それは天武紀に、「是日爲二天皇一招レ魂」といふことが見え、職員令鎮魂の義解に、「謂鎮安也、人陽氣曰レ魂、魂運也、言招二離遊之運魂一、鎮二身體之中府一、故曰鎮魂」とあり、又、延喜式に、鎮魂祭の祝詞がある。魂魄の遊離を信ずることは、その時代の通想だから、隨つて反魂の際謬つて、甲乙の身體を取り違へて入り換りなどした俗說もあつたらうと思ふ。これを戀に湊合したのはこの歌の働である。列子に見えた、扁鵲が公扈齊嬰二人の心肝を入れ換へた話を典故とするのは、却つて物遠からう。到底不可能の事をも、萬一の望を繫いで、千々に心を碎くはかなさが、卽ち戀の眞情である。「人に知らせむ」とあるは、怨恨の意が殊に深い。「もの」といふ語の重複は不用意から出たと思はれる。まあ白璧の微瑕であらう。

結句、顯本に思ひ知られむとある。いひ方は大人しいが、思ひ入りが淺い。

○

よそにして戀ふれば苦しいれ紐のおなじ心にいざむすびてむ

釋 ○いれ紐のおなじ心に云々　顯昭いふ、「入紐は、雄紐雌紐ふたつを取り合はせてさすものなれば、同じ心に結ばむとは詠めり」と。中身を心といへば、通はせて用ひた。

大意　このやうに隔たつて、餘所に居て戀ひ慕へば苦しいわ、されば入紐の兩方の紐を一所に結び合はすやうに、これからはあの人と同じ心になつて、どれ一所になることにしよう。

評　男女いづれか相手の心のまだ得心の出來ぬ點があつて、隔たり居る者の希望である。恐らくかう詠んで先方に贈つたものではあるまいか。素より自分だけの勝手ぎめで、相手は肯諾してるないのだから、實現はむづかしい。それにも關はらずやりさへすればすぐ出來さうな風に思ふのも戀の迷で、思ひ迫つた情緒の橫溢した趣が見える。入紐の譬喩は、萬葉集卷十二、

何故か思はずあらむ紐の緒のこゝろに入りて戀しきものを

の先鞭があるが、着想が別だから仔細はない。漢詩に荐に同心結を詠じてあるのも、同じ事である。「同じ心」を、宣長は、「同じ所の誤寫」といひ、景樹は、「下句聞えず、さりとて、所にては結びてむの語をさまらず」といつた。けれどそれは誤解で、意釋の通りに見れば何の事もない。

○

春たてばきゆる氷の殘りなく君がこゝろはわれにとけなむ

釋 ○氷の　氷の如くの意。

大意　春になれば消える氷のやうに、貴方の心はどうぞスツパリと、私に打ち解けて頂きたい。

評　平凡の譬喩である。序歌ではない。

○

あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢の燃えこそ渡れ

釋 ○あけたてば　萬葉集に、「明立たば松のさ枝に、夕去らば月に向ひて」とある明立たばと同語。夜の引き明くればの意。○蟬の○螢の　「の」はの如くの意。○をりはへ　夏部「足引の山時鳥」の條に既出。

大意　この頃は、夜が明けると、晝は蟬のやうに一日泣いて暮し、さて日が暮れると、夜は螢のやうに思に胸が燃えてサ、夜を明すわ。

評　二六時中思に燃えて泣くことを叙べた。それを晝夜に引き分けて、蟬と螢と時節の景物二つをやとつて對偶せしめ、合掌の句法を取つた。委しくはあけたてば晝は蟬の、暮るれば夜は螢のといふべきを、互に讓り合はせて詞を省いて叙べた。さてかやうに一つ〳〵に、具象的分解的に叙べるのが、抽象的總合的にいふよりも、感觸を與ふる點に於いて、遙かに強いことが聞き知られる。

○

夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり

釋 ○夏蟲　夏季の蟲をばすべていつてよいが、こゝは火取蟲の事である。○一つおもひ　一つ心と同じ語例である。「おもひ」は戀の思で、火をいひかけてある。

大意　夏の蟲が身をほろぼしてしまふ事も、何かと思へば、火を取らうといふ一つの思に因つての事であつたわい、自分があの人の事を思つて、その思の火に身を燃やして、ついわが身をくづをらしてしまうのも構はぬと、同じ事さ。

評　夏蟲の火に入るのはその明るさに欺かれるので、決して戀の爲ではないが、火からの聯想で思ひの火に身を滅すものと觀じた。そして想像の辭樣たるべき場合を、斷定の辭樣に調へた點に、強くわが身の戀に結び付けて詠歎した感傷氣分が漂ふ。六度集經第八にある、

以レ火爲レ色、人爲二飛蛾一、蛾貪レ火、色身燒煮。

と全く同じ感想である。恐らくはこれを再演したものだらう。但經文は理を拆くに忙しくて、この譬喩の蘊含の味ひあるいひなしに及ばない。細く枯びた風體、戀歌の姿として元久時代の歌人の希つた所である。

○

夕されば袖とゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ

釋 ○袖に　袖なるにの意。

大意　夕暮になると人の戀しさが增して、涙がこぼれて、酷く乾きにくい自分の袖なのに、時節柄とて秋の露までが置き添ひくゝして、いよ〳〵濡れまさつて難儀なことよ。

評　夕暮はさびしさに、いとゞ人戀しく泣き暮される時、又悲しげな露のおく時である。かう湊合してくると、感傷氣分に凄然たるものがある。但やゝ理窟がある。宣長が、初句を三句の下に續けて解いたのは誤である。

○

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり

大意　何時といつても人戀しくない時はないけれども、格別に秋の夕方は戀しくて、合點の行かぬ事であつたわい。

評　樂天の詩の、

大抵四時心惚苦、就中腸斷是秋天。

の意に加ふるに、一日の中の殊に悲涼なる夕暮と戀とを以てした。この秋の夕べに戀を取り合はせることは、萬葉集卷二十、

我がせこが宿なる萩の花咲かむ秋のゆふべはわれをしぬばせ

の先例がある。けれどあながち如上の詩歌を撮合して、わが物としたのではあるまい。こんな感想は誰れも思ひ寄ることだから。極めて淡々と叙し去つて、卒直の點はいゝとも思ふが、やゝ説明に墮してゐる。秋上、

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

は全くこの歌から胚胎したものであらう。

下句、小町集にあやしかりけり秋の夕暮とある。

○

秋の田のほにこそ人を戀ひざらめなどか心にわすれしもせむ

釋　○ほにこそ　「ほ」は秀の義で、表面に顯はれるをいふ。初句は秋の田の穂とかけた序。

大意　自分はこの節の秋の田の穂に出るやうにあらはにサ、貴方を戀ひもせぬであらうが、しかし何として心には忘れもせうぞ、決して忘れはしない。

評　これは返歌らしい。理路にからまれてゐる憾はあるが、申譯の挨拶ならば仕方はあるまい。結句もやゝ纖弱の感もあるが、この歌の意趣の上から見れば、これでもよいやうである。

○

秋の田の穂のうへを照らす稲妻の光のまにもわれや忘るゝ

大意　この節の秋の田の稲の穂の上を照らす電の、ピカリと光る程の一寸の間にも、私はサ貴方の事を忘れるか、いや忘れはせぬわ。

評　私はかほどに思つても、貴方はさ程までにはとはかなんだ。これは結句の意調に因つて生じた餘意で、かう詠んで其の人の許に贈つたとすると、相對的の興味が生ずる。最短小時間を電光に喩へたのは、佛説の電光石火の譬喩から來たので、新規な點はない。只序としての價値を考へると、かの疊語や同語の聯想から發程した序歌よりは、多少含蓄の餘味がある。これも返歌らしい。

結句、六帖に君ぞ戀しきとある。

○

人めもるわれかはあやな花薄などかほに出て戀ひずしもあらむ

釋 ○人めもるわれかはあやな　「人めもる」は人目をはかりまもる意、卽ち人目を憚ることである。「あやな」は春下「山吹はあやなな咲きそ」の條に既出。

大意 今は人目を憚る我が身がまあ、何も人目を憚る身でもない、それを思はぬは無分別であつた事よ、されば何で花薄の穗に出るやうに現はして、戀ひずにサまあ居ようぞ、いざ表立つて戀せうわ。

評 あながち打ち出しても、差支のない間柄の戀と見えた。されば斷然意を決して打ち出さうといつたもの丶、實はなほ差ぢらひ澁つて相思の情を通じえぬ狀態にゐるのである。臆病な戀よ。形式は自問自答である。

○

あわ雪のたまればかてに碎けつ丶わが物おもひのしげき頃かな

釋 ○あわ雪　和名鈔に「沫雪、阿和由岐、其弱如三氷沫一」と見えて、弱くて水沫の如く消え易いからの名である。後世淡雪と心得て、春降るをのみいふとは差ふ。○たまればかてに　溜り難(ガテ)にの意。「かて」は元來下二段の動詞で、堪へ、敢ふなどの意。萬葉集に「ゆきかてぬかも」「ありかつましゞ」などあるは皆この意である。然るに、こゝはかてぬと同意に「かて」を用ひてある。蓋し異例である。

大意 木の枝などに、泡雪の溜るかと見れば溜りかねて、落ちて碎け〳〵するやうに、自分の胸がいろ〳〵に碎けて、さて〳〵物思の數々あるこの頃であることよ。

評 溜り難くして碎けるのは、地上の雪の狀でない。木の枝などに積るのをいつたのであらう。間斷なくくづれ落ちる狀が、物思の絶間なさを具象的に示してゐるやうにも思はれるので、序に用ひた。

○

おく山の菅の根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

釋 ○菅の根しのぎ　菅は麥門冬(ヤマスゲ)、箋菅の類をすべていふ。麥門冬にも、大葉小葉の二種ある。小野博いふ「大葉のは藪蘭、小葉のはジヤウガヒゲといふ」と。さて、「菅の根しのぎ」は、「菅の葉しのぎ」の誤だらう。「しのぎ」は押し靡かして降り徹る意だから、根では相應しない。萬葉集には、菅の葉しぬぎとある。○けぬ　「け」は消えの約語。

大意 奥山の菅の葉をおし付けて降る雪の消えるやうに、自分はもう消えて卽ち死んでしまふといつて遣らふかしら、かう物思が繁くては、如何にも溜らぬによつてサ。

評 三句までは序である。萬葉集卷八、

高山の菅の葉しぬぎふる雪のけぬとかいはも戀のしげけく

とあるを、一三耳遠い詞をこの時代のに改めて傳へたに過ぎない。戀に直面した者の窮極は、生かさもなければ死である。然し「けぬとかいはむ」はまだ死の境にまで到達した人の言葉ではない。只戀の苦悶を誇大にいひなして、相手に同情して貰ひたいまでゝある。「いはむ」といつても決していひ遣つたのではない。それ程の決

心はまだ無い。やはり獨言で一人で呻吟してゐるのである。それだけに却つていぢらしさが增す。情景兼ね到つて、風調高邁である。詞はすべて萬葉の方が優つてゐる。高山は殊に菅の葉凌ぎ零る雪に、恰好の場處ではないか。

古今和歌集卷第十二

戀歌　二

題しらず

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを　小野小町

大意　思ひ〳〵して寢たので、戀しい人が夢に見えたのであらうか、えゝその時に夢と知りもしたら、覺めずに居ようものを、殘念の事をした。

評　萬葉集卷十五、

思ひつゝぬればかもとなぬば玉の一夜もおちずいめにし見ゆる

の意を上句に約めた。これだけでは平凡の語だが、下句に至つて一層の趣向を立てた。夢と知つて夢を見る者は勿論ない。又覺めまいとしてもさう自由になるものでもない。然るにかくいつた沒常識に頗る詩味が發揚する。この感じの强いほど人を思ふ情が餘計に映出される。素より肺腑の語で、徒に語言の巧を弄するものと、その選を殊にしてゐる。

○

うたゝ寢に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

釋 ○うたゝ寢　假睡。

大意 ホンの假寢に戀しい人を夢に見た事であつた時から、夢といふ物は、なかなかよい物と、頼みにしはじめて來たわ。

評 夢幻と連ねて、はかない例に引かれた夢も、頼もしい所のあるを意外と感じた趣が、「夢てふものは」とある語氣に見はれた。「そめてき」とあるので、その後はくる夜もくゝ夢にまたも見えるかと頼まれる心持である。戀ゆゑにははかない夢をも頼まずには居られぬ。水に溺れる者は蘆の葉にもすがり付くと同じ心理であらう。それだけその苦悶の甚しさが思はれる。

○

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞきる

釋 ○いとせめて　最迫りて。○よるの衣　寢卷、夜著などをいふ。

大意 「衣を返して着て寢る時は、思ふ人を夢に見る」といへば、自分はひどくさし迫つて戀しい時は、せめて夢になりとも見て慰まうと思つて、寢卷を裏返しにしてサ寢るわ。

評 こんな俳諧が夙くからあつたと見える。萬葉集には、

吾妹兒に戀ひてすべなみ白妙の袖かへしゝは夢に見えきや　（卷十一）

吾背子が袖かへす夜の夢ならしまことも君に逢へりしがごと　（卷十一）

白妙の袖をりかへし戀ふればか妹がすがたの夢にし見ゆる　（卷十二）

など、皆袖を反すことを詠んでゐる。契沖が「衣を反さゞれば袖も反らざれば、袖反すは衣反すに同じ」と論じたのは賛成し難い。かやうの言は時代の推移に從つて、少々づつ變化するものである。只奈良時代には袖を反し、平安朝になつては衣を反して寢れば、人を夢に見るといひ慣はしたに過ぎない。迷信は實行に移つて、せめてもの慰藉にそんなたわいもない眞似でも爲て見るのが、戀の哀れな情合である。

あき風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむ暮るゝ夜毎に

素性法師

大意 秋風が身に入みて寒いので、日頃つれない人をサ、若し物の哀れさを知るようになつて來て呉れる事もあらうかと、頼みにすることよ、日が暮れて夜になる度毎にサ。

評 秋風の寒く吹く晩は、氣強い人の心も弱つて若しかしたら尋ねてでもくれるかと、纔に一縷の望を繋いで、下待つ心は哀れである。それも自分が秋風に對する感懐を本としたのだから、向ふは何と思つてゐるかわからぬ。いよくゝ覺束ない頼みである。冷たい夜床の觸覺から、温かい觸覺を戀した歌は、奈良時代の作にも多いが、これは百尺竿頭に一歩を進めた構想である。

この歌僧門の作としては不似合である。もし題詠でなくば、女に代つて詠んだものだらう。

しもついづも寺に人の業しける日、しんせい法師の導師にていへりけることばを歌によみて、小野小町がもとに　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめのなみだなりけり

釋 ○しもついづも寺云々　しもついづも寺は、和名鈔に「山城國愛宕郡出雲以都毛、在二上下一」とある。又、拾芥抄に二十一寺の中に、上出雲寺、下出雲寺が擧げてある。今上下御靈とあるその下御靈のことである。「人の業」は、人の追善の法會をいふ。「しんせい法師」は、上の物名の部に見えた人と同人だらう。古今集目錄には、眞靜とある。この法師が法會の導師として述べた說法の詞を歌に詠んで、小町の許に贈つた歌といふ意。その詞は、歌によると法華經五百弟子授記品の、

以二無價寶珠一繫二其衣裏一、與レ之而去、其人醉臥都不二覺知一云々。

の意を說いたと見える。意は、人々は皆佛性を具へてゐるが、痴にして覺悟しないといふ譬喩である。

大意　眞せいが談義に說かれた法華經の衣裏寶珠とは違つて、如何ほど袖に包んでも溜らずにこぼれ出る白玉は、何かと思つたら、戀しい貴方をえ見ぬ目から出る涙でありましたわい。

評　經文の寶珠は、衣袖に藏されても知られないのに、わが袖の涙の白玉は、重襲してもなほこぼれて露はれると反映させた。この手段は人をえ見ぬ遺憾さを、最も强く印象させる結果となる。加ふるに、涙の玉の混喩があり、語調は流滑である。

眞靜法師が衣裏珠の說法は、菩提心を勸める爲であつた。然るに作者の抱いたのは見當ちがひの戀心であつた。眞靜が聞いたら啞然とするだらう。否作者自身も實は意外に感じてゐるのである。かう當座の法語を采つて戲れかゝつた因緣を想ふと、小町もその法會に列つた女人の聽衆であつたらう。

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすかへしこまちわれはせきあへずたぎつ瀨なれば

釋 ○おろか　疎か。

大意　あの談義の聞きやうの疎かな涙が、袖のうへにそのやうに玉を成してとまるのです、その御法談に感に堪へた私の涙は、なかなかその位の事ではなくて、たぎり落ちる川瀨のやうですから、堰き止めようにも堰き止められませぬわ。

評　清行が無價寶珠をよそに、人を見ぬ目の涙の玉をいひかけて、慇懃の意を通じたのを、そ知らぬ風に輕く反して、私は尊い法談に、隨喜の涙を瀧つ瀨と溢したので、貴方の袖の白玉位はまだ〳〵疎な感じ方ですぞと、何處までも空とぼけて、信心話にしてたしなめてのけた。實によくこの情況にあてはまつた巧語言で、應對の辭令に嫻れた者でなくてはとても出來ない。語調が勁健で、作者の他作に似ない。序文に「强からぬは女の歌なるべし」との評があるのは、その概論である。

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた

六〇二　藤原としゆきの朝臣

戀ひわびてうちぬるなかに行き通ふ夢のたゞぢはうつゝならなむ

釋 ○たゞぢ　直に行く路。直路の義。○うつゝ　現實。

大意 思つてもく逢はれぬ爲に、戀ひ倦んで寢た間に、あの人の處へ行き通つたと見た夢の直路は、どうぞ現在の事實であつてもらひたいわ。

評 想は平凡である。

三句、新撰萬葉に行き返るとある。結句、寛平歌合にうつゝなるらむとあるは、意が通らない。

○

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ

釋 ○住の江　今の攝津の住吉。賀部に既出。○よく　避く。春下「春風は花のあたりをよきてふけ」のよきてを參照。

大意 書間まことに通ふ道ならば人目を避けもしようが、何で夜までも、夢のうちに通ふ路に、人目を憚つて避けるのであらうか。

評 初二句は序である。「よる浪」のよるは、浪の字を隔てゝ「夜さへ」と疊んだので、上の「小野の篠原しのぶれど」と同じ辭樣である。諸註の、いひかけと見たのはわるい。「住の江」は松の下枝にうち寄る波のけしきある所で、古歌にもいひ馴れ、人も見知つてゐるので取り出した。三句の下に、何故にの語を補つて聞く格である。

現に忍ぶ慣習がその儘夢にも見えたのを、目が覺めてから情なく思つて詠んだ幽怨の情致は、またすて難い氣味がある。語調は流滑で、白玉の盤上を走るに似てゐる。

わが戀はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき

をのゝよしき

釋 ○み山　春上「み山には松の雪だに」の條に既出。

大意 自分の戀は、山奥に隱れて生えてある草であればかして、段々と思の繁さが增るけれど、さうと知る人が無いわ。

評 「知る人の」と汎くいつてゐて、實は思ふ人一人をさしてゐる。戀一、

浮草のうへはしけれる淵なれや深き心をしる人のなき

と同型同調で、劈頭第一に、「わが戀は」と打ち出した調子は、對他的の意味があるので、自分一人がこんな特殊の境遇にあるやうにいひなした愚痴に戀のあはれさが認められる。四句はやゝ幽婉の味ひを殺ぐ。「まされど」をまさるをと改めたらばとも一寸思つてみたが、やはり「わが戀は」の強い調子には、これでよい。繁さまさるみ山隱れの草、かう聯想を馳せて、我れとわが戀の現在狀態に譬喩したことは、永い戀の懊惱に疲れて、心上に自身の行爲の批判を試みる餘裕を得た折の所作である。

結句、新撰萬葉に知る人もなきとある。

よひのまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひ増れる戀もするかな　紀友則

大意　わづかな宵の間さへも保ちさうもなく、命のはかなく見える火取蟲は、惑の甚しいものであるが、それにも惑の増つてゐる、愚かしい戀をまあ、自分はする事よ。

評　蠧蛾の火に入つて命を盡すのは端的である。故に、「宵の間もはかなく見ゆ」といふ。上の「も」は重い用例で口語のサヘモの意である。宣長は宵の間をもと、眞淵、景樹等は宵の間にもと解いてゐるが皆當らない。結句の調は、戀一、「あやめもしらぬ戀もするかな」の條にいつた如くである。理智の力は蠧蛾の惑溺に増つてゐるとわが戀を冷笑し、感情は一切を放下して戀の爲に夢中でゐる。

初句、寛平歌合に宵のまはとあるはわるい。結句、六帖に戀にもある哉とある。

○

ゆふされば螢よりけにもゆれども光見ねばやひとのつれなき

釋　○螢よりけに　萬葉集には、殊、勝、異などの字を、ケニと訓んである。格別に、もつと、勝れてなどの意。

○見ねばや　見えねばやの意。

大意　毎日夕方になると、あのやうに燃える螢よりもなほ格別勝つて、思ひの火が燃えるけれども、螢のやうに光が見えぬせゐかして、あの人が知らぬ顔してつれないのであらう。

評　「夕されば」の一句輕く看過してはならぬ。夕暮は當時思ひ人の許を訪問する時刻である。單に一日中の物悲しい頃であるのみではない。たまゝ〳〵その時刻から光り出す螢の人目につくのを感じて、自分の思ひにも光があつたらばと比較して、螢にも及かぬことが悔しまれる。

三句以下、寛平歌合にはもゆるとも光見えねば人ぞつれなきとある。

○

さゝの葉におく霜よりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける

大意　小竹の葉に置く霜はきつく冴えるが、それよりもなほ、思ふ人に逢はずに獨寢る自分の袖がサ、冴えまさつたわい。

評　笹の葉のさえることは既に萬葉に見えて、

笹の葉はみ山もさやに亂れども我は妹おもふ別れきぬれば　（卷三）

これを下に踏んだものである。さてそれを衣手に配合させての比興が山だが、平々である。

下句、新撰萬葉にわが衣こそさえ増りけれとある。眞淵は「この方古意にて、理もよろし」といつたが、既に上に「よりも」の語があるから、「こそ」とはいはぬがよい。

○

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

釋　○きえかへり　動作の至つて甚しさをいふ場合に、「かへり」の語を添へて熟語とする。立ち返る意としては

叶はない。

大意　あの自分の庭の菊の垣根におく霜の、消え入るやうに心も消え入つてサ、あの人が戀しくあつたわい。

評　この序は庭上の所見から來たものだらう、しみ〴〵戀ひ入つた趣が見える。

新撰萬葉には、二句以下菊の垣ほにおく霜の消えかへりてもあはむとぞ思ふとあつて、おのづから別裁である。

○

川の瀨になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ戀もするかな

釋　○玉藻　玉は美稱。○みがくれて　水隱れ（ミガク）ての意。

大意　川の瀨にはえて靡く玉藻の、水に隱れて知れぬやうに、思ふ人に知られぬ戀をまあ、自分はする事よ。

評　打ち出でもならず、獨くよ〳〵案じ入るのを、我れながら愚かしく思つた感懷である。上の「夏蟲にまどひまされる戀もするかな」と同調で、比喩の風情は一寸おもしろい。

以上五首の友則の作のうち、比較的これが優つてゐるやうに思はれる。

○

かきくらし降る白雪のした消えに消えて物おもふ頃にもあるかな　みふのたゞみね

釋　○した消えに　下方の融けるをいふ。

大意　空も闇まして降る雪の、表面はさも無くて下の消えるやうに、忍ぶつらさに心の内で消え入つて、物思をするこの頃でまあある事よ。

評　忍ぶ戀を詠んである。「下消えに消えて」と折り返した諧調は、例の事である。

六帖、及び後撰集冬、讀人しらずの、

冬の池の鴨の上毛におく霜のきえて物思ふ頃にもあるかな

（興風集には、浮きてぬる鴨の上毛におく霜のとある）

と、下句は同一であるが、これは「下消え」から續くので、意味がやゝ複雜である。

興風

君戀ふる涙の床にみちぬればみをつぐしとぞわれは成りける

釋　○涙の　涙が。○みをつぐし　水脈（ミヲ）つ杭（クヒ）。「つ」は連辭。航路の水脈に立てた標（シルシ）の杭（クヒ）をいふ。澪標。こゝはそれに身を盡しとかけた。身を盡しは身を滅すをいふ。

大意　あの海の中に立てゝある木を澪標といふが、貴方に戀ひ焦れる涙が、海の汐のさすやうに、床一面に滿ちたので、人に身を盡すといふ名の澪標とサ、私はなりましたわい。

評　涙に浸つて、床中に歎いて居るのを、涙の海の澪標となつたと誇張した比喩である。

「床に」は新撰萬葉に浦にとあり、「われは」は六帖、新撰萬葉に今はとあり、「けり」は六帖、寛平歌合、新撰萬葉、家集等にぬるとある。

○

しぬる命いきもやすると試に玉の緒ばかり逢はむといはなむ

釋 ○玉の緒ばかり　少しの間をいふ。萬葉集に數多見えて、玉を貫いた間に見える緒の短いことから出た語。萬葉には、又「玉の緒の間もおかず」と續けてある。

大意 焦れ死にに死にかけて居るこの命が、もしや生きもする事があるかと、物はためしに、玉の緒の短い間なりとも一寸逢はうと思ふと、あの人がいつて貰ひたい。

評 「死ぬる命」はもとより誇張の託語で、全篇この沙上に築いた塔である。よしそれがほんの情らしい慰めの詞に過ぎないまでも、「逢はむ」の一語にかゝつて滿足しようとする。戀を以て性命とし、逢ふを生く藥とするなる熱愛、人の同情を惹くにあまりある。

初二句、新撰萬葉集に消えぬべき命もいくやとある。結句、六帖、家集にはあひ見てしがな、續後撰集に再出したのには、逢ふよしもがなとある。

○

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

釋 ○人だのめ　「たのめ」は憑ませの約。

大意 人を思ふといふことは誠につらいので、無理に忘れようと思ふが、夢にその人を見ることがある爲に、もしやまことに逢はれるかと、賴みに思はれて忘れもはてず、その癖逢はれもせねば、あゝ夢といふ物は、人に賴もしく思はせながら益にも立たぬものであるわ。

評 思ふも心にまかせず、さりとて忘れるも心にまかせず、進退兩難、「夢てふものは」と、測らず怨嗟の聲を洩すに至つた。そのはかなさが味ひをもつ。

わりなくも寢てもさめても戀しきか心をいづちやらばよみ人しらず忘れむ

釋 ○戀しきか　「か」は歎辭。

大意 只無闇にまあ寢ても起きても忘られずに、戀しい事よ、この心をどちらへ遂ひ遣つたらば、戀しさが忘られようぞ。

評 忘れたいと要望するに至つて、戀はます〳〵頂天である。けれどもまゝならぬは心、空しく手を措いて、懊惱するに過ぎない。心を遣るの活喩が振つてゐる。

六帖、新撰萬葉には、初句わりなくぞ、三句戀ひらるゝとあり、五句、新撰萬葉にはやりて忘れむとある。

○

戀しきにわびてたましひ惑ひなば空しきからの名にやのこらむ

釋 ○空しきから　魂の抜け出たあとの骸をいふ。空しき乍、空しき故など解した註はわるい。○のこらむ　新

撰萬葉に立ちなむとあるによつて解する。

大意　餘り戀しいのにつらくなつて、魂が迷つて出てしまへば、跡のぬけ骸の身に、あれは戀して物の怪になつたといふ名が、世間にぱつとするであらうか。

評　これは往時盛んに信ぜられた物の怪の觀念から詠んだのである。物の怪には死靈生靈などあり、いづれも恨や嫉妬などで對手の人に魂が取り憑くのであつた。死靈は死後の事だから自身は痛痒を感じないが、生靈の方は困る。これは自分の生靈だといふ評判が立つと、恥かしくて、居ても立つても居られない。然し魂はふら〳〵と迷ひ出して、自分のいふ事を聞かないのだから始末にいけない。源氏物語葵の卷の六條御息所は卽ちこれであつた。こゝは物恨といふ程ではなく、只戀しさの甚しさを誇張して、物の怪の狀態に取り成していつた。三句、六帖に出でていなば、結句、新撰萬葉に名にや立ちなむとある。立ちなむはしつくり意が落着する。必ずこれに從ふがよい。「殘らむ」では死後の事になつて、意の疏通を缺く。

君こふるなみだしなくばから衣むねのあたりは色もえなまし　貫之

釋　○から衣胸のあたり　「から衣」の下に、のの辭を補つて聞く。又一說に「から衣」は胸にかゝる序と。

大意　貴方を戀ひ慕つて泣く涙がサ無いならば、自分の着物の胸のあたりは、思の火で色が燃え色になつてしまうであらうわ、涙の水がそばから消して行けばこそ、さもないが。

評　情のきはまつた時は、思ひ入れ泣きに泣いて、切なさを遣るすべもあるから、若しこの涙といふものがないとしたら、ほんにどんなものであらう。まづかうした大問題を提起しておいて、心火が赤く燃え出すだらうと誇張の結論を與へた。畢竟は涙のしげさの甚しいことを歌つたものである。「色」は「から衣」の縁語である。

新撰萬葉に、初句人を思ふ、四句胸のわたりはとある。

以上は、悉く寬平后宮の歌合の歌である。

題しらず

世と共にながれてぞ行くなみだ川冬も氷らぬみなわなりけり

釋　○世と共に　世と諸共に。「世」は我が經行く一生をいふ。○ながれ　存命へてに、流れてをかけた。○みなわ　水泡。水のあわの約。

大意　大抵の川の水泡は、冬は氷つて止まる物であるが、自分の生きてゐる世のかぎり、人を戀ひ慕ふので流れてサ行く涙の川、こゝの水泡は、冬でさへも氷らぬ水泡であつたわい。

評　三句の下に此處の水沫はの語を補はないと、「なりけり」の辭がうち合はない。これ千秋が「水とのみにては詞足らぬ故、水沫と云へり」といふ僻說の起る所以である。歌は凡下。

家集には、「行く」をふる、六帖には、「冬も」を水もとある。水もは意義を成さない。

○

夢路にも露やおくらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ

大意　夢に思ふ人の所へ通ふ道にも、露が置くのであらうか、なぜなれば、夜一夜夢に幾度もく〳〵、その道を通つた袖が、ひどく濡れて今朝も乾かぬわ。

評　これは不思議と驚訝した餘意がある。現前の涙の露から、夢路の露を聯想した。涙の一語を着けないのをこの趣向とする。六帖に、

秋の夜の夢路に露ぞおきけらし通ふとしつる袖ひぢにける

大いに劣つてはゐるものゝ、どれが先鞭を着けたものか。

二句、家集には露ぞおくらしとあつて、語調が勁健である。この頃の歌人に喜ばれたのは、やらむと和らかに調べ成す方にあつた。勅撰集でもあり、かたく〳〵姿をいたはつたと思はれる。

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける　　そせい法師

釋　○夢にも　「も」は歎辭。

大意　餘りに呆氣無くて、夢にまあ思ふ人を見た夜は、名殘をしさにその朝の床がサ、起きづらいことであつたわい。

評　平凡。初句の落ちつきもわるい。

上句、六帖には夢にても戀しき人を見たる夜はとある。これは叙述が明晰である。

いつはりの涙なりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし　　忠房

釋　○から衣　しのびにの語を隔てゝ、「袖」にかゝる枕詞。

大意　戀しい風をして、うそに泣いて見せる涙にありまするならば、人に見せようとはすれ、このやうに人に見られまいと、竊かに着物の袖を絞ることはありはすまいわ。

評　六帖に、

まことなき物思ひせば儚に涙はかねておとさざらまし

想は全く同じであるが、今のは洗煉を經て、遙かにまさつてゐる。涙は戀の標章で、神聖な物である筈だが、輕薄才子平仲の水をつけて泣いて見せた儔も、隨分ないではなかつた。人情は古往今來同一轍である。されば歌意を案ずるに、「さうは御親切に仰しやるが、人心は儚の多いもの故頼みになりませぬ」など、女のいつたのに對して、その返辭に詠んだものらしい。言外の餘韻は無いが眞摯の作で、この卷中にかういふ作を見ることは頗る嬉しい。

初句、後六々撰になほざりのとあるが甚だ面白味がない。結句、打聽本に、一本しをらざらましとありと見えるがわるい。

ねに泣きてひぢにしかども春雨にぬれにし袖と問はゞ答へむ　　千里

大意　實は戀故に聲を立てゝ泣いて、ひどく袖の濡れたのだつたけれども、若し人が問はうならば、これは春雨に濡れた袖だと返辭をしようわ。

評　人のあやしみ問ふことを豫期して、分疏（イヒワケ）の詞を案出してゐる。細の細に入る神經過敏、戀は苦しいものである。蓋し自分ながら氣が咎めるほど、涙に袖が濡れてゐたのである。上句はやゝ理路に渉つてゐるが、この性命は、「春雨に濡れにし袖と問はゞ答へむ」と、餘計な苦勞をする處にある。

わがごとく物やかなしき時鳥ときぞともなく夜たゞ鳴くらむ　　敏行朝臣

釋　○夜たゞ　夏部「さみだれの空もとゞろに」の條に既出。

大意　自分のやうに物悲しいのかしら、それで時鳥が、何時を時とまあいふこともなく、夜は夜通し、あのやうに鳴くのであらうぞ。

評　諸註、何故にの語を補ひ、それを「夜たゞ鳴くらむ」へかけて釋いたのは不當である。戀一、逢坂の木綿つけ鳥もわが如く物や悲しき音のみ鳴くらむ

の敍法と同じであるのを見よ。のみならず想も亦相同じい。この他、

秋の夜のあくるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ（秋上）

秋萩も色づきぬればきりぐすわが寢ぬごとやよるは悲しき（秋上）

足曳の山ほとゝぎすわがごとや君に戀ひつゝいねがてにする（戀一）

の類型がある。殊に「秋の夜の云々」の歌は作者自身のである。よつてその條の評を參照ありたい。鳴聲からした聯想、かう流行物のやうになつては、有難味がなくなる。

結句、六帖によゝに鳴くらむとある。

さつき山こずゑをたかみ時鳥なく音空なるこひもするかな　　つらゆき

釋　○さつき山　萬葉集にも見えた語で、五月頃の山をいふ。夏山といふに同じい。○空なる　うかくと落ち着かぬをいふ。

大意　この節の五月の山は、木葉が茂つて、何時もより梢が高さに、時鳥の鳴く聲が空にするが、その空といふやうに、自分は心もそゞろな戀をまあすることよ。

評　初句から「なく音」までが序詞であることは、萬葉集卷十一、

この山の峰に近しとあが見つる月の空なる戀もするかも

と同類である。既に「高み」とおいて「空なる」と承けては、いひ詰め過ぎて味ひがない。萬葉の方が遙かにまさつてゐる。

秋霧のはるゝ時なきこゝろにはたち居の空もおもほえなくに　　躬恒

大意　秋霧の立ち塞つて晴れぬやうに、戀の爲に氣の晴れる時が無い心には、霧に空がわからぬやうに、起居する空もそゞろ覺えぬのに、それを思ひやりもなく人はつれないわ。

評　心はひたすら焦燥して、乍ち起ち乍ち坐し、身も心も落付のなくなるのは、戀の常態なので、萬葉集にもこの趣を詠んだのが頗る多い。只、秋霧の緣語を延長して、「たち居の空もおもほえなく」まで持つてきたことは、この時代の風調で、これが作者の物である。

結句、六帖におほえざりけりとある。

581　深養父

蟲のごと聲に立てゝはなかねども涙のみこそしたに流るれ

大意　人目を忍ぶので、蟲のやうに聲を立てゝは泣きはせぬけれども、涙ばかりがサ、内證で流れるわ。

評　泣かぬは泣くに勝り、聲に立てぬは立てるに勝る。更に思ふに、蟲の聲に立てながら涙のないのに對した趣向ではあるまいか。戀する人の感傷に因へられた境遇を歌つたことは諾かれるが、叙法がやゝ理路に傾いてゐる。下の「人を思ふ心は雁にあらねども」の條を參照されたい。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれ劣らめやひとりぬる夜は

釋　秋なれば　戀一、「夏なれば」と詠んだのと同じい。

大意　獨寢た夜は、人戀しさに自分は泣くが、殊に時節が秋なので山中鳴り響くまで妻戀をして啼く鹿に、泣くことが劣らうか、いや劣りはすまいわ。

評　暮秋であり、山里であり、悲しげな響を傳へる鹿鳴があり、獨寐の宿である以上は、鐵石の心腸も碎けずには居るまい。ましてそれが戀する身であつたなら、實に溜らなからう。これ卽ち啼く事なら鹿には負けないと絶叫される所以である。「獨ぬる夜は」は最も主要の句で、戀の意はこれに依つて表現されてゐる。「秋なれば」は、何時とても戀する身は侘しく泣かれる趣を思はせてゐるが、この歌體から見ると、やゝ細瑣に傾く。秋山の下とよむまでなどある方が、おほらかで優つてゐるよう。

583　貫之

秋の野に亂れて咲ける花のいろのちぐさに物をおもふ頃かな

釋　○ちぐさ　千種の義。千草ではない。

大意　秋の野にあれあのやうに、入り亂れて咲いてゐる花の色のさまゞあるやうに、いろ〳〵さまゞに心が亂れて、物を思ふこの頃であることよ。

評　上句は序である。かやうの風體、着想は既に奈良時代に澤山ある。萬葉集に、

おほの浦のその長濱によする浪のゆたけく君をおもふこの頃（卷八）

國栖等が若菜摘まむとしめし野のしば〳〵君を思ふこのごろ（卷十）

只、平安の朝になつては、聲調のうるはしさを求めて、思ふこの頃とは詠まなくなつた。これらのけぢめをよ

く注意すべき事である。秋の野の花の千種、慵紅悶翠、艶に憂なる趣を想見させる。六帖に、

春くれば野べのまに〳〵生ひしける千ぐさに物を思ふ頃かな

とある。下句こそ同じであるが、上句は更に比等すべき辭樣でない。「亂れて」を思ひ亂れるに緣があるやうに解くのは鑿である。

初句、六帖に秋の野のとあるは諧ひがたい。

ひとりして物を思へば秋の田のいな葉のそよといふ人のなき　みつね

釋 ○いな葉のそよと　稻葉の戰く音のそよといふに、其よをかけた。其よはそれよの意。

大意 獨で以つてこのやうに物思をして、心を苦しめて居れば、誰れもその理由を知らぬので、秋の田の稻葉のそよといふ音の、それよ御道理よと、いつて吳れる人が無いわ。

評 「いふ人のなき」も、內實は思ふ人に顧みられぬ事をいつてゐる。獨で默つてゐては、いくら思つたとても、誰れも知らぬのは知れた道理なのを、珍しさうに「獨して物を思へば」と、くどくいひ詰めたその愚痴が、却つて下句の歎意を強めてゐる。「秋の田の稻葉のそよ」とかけた序、この頃では斬新だつたらうが、後人が猥りに踏襲して、或は荻の葉、或は篠原、或は檜の葉、竹の葉、桐の葉、すゝきなどに取り合はせて、そよと詠んだ。作者に取つてはさぞくちをしい事であらう。宣長が『思へば』は思ふにの意なり、古きいひざまなり」といつたのは粗い。秋上に「渡りはてねば明けぞしにける」とあるに同じ語法で、意釋にあるやうに、必ず略いた詞のあることを知るがよい。

六帖に、二句物をぞ思ふ、結句いふ人もなしとある。又、初句、新撰和歌には人知れぬとある。

人を思ふこゝろは雁にあらねども雲居にのみもなき渡るかな　ふかやぶ

大意 人を戀しう思ふ心は、あの空を鳴き渡る雁ではないけれども、空にばかりあこがれてまあ、泣いて月日を經ることよ。

評 わが泣くのから聯想して、鳥に獸に蟲に比興することは、上來の歌がその例を數多示してゐる。叙法例の理路に傾く。

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の戀しかるらむ　たゞみね

釋 ○かきなす　搔き鳴らすの意。萬葉集に、響の字、鳴の字を、ナスと訓んでゐる。

大意 この秋風に、搔き鳴らす琴の聲にまでも、何でかう理由もなく、人が戀しいのであらう。

評 琴に秋風をいふことは、李嶠が百詠に、「秋風入二夜琴一」或は、白氏文集の新樂府五絃彈の詩に、

第一第二絃、索々秋風拂レ松疎韵落。

などから出て、常套となつたらしい。「秋風にかきなす琴の」は、秋風の吹く折、何處にか彈き鳴らす琴の聲に

さへの意と輕く見たい。かくして四句の「はかなく」が利いてくる。又契沖、宣長などの說に、思のあまりに慰みがてら、作者自身が琴を彈じた趣に解したのは、贊成しにくい。景樹が「わが琴の音に人の戀しくなるといふは打ち任せたる理りならず」と難じたのは尤もと思ふ。上にも「秋のゆふべはあやしかりけり」などあるやうに、既に秋思の感哀を催してゐる折も折、たまたま悲しい物さびしい琴聲の聞えて來て、そゞろに相思の情の胸に迫つて堪へられないので、何故にかうはと怪訝したのである。家集には、「ある女に遣はしける」と端書がしてある。これは思ふ方の琴の音を、秋風の吹き傳へた趣である。事情は全くさうらしい。

587

まこも刈る淀の澤みづ雨ふればつねよりことにまさるわが戀　つらゆき

釋 ○まこも　眞菰。「ま」は美稱。菰は禾本科の水草で、蔣(コモ)や簾などに作る。○淀　山城國久世郡、淀川の北岸。この邊卑濕の沼澤に眞菰が叢生する。枕草子にも、此處の眞菰の事が出てゐる。

大意 眞菰を刈る淀の澤水は、雨が降ると常よりも格別に水嵩が增すが、その如く、雨が降ると何となく物寂しくて、常よりも格別に增る自分の戀であることよ。

評 黃梅時節の陰鬱な天候は、相思の人を愁絕させるに十分である。まして、家々の雨の心頭に滴る時、情火はいよ〳〵熱し來るを覺えるに違ひない。平生からして水量のある淀の澤水を序に借用したのは、平生も戀に沒頭してゐる作者であることを聯想させられる。「眞菰刈る」は卽ち梅雨頃の季節を語るもので、隨つて三句の「雨降れば」に親貼してゐる。三句までを序とした說もあるが、それでは、何の故に常より殊に增るのかが、明らかでない。序歌は序詞を除いて見ても、その意義が完全でなければならぬ。されば强ひて不完全な意義に解する必要もないから、初二句だけを序詞と見るのが穩かである。奈良朝後期の風調を存して、出語渾成の妙がある。とにかく貫之は當代の大家である。

やまとに侍りける人に遣はしける

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

大意 まだその國越をせぬ間は、世に有名な吉野の山の櫻の花を、人の話にばかり傳へ聞いて暮すことよ、といふが表面の意で、その如く、まだ國越をせぬ間は、大和に居られる貴方の事を、人傳にばかり聞いて、戀しく思つて月日を經ることよ、といふが裏面の意。

評 諷託の間に、多少の味ひを生ずるやうだが、その外には表裏二面の意とも、何の面白味もない平叙でありただ言である。初句殊に理をいひ過して面白くない。家集に、結句聞きや渡らむとあるは、やゝ姿致あるらしいが、それとても五十步百步である。

吉野山に櫻を詠むことは、この歌が抑もの始であらう。奈良時代には、山川の淸き河內など歌つて、山水の美は盛んに稱譽してゐるが、櫻に言及したのは一向ない。

彌生(ヤヨヒ)ばかりに、物のたうびける人のもとに、又、人まかりて、せうそこすと聞きて、よみて遣はしける

露ならぬこゝろを花におきそめて風ふく毎に物おもひぞつく　六二二

釋 ○彌生ばかりに云々　「物のたうび」は物宣ひの轉訛で、物いひけるの尊敬格である。當時の俗言であらう。「人まかりて」は人參りてといふに似てゐる。「まかり」の用法は古意と異なつてゐる。「せうそこ」は消息の字音。もとは人の生死にいふ詞を轉じて、安否を訊ふこととなり、又轉じて書簡をいひ、又人を音づれる事にもいふ事となつた。詞書は、三月頃に自分とある懇話をかはされた婦人の許に、又他の人が參つて音信をすると聞いて、詠んで贈つたとの意。○物おもひぞつく　つくは附着の義。

大意 花には露が置くが、その露でも無い自分の心を、花のうへに置き初めて、それ故、風の吹く度毎に、花が散らうかと、心配がサ起るわ、といふが表面の意で、自分の心を貴方にかけそめて、それ故餘所より消息のある度毎に、貴方のお心がその方へ散らうかと、心配がサ起るわ、といふが裏面の意。

評 「物のたうびける」「人參りて」など敬語を使つてあるのを見ると、その人は貴婦人らしい。折柄が彌生の頃なので、移ろひ易い花をその人に喩へ、誘ふ風を他よりの消息に擬へて、我が心から、仇なる花故に物思するといひ送つた。これ暗に花に耐久性のあるやうにと諷したのである。則ちその人に貞操を要求したのである。そこに含蓄の味ひがある。そして戀する人の輕い嫉妬心が活いてゐることが面白い。

結句、六帖に物をこそ思へとある。

わが戀にくらぶの山の櫻ばなまなくちるとも數はまさらじ　坂上これのり

釋 ○わが戀にくらぶの山　我が戀に比ぶに、暗部山をかけた。暗部山は春上「梅の花匂ふ春べは」の條に既出。

大意 自分の戀に比べると、暗部山の櫻花が、よしや絶間なく散るといふとも、その思の數は格別まさりはすまいわ。

評 物思のしげさをいふに、繽紛として飛ぶ落花の數を以て對比したのに、詩趣が搖く。くらぶのいひかけは無い方が簡淨でよいのだが、手のあるのを喜んだ時代の風調だから據ない。

ふゆ川のうへは氷れるわれなれやしたにながれて戀ひ渡るらむ　宗岳のおほより

釋 ○ながれて　流れてに、長らへてをかけたのは、例の事である。

大意 冬の川のうへは氷つて、下には水が流れてあるとも知れぬやうな自分の身かして、その氷の下を水の流れるといふやうに存在へて、心の内に絶えず戀しく思つて、月日を經てるのであらう。

評 「うへは氷れる」、「したに流れて」の對照、やゝ粘密に過ぎて煩はしい。

四句、一本に下にこがれてとあるはわるい。六帖に、初句ふる川の、結句戀しかるらむとある。ふる川もよくない。

たぎつ瀨に根ざしとゞめぬ浮草のうきたる戀もわれはするかな　たゞみね

釋 ○根ざし　根入りをいふ。

大意　たぎり流れる川瀬に、根もとが着かずに浮く浮草のやうに、何の取りしめも無い浮いた戀をまあ、自分はすることよ。

評　上句は序である。下句は、萬葉集卷十一に、

解衣のこひ亂れつゝ浮草のうきても吾は戀ひ渡るかも　（六帖にあるは、小異あり。）

とあるから斬新ではない。又後撰集戀二、六帖等に、

玉津島ふかき入江にこぐ船のうきたる戀もわれもするかな

と見えた大伴黒主の歌と同じい。黒主も忠岑の先輩である。然しこの下句などは、誰れでもいへる平凡な句だから、序の冠せ具合一つで、別の歌と認めることも出來る。たゞ瀧つ瀬に根ざしとゞめぬ浮草は、事實が疑はしい。瀧つ瀬は浮草の生える場處にふさはしくない。想ふに作者の意では、自分がさまゞいひ寄つても人が受け引かずつれないのを譬へたものかも知れないが、どうもしつくりこないと思ふ。

よひ〳〵にぬぎてわがぬる狩ごろもかけて思はぬ時のまもなし　とものり

釋 ○よひ〳〵　夜々の意。初夜の意ではない。○狩ごろも　狩衣（カリギヌ）に同じい。狩衣は輕裝の畧服。もと狩獵服であつた。

大意　夜々自分が脱いで寢る狩衣は、衣桁に懸けて置くが、その懸けてといふやうに、心に懸けて人を思はぬといふことは、片時の間も無いわ。

評　三句までは序である。戀一、「千早ぶる賀茂の社の夕たすき云々」の歌と同想同型であるが、序の敍述がやゝ簡淨でない。「よひ〳〵に」は狩衣をぬぐ時刻を表はしたのだけれども、肝腎の「時のまもなし」の感じを搔き亂すので面白くない。

三句、六帖にから衣とある。うち任せては、衣を總稱してゐる唐衣の方が穩やかであるが、「よひ〳〵にぬぎてわがぬる」とあるには、狩衣の方が作者の生活に緊密であらう。

○

あづま路のさやの中山なか〳〵に何しかひとを思ひそめけむ

釋 ○あづま路のさやの中山　逢坂の關より東（アヅマ）の方へゆく路をすべて「東路」といつた。「さやの中山」は和名鈔に遠江國佐野（サヤ）郡とある、その郡の中にある山の意である。後には小夜（サヨ）の中山と訛つていふ。○なか〳〵に　口語のなまなかといふに近い。○何しか　「し」は强辭、「か」は疑辭。

大意　かう氣强い人を、一體なまなかに、何しにサ自分は思ひ初めたのであらうか。

評　今更思ひ切られもせず困つたものよといふ餘意がある。悔恨の念は卽ち暗に自己の行爲を否認してゐるのであるが、情は情で勝手の行動を執るので、制馭する譯にもいかない。徒に悔恨しつゝもなほ戀に引きづられ續けてゆくのである。この苦悶は局外者の全然關知せぬだけ餘計に、切ないものである。初二句は、「なか〳〵に」の語を喚び起すが爲に置いた序である。なかの音の三疊すらあるに、「中山」、「なか〳〵」、「何しか」と、な

の頭韻を蹈んだのは、この聲調の和諧な所以であらう。疑問を用ひて姿致を取つてゐる。

○

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

釋 ○敷妙の　枕にかゝる枕詞。戀一「わが戀は人知るらめや」の條に既出。○みるめ　見る目に海松布をかけた。

大意 寢て居る枕の下に海はあるけれど、これは涙の海で、まことの海でないから、戀しい人を見る目といふ名の海松布は、生えぬことでサあつたわい。

評 上句、多量の涙と說破せずして、「枕の下に海」といつたのは、浮誇の嫌ひはあるが面白い。下句は、人を見る目も無い卽ち逢はれぬの隱喩である。この弄語は、戀一に、

早き瀨にみるめ生ひせばわが袖のなみだの川に植ゑて見ましを

ともあるから、當時の套語であらう。構想も涙の川を、「涙の海」といひ換へたるまでゝある。

初二句、六帖に君戀ふる涙の底にとある。

○

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほ氷りけり

釋 ○おもひ　思ひに、火をかけた。○よるの袂　夜の衣の袂の意。寢卷の袖をいふ。

大意 年數を經ても消えぬ思の火は、胸にありながらも、涙に濡れた夜の衣の袂は、やはり氷つたわい。

評 冬より春へかけた寒夜を、戀の涙にかきくれて濡れ明した人の作であらう。されば節物にも打ち合ひ、消えぬ心火にも對照が的確だから、濡れけりといはず、「氷りけり」と誇張した。語言の巧に著して、着想が平凡である。只涙の一語を隱したのがこの一ふしである。

結句、家集に氷りつゝとある。

わが戀は知らぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

つらゆき

釋 ○あらなくに　「なく」は否定のぬの延音。

大意 自分の戀は、案内知らぬ山路ではありもせぬのに、このやうに踏み迷ふ心はサ、實に難儀であつたわい。

評 「惑ふ」の語から聯想した不知案内の山路を、反喩に使つた。畢竟は技巧の歌である。

三句、家集にあらねども、下句、六帖になどか心のまどひけぬべきとある。風調體格の上から論ずると、三句本文の儘ならば六帖の下句がよからうし、下句本文の儘ならば、三句は家集に從ふ方がよからう。

○

くれなゐのふり出つゝ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ

釋 ○くれなゐのふり出つゝ泣く　夏部「思ひ出づるときはの山の時鳥」の條に解した。但「くれなゐの」は、この歌では序詞ではない。それは末に「色」の語で承けてゐるからである。

大意　戀の思に迫つて、紅を染めるに振り出し〳〵するやうに、聲を振り絞り〳〵して泣くので出る紅い涙には、袂ばかりがサ色が增つたわい、紅の着物一面に染めるとはちがつてサ。

評　かう言外に餘意を遺したから、「こそ」の辭は重い用格である。その袂のみ色の變る所以は、もはら涙を抑へるからである。紅涙は、甚しく泣く時は、涙が竭きて血が出るのをいふので、

楚人和氏得二玉璞一楚山中一奉二獻厲王一、王使二玉人相レ之、曰石也、王以レ和爲レ詐而刖二其左足一、及二武王卽レ位一和又獻レ之、王使二玉人相レ之、又曰、石也、王又以レ和爲レ詐而刖二其右足一、文王卽レ位、和乃抱二其璞一、而哭二於楚山之下一、三日三夜、泣盡而繼レ之以レ血。（韓非子）

楊貴妃、初承二恩召一、與二父母一相別泣涕登レ車、時天寒、淚結成二紅氷一。（天寶遺事）

など見えた支那の典故である。

○

白玉と見えしなみだも年ふればからくれなゐに移ろひにけり

大意　始の程は白い玉のやうに見えた涙も、段々に年を經ては、血の涙になつたかして、眞赤に色が變つてしまつたわ。

評　水精の玉が珊瑚珠と化つたと、涙の上における變化をのみ述べたのに、おのづから年月に添つて、物思のいよ〳〵はげしく增つた趣が躍々としてゐる。婉曲の妙は他の千言萬語に優る。紅涙卽ち血涙のことは、上にいつた。

結句、家集になりぬべらなりとある。

夏蟲をなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり　みつね

傳　○なにかいひけむ　愚なるものと何かいひけむの意。「か」は反動辭。○おもひ　思ひに火をかけた。

大意　これまで夏蟲を、火の中に飛び入つて、心から身を燃やす愚なものと、何としていつたであらうぞ、さうはいふべきで無かつたわい、今は心から自分もその通りに、思ひの火に身が燃えてしまひさうな樣子であるわ。

評　燭蛾の典故は、戀一、

夏蟲の身をいたづらになすことも一つおもひによりてなりけり

の條に擧げた。想も類似した上に、本據といひ、「おもひ」の弄語といひ、全く同一である。只敍述に多少の曲折があるので、姿致を殊にしてゐるに過ぎない。躬恒にしてこんな踏襲をやることは、聊か不審なことゝ思つたが、作者の同人友則も、上に、「宵の間もはかなく見ゆる夏蟲に云々」と詠んでゐるから、この頃の歌人の、好んで詠みあつた事柄であるらしい。

風ふけば峰にわかるゝしら雲のたえてつれなき君がこゝろか　たゞみね

釋 ○風ふけば云々　峰に棚引いてゐる雲が風に隨つて東西に別れて、ちぎれ〳〵になるをいつた。○たえて一向にの意。白雲の絶えてとかゝつた。○こゝろか　「か」は歎辭。

大意 風が吹くと、山の上を離れて行く雲が絶えるが、そのたえてといふやうに、たえて卽ち一向に氣強い貴方のお心であることよ。

評 三句までは序で、その風致も面白い。又句々力量があつて、ひどく緊張した響をもつてゐる。それが詠歎の意を強めることになる。この作者の作としては、蓋し逸調に數ふべきもの〻一つであらう。

結句、六帖、貫之集に人の心かとある、これは優つてゐる。下句、新撰萬葉に往き返りても逢はむとぞ思ふとあるは別の歌だらう。

○

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

釋 ○あはれ　可怜の意。

大意 あの空の月影に、自分の身を換へられる物であるならば、早速換りたい、さすれば、いかに氣強いあの人も、あゝ可愛いと思つて、見て呉れるでもあらうか。

評 月影の身にしみ〴〵と、人を戀ひつゝ詠んだらしい。「今夜月明人盡望」といつたやうに、月ほど世に愛でられる物も無い。乃ちこれを基想としてこの月に身を相換へたらばと思ひ寄るのも、無理ならぬ事で、絶望の餘りは理性を沒却して、到底不可能の希望をすら描くに至る、その焦慮煩悶の狀態が想ひやられる。この空想、この實感、兩々相對して、詩味湧然としてこゝに生じてくる。又この歌では、「月影」は月といふも同じ程の事である。月あれば影は必ずある物故に、うち任せては、月とも月影ともいふ。新後拾遺集に、天曆の御製、

月影に身をやかへましあはれてふ人の心に入りて見るべく

比較して、その巧拙を知られたい。

拾遺集に再出したのには、四句思はぬ人もとある。家集も同じい。六帖には、相思はぬといふ題に入つて、初二句、月影をわが身にかふるとあり、しかも作者を躬恒と署してある。歌のさまを思ふと或はさもあらう。

戀ひ死なばたが名は立たじ世の中の常なき物といひはなすとも　ふかやぶ

大意 もし私がこのまゝ戀ひ死なうならば、誰れも外の人の名は立ちはすまいわ、貴方は、人の生命は世の中の無常の物として、當然の事のやうにいひ成されても、貴方のつれない事は、人もよく知つてゐる事ゆゑ、やはり貴方の無情な爲、といふお名が立つことでございませうわ。

評 されば、餘り强顏（つれな）くなさらぬのが貴方のお爲でせうと、所謂お爲ごかしで、自分に同情を求めた手段の狡猾、語言の巧、また一顧の値がある。但萬葉集卷十二、

里人も語りつぐがねよしゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや

人目おほみたゞにあはずて蓋しくもわが戀ひ死なば誰が名ならむも

を藍本として、更に佛理を加味してゐる。その先潛りをして、先方のいひさうな辯疏の詞をまづ奪つておのが

釋 ○風ふけば云々　峰に棚引いてゐる雲が風に隨つて東西に別れて、ちぎれ〳〵になるをいつた。○たえて一向にの意。白雲の絶えてとかゝつた。○こゝろか　「か」は歎辭。

大意 風が吹くと、山の上を離れて行く雲が絶えるが、そのたえてといふやうに、たえて卽ち一向に氣強い貴方のお心であることよ。

評 三句までは序で、その風致も面白い。又句々力量があつて、ひどく緊張した響をもつてゐる。それが詠歎の意を強めることになる。この作者の作としては、蓋し逸調に數ふべきもの〻一つであらう。

結句、六帖、貫之集に人の心かとある、これは優つてゐる。下句、新撰萬葉に往き返りても逢はむとぞ思ふとあるは別の歌だらう。

○

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

釋 ○あはれ　可怜の意。

大意 あの空の月影に、自分の身を換へられる物であるならば、早速換りたい、さすれば、いかに氣強いあの人も、あゝ可愛いと思つて、見て呉れるでもあらうか。

評 月影の身にしみ〴〵と、人を戀ひつゝ詠んだらしい。「今夜月明人盡望」といつたやうに、月ほど世に愛でられる物も無い。乃ちこれを基想としてこの月に身を相換へたらばと思ひ寄るのも、無理ならぬ事で、絶望の餘りは理性を沒却して、到底不可能の希望をすら描くに至る、その焦慮煩悶の狀態が想ひやられる。この空想、この實感、兩々相對して、詩味湧然としてこゝに生じてくる。又この歌では、「月影」は月といふも同じ程の事である。月あれば影は必ずある物故に、うち任せては、月とも月影ともいふ。新後拾遺集に、天曆の御製、

月影に身をやかへましあはれてふ人の心に入りて見るべく

比較して、その巧拙を知られたい。

拾遺集に再出したのには、四句思はぬ人もとある。家集も同じい。六帖には、相思はぬといふ題に入つて、初二句、月影をわが身にかふるとあり、しかも作者を躬恒と署してある。歌のさまを思ふと或はさもあらう。

戀ひ死なばたが名は立たじ世の中の常なき物といひはなすとも　ふかやぶ

大意 もし私がこのまゝ戀ひ死なうならば、誰れも外の人の名は立ちはすまいわ、貴方は、人の生命は世の中の無常の物として、當然の事のやうにいひ成されても、貴方のつれない事は、人もよく知つてゐる事ゆゑ、やはり貴方の無情な爲、といふお名が立つことでございませうわ。

評 されば、餘り强顏（ワレナ）くなさらぬのが貴方のお爲でせうと、所謂お爲ごかしで、自分に同情を求めた手段の狡猾、語言の巧、また一顧の値がある。但萬葉集卷十二、

里人も語りつぐがねよしゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや

人目おほみたゞにあはずて蓋しくもわが戀ひ死なば誰が名ならむも

を藍本として、更に佛理を加味してゐる。その先潛りをして、先方のいひさうな辯疏の詞をまづ奪つておのが

物として、攻道具に使つたことは流石である。三句、景樹が「世の中はとあらでは、その意徹らず」といつたのはなか〳〵に僻言で、「常なき物」は世の中をいつたのではない、人の壽命を指したものである。

津の國の難波のあしのめもはるにしげきわが戀人知るらめや　つらゆき

釋 ○津の國の難波　津の國は攝津の國の古名、難波の津あるより負うた名である。和名鈔に「攝津國延暦十三年停レ職爲レ國」とあるも、なほ國文國歌などには、津の國と書いた。難波は今の大坂の地。○めもはるに　目も遙にの意。見渡しの遠いをいふ。上から續けて、蘆の芽も張るといひかけたとする說は穿鑿である。「め」は見、えの約。

大意　津の國の難波の浦の蘆が、目も遙々と見渡す限り生え茂つてある如くに、繁く物を思ふこの自分の戀を、先の人が知らうか、いやこれ程であらうとは知りはすまいわ。

評　先方の人が知つたなら、必ず同情せずにはおくまいにの餘意がある。下にのみ思ひ包んだ戀であらう。長高の體である。上句は、萬葉集に、「春草のしげきわが戀」などあると同想の序。

○

手もふれで月日へにける白眞弓おきふしよるはいこそ寐られれね

釋 ○月日へにける　この句下へ續いては、一首の意がどうしても聞き取りがたい。諸註、さまざまに釋きなしてはあるが、牽强で諾はれない。打聽本には、へにけりとあつて、切れてゐる。それなら聞える。假令、かうした準據の證本がないとしても、こゝで句は斷るべきである。思ふに誤寫のまゝに傳はつて來たのだらう。○白眞弓　和名鈔に、「檀、木名也、和名萬由美」とある。伊勢貞丈は「この木、木理細かに其の性ねばくしなやかにして、弓材には甚だ宜し。葉も幹も大方玉椿に似たり。皮を剝けば、木の肌細にして色白し、云々。檀を弓の上材とする故に、眞弓の稱を負せたるなるべし。眞は美稱、白眞弓は、檀にて製れる弓を、白木のまゝにて用ゐるをいふ」、宣長は「木の色白き故にいふ」など諸家の說がある。さてこれは、下の「おきふし」の序に用ひた。弓射るに、古くは、その鉾を或は起し、或は倒すことがあつたのであるらしい。古事記、書紀、萬葉集などに、弓腹振立て、弓弾振起し、弓上振起しの類、數多見えてゐる。眞淵が、弓射る人の起伏する射禮のあつたといふ說は覺束ない。○よるは　夜に寄るをかけた。寄るは弓引けばその本末が體の方に寄つてくるからいふ。○いこそ寐られれね　「い」は寢又は宿の意。

大意　心のうちにばかり思つて、あの人には手さへも觸れずに、長い月日を經て來たわい、今はもう思が嵩じて白眞弓の起伏しするやうに、夜は起きたり伏したりして、夜の目もサ寐られぬわ。

評　例の轉輾反側の意である。序詞の「白眞弓」の緣で、掛け離れて居ることを、「手も觸れで」と轉義した。二句でけりと切れば、譯も無く聞える歌なのに、「けり」とある原木によつて、季吟は「手も觸れず久しく置きたる弓は節起きなどして、癖の出來る如くに」といひ、廣蔭は「手も觸れで月日を經たる白木は、强くて引寄せて起伏しさすることも心に任せぬ如くに」など解いて、譬喩の不完全となるのも忘れ、宣長は不得要領の解を下し、景樹は解し難しと投了したのは、皆その誤寫のあるのに心づかなかつた失考である。

結句、六帖、家集に物をこそ思へとある。

○

人しれぬ思のみこそ佗しけれわがなげきをばわれのみぞ知る

大意　先の人に知られぬ戀の思ばかりはサ、仕方も無く難儀に思はれるわい、自分の歎きをば、自分ばかりがサ承知して居るわ。

釋　おのが行爲の愚さを自分から嘲つてゐる。さりながらやはり利口にはなれないで、思ひ歎くより外のない人の作である。「のみ」の語、無意味に重複して、洗煉の作とも思はれない。

結句、家集にわれのみぞきくとあるを景樹はたすけていふ「歎きは長息なれば、その聲を聞く由なり」と。

友則

言にいでていはぬばかりぞみなせ川したに通ひて戀しきものを

釋　○言に　言葉に。○みなせ川　攝津の國山崎のあなたに水無瀬といつて、惟喬親王や後鳥羽上皇によつて有名となつた處もあるが、本來固有名詞ではない。何處にまれ、水の無い川、或は砂の下を水は通つて、うはべに水の無い川をいふ。萬葉集に、水無し川とあるのも是れで、みなし、みなせと轉つたのである。水無瀬の瀬はあて字である。さてこゝは「したに通ひて」の序に用ひた。

大意　スレヤ戀しいと、詞に出していはぬだけの事ぞよ、丁度水無瀬川の、うはべは水の無いと見えて底には水の通ふやうに、自分も心のうちには思が通つて戀しいものをサ。

評　かうとも、あの人はよう知るまいと打ち歎いた餘意がある。水無瀬川は、萬葉集に、「水無瀬川下ゆわれ痩す」など、先例がないではないが、譬喩がいかにも恰好である。戀三に、この作者はまた、「かくれ沼の下に通ひて戀ひはしぬとも」の詠がある。好んだ口癖であるらしい。

君をのみ思ひ寐にねし夢なればわが心から見つるなりけり　みつね

釋　○思ひ寐　思ひながらに寐入るをいふ。

大意　戀しい人の事を、一途に思ひながらに寐て見た夢なので、逢ふと見たのも、やはり自分の心がらと見たのであつたわい、夢のうちには、逢つて呉れた貴女のお心を、嬉しく思つたがなあ。

評　逢ふと見た夢は自分の思ひがらで、先方には無關係であつたと氣が付くと、なまじひに物思の種で、見ずともの夢であつた。かう反映の意を味ふ時は、また多少の感哀があるやうである。萬葉集卷十二、

吾がこゝろと望み思へばあたら夜のひと夜もおちず夢にし見ゆる

に胚胎して、更に一段の結構を進めたものである。恐らく贈遣の作であらう。

命にもまさりてをしくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり　たゞみね

大意　二つ無い命にも優つて、惜しく思はれる物は、世に無いと思つて居たが、さうまで惜しいものは、戀しい人に逢ふと見る夢のまだとくと見切らぬうちに、このやうに覺めるのであつたわい。

評　誇張といつてしまへばそれまでだが、高度の情熱は、輕重の分別をさへ失して、命も物の數でなくなる。見果てぬ夢の悔しさが思ひ遣られる。突梯の狂想がこの好個の詩を成したものである。家集に、「昔物などいひし女のなくなりしかば、あか時方の夢に見果て侍らで、さめ侍りしにかば」とある詞書は、事情を解せぬ後人のさかしらに書きなしたものと思ふ。死んだ人の上では一向おもしろくない。

梓弓ひけばもとするわがかたによるこそまされ戀のこゝろは　つらき

釋　○梓弓　春上「梓弓おしてはる雨」の條に既出。こゝはたゞ、弓といふに同じい。○もとする　弓の本弭（モトハズ）末弭（ウラハズ）の方をいふ。○よるこそ　寄るに、夜をかけた。

大意　弓を挽けば、その本末が自分の方へ寄るが、そのよるといふ夜がサ、晝よりも格別に、人戀しく思ふ心は增るわ。

評　上句は序で、隨分器用によみこなしたものである。夜の戀ひまさるは、氣の散亂する事なしに、感傷し易い時だからである。上の貫之の「白眞弓おきふしよるはいこそ寐られね」に類似した修辭着想であるが、ふつくりした味ひはこの歌にある。景樹は、「今更さと思知りたるが尤も切なる限にて、いと哀なり」と評した。結句、六帖に戀しきことはとある。この方的實であると古人はいつた。思ふに、語調をなだらかならしめようとして、撰者等の改めたのかも知れない。

わが戀はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ　みつね

大意　迷ひぬいた自分の戀は、何處へさして行くといふ行方も知られず、何處までといふ果も無いわ、たゞ思ふ人に逢ふを行き止まりと、思ふばかりであるぞ。

評　逢へばこの苦悶はやむといふ。その一切を放下してひとへに逢ふべく思ひ入つた熱誠は、木石も感ぜしめる概がある。限りも無い物と揚言しておいて、一轉語を下してそれに限りをつけた頓挫が、この巧處である。

○

われのみぞ悲しかりける彦星もあはですぐせる年しなければ

大意　世の中に自分ばかりがサ、悲しい身であつたわい、あのあはれな例に引く彦星さへも、一向逢瀨の無い自分とは違つて、年に一度の契はあつて、逢はずに過ぎた年がサ無いから。

評　世におなじ悲境に沈淪する者があると思へば、自分ばかりでもないと、自然慰めもされる。されば逢はずして日を經る頃は心細くはあるものゝ、なほ天上には彦星があると思つて慰んでゐたのを、ふとその彦星でさへも、七月七日の年に一度の會合はあると思ひ寄つて、遂に天にも地にもわが儔が無いと知つた時、ほんにどんなに悲しい心地がしたらう。牽牛織女を戀の比興とすることは、夙く奈良時代にはじまつて、この頃に盛んで

あつた。さて、この逢瀬のないのは、女のつれない爲か、それともまた、さる契ある彦星を引證した點から見ると、素より知り合つた中に、障る事が出來ての事か、いづれでも意味はとほる。三句、六帖にたなばたもとある。

今ははや戀ひ死なましをあひ見むと　ふかやぶ
頼めしことぞ命なりける

釋 ○あひ見む　「あひ」は輕い接頭語。逢ひの意ではない。萬葉集には、皆、相の字が書いてある。○ことぞ「こと」は言の意。事ではない。

大意　もうはや焦れ死んでしまはうものを、何時ぞや逢はうと、あの人が約束して、頼みに思はせたその一言がサ命となつて、かう生きて居るのであつたわい。

評　言詰けのよかつた儘に、よもやにかゝつて綱引いた戀であらう。源氏物語夕顔の卷に、
うつせみの世はうき物と知りにしをまた言の葉にかゝる命よ
この類の着想はなほ澤山ある。蓋したしかに世間に多い事實である。

たのめつゝあはで年ふるいつはりに　みつね
こりぬ心を人は知らなむ

大意　逢はうと約束して、頼みにさせ〳〵して置いて、逢つても呉れず年を經る毎に、懲りもせず、やはり頼みにして待つて居る自分の心底を、かの人は知つて貰ひたい。

評　虚僞と眞實とを對照させて、彼れの羞恥心を刺衝し、その悔恨の念を轉じては、自分に同情を寄せるようにと希つた。僞に凝りぬ心長さもつまり戀なればこそで、哀れである。
この歌、後撰集戀五に再出して、詞書に「久しくいひ渡り侍りけるに、つれなくのみ侍りければ」なりひらの朝臣とあつて、伊勢が返し、
夏蟲のしる〳〵まどふ思せばこりぬ悲しと誰れか見ざらむ
といふをも擧げてある。これは枇杷左大臣藤原仲平公の官位卑い時分の歌で、なかひらと假名に書いたのを、なりひらと寫し誤つたものである。まこと業平ならば、伊勢とは時代が出會はない。伊勢集にもこの贈答が載つて、作者は仲平である。仲平は躬恒と同時の人であるから、作者の誤記などはあるべき筈がない。後撰集にわざ〳〵業平と署して再選したことは、頗る異しい。
再考、古今集撰著の頃は、仲平は官位のまだ淺い三十歳ばかりの壯年で、伊勢の御との關係は、なほ久しい以前からあつたらしい。對手の伊勢は歌人の聞えもあり、餘り拙劣の歌を出すのも、殘念できまりがわるいので、斯道の名匠たる躬恒に誂へて詠ませたのかも知れない。そして贈つたのだらう。仲平の甥に當る師輔が大納言だつた時、わざと貫之の家を訪ねて、魚袋の歌を乞うた咄を思ひ合はせるがよい。さて、躬恒はこの集の撰者として、自分の作だから自分の歌として載せたのだらう。伊勢の御はまた仲平が贈つたのだから、仲平の自作と思つて、集にも書き留めておいたのを、後撰集の撰者達が伊勢集を過信して、古今を誤とし、作者をあらためて更に收錄したものと思はれる。

命やはなにそは露のあだ物を逢ふにしかへばをしからなくに　　とものり

釋 ○命やは　下に惜しきの語が略かれてある。かう初句で切る解は、廣蔭説によつたのである。長野義言は、「命といへば大切なる物のやうに聞ゆれど、人の身は何さるものならんぞといへるにて、さるものにはあらず、只露の如く空なるものをといふ意なり」と説いてゐるが、初二句の連續が十分に解かれてない。○なにそは離別「かへる山何そはありてあるかひは」の條に、委しく註してある。○露のあだ物を　露の如き空物なるを（アダノ）の意。「空」はかなくて當（アテ）にならぬをいふ。

大意　大切に人の思ふ命がサ命かい、何それは露同然のはかないつまらぬものを、思ふ人に逢ふのにサ換へるならば、この命をしまふ事は一向惜しくは無いのに、それでも逢つて呉れぬので、仕方が無いわ。

評　逢ひだにせば死をも辭せじの意を、「逢ふにし換へば云々」といひ換へた。洗煉の語である。凡想ならば、まづその命が極めて貴重な所以を述べて、さて戀の爲には惜しまぬ趣に取り成すべきを、これは開口一番命を物にもあらぬやうに罵倒し去つて、逢ふに換へば、寧ろ餘程換へ徳であるやうに喝破した。全く意表の語である。高潮の情熱に驅られて、冷靜を失つた想の矯激で、辭樣また奇で、實におもしろい作である。この種の風格は、全然業平朝臣集中に見るべきもの、延喜の歌人にして在五の壘を摩し得たのは、實に非常の好成績を擧げたといつてよい。上句は、或は當時の口語の辭樣ではあるまいか。

初二句、六帖に命かは何そも露のとあり、家集の一本には、また命やもとある。伊勢物語に、「思ふにはしのぶることぞまけにける逢ふにし換へばさもあらばあれ」とあるは、この下句と、戀一、「色には出でじと思ひしものを」の歌の上句とを撮合したもので、筋が立たない。

古今和歌集卷第十三

戀歌三

彌生のついたちより、しのびに、人に物をいひてのちに、雨のそぼふりけるに、よみてつかはしける　在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめ暮らしつ

釋 ○彌生の云々　「ついたちより」は打聽の一本についたちばかりとあるがよい。「物を」は一本に物らとある。「物をいひて」は男女の話らひをなすをいふ。「そぼふり」はショボ〳〵と降るをいふ。この詞書は、伊勢物語に、

昔男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家未だ定らざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。形よりは心なむまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。それを、かのめめ男打ち物語らひて、かへり來て、いかゞ思ひけむ、時は彌生のついたち、雨そぼふるにやりける。

と見えた。景樹いはく、「この詞書は、勢語の文を抽き入れたるにて、尤も拙し。紀氏の文は、勢語の企て及ぶ所にあらず。さるに、この文勢語に劣れること論なし。紀氏にまがへて見るは淸言なり。こは題しらずの歌な

るべし。集次も、不逢戀なるべきなり。この詞書ありては、逢戀の意になれり」と。紀氏の文は勢語の及ぶ所にあらずと、一概に論じてしまつたのはやゝ偏斷に失するが、この詞書に就いての說は至極同感である。

○春の物とてながめ暮らしつ　暮春の頃など長雨は降り勝なので「春の物とて」といつた。「ながめ」は、長雨に詠めをかけた。詠めは長目の義で、物思しつゝ、見るともなしに物を見詰める貌である。

大意　物思に亂れて夜の目も合はず、さればとて起き上りもせず又眠りもせずに、やう〳〵と一夜を明かしては、やれ嬉しやと思ふに又、晝は晝で、この節の春の物ぞといふことで降る長雨に、一日辛氣に詠め暮らしましたわ。

評　編次のさまを思ふと、意は不逢戀なるべく、さて歌はその女の許に贈つたものであらう。夜もすがら輾轉反側して物思するが、それでも夜が明ければ、物に紛れて思の慰む事もやと、漸く待ち明かしたのに、又折柄空がかき曇つて、雨さへ降るので、その一日を詠めくらしたのは、どんな心地がするであらう。かう晝は晝で物思をすることの生憎な趣が、三句の「ては」の助辭に依つて表現される。等閑に看過してはならない。終日終夜を日を經て思ひ戀ふるさま、戀一、

あけたてば蟬のをりはへなき暮らしよるは螢のもえこそまされ

とほゞ同趣で、これは修飾に春雨を用ひたのみが差つてゐる。なほその歌の條を參照ありたい。筆路縱橫、更に窘束の態がない。但この朝臣の作としては、決して上乘のものではない。

業平朝臣の家に侍りける女の許によみてつかはしける

つれ〳〵のながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし　としゆきの朝臣

輝　○業平朝臣の云々　伊勢物語に、

昔なまあてなる男の許に、ごたちありけり。それを内記なりける藤原敏行といふ人よばひけり。この女、顏かたちよけれど、未だ若ければ、文もをさ〳〵しからず、詞もいひしらず、況や歌はよまざりければ、かの主人なる人、案を書きてかゝせてやりけり。めで惑ひにけり。さて男のよめる。

と詞書して、この歌をあけてある。○ながめ　詠めに、長雨をかけたことは、上の歌に同じい。○涙川　地名でない。混喩である。

大意　打ち續いて雨の降る頃は、徒然なのにつけて、いよ〳〵戀しさがまさつて、長雨といふ名の詠めをする爲に、水嵩の增る涙の川に袖ばかり濡れて、逢ひたくても逢はれさうな模樣も無いわ。

評　霖雨の徒然には、外に氣の紛れる仕草もないから、思ふ事ある人の、いよ〳〵堪へ難い頃ほひであらう。「涙川」は、長雨に川水の增す聯想から涙に誇張の比喩を用ひて承けたに過ぎない。故にこゝの「川」は主眼の字でなく、輕く使はれてある。それを頗る重く見て解釋した眞淵、宣長等が誤を襲つて、藤井高尙が、

長雨には川の水增して深くなれば、渡らむとしても袖を濡らすばかりにて、渡るべきやうなきをもて、一うたの詞を仕立てたるなり。思ふ人に逢ふことを、川を渡るに喩へたること例あり。

といつたのは鑿である。渡るといふ語は、全然歌の上にない。但返歌の方は、渡つて袖のぬれたことに取り成

して詠んでゐる。それが贈答歌の常手段である。又「涙川」の造語は奈良時代になく、六帖及びこの集に頗る多いことを思ふと、平安期の流行語と見える。特にこの贈答二首がその先驅をなしたものらしい。「逢ふよしもなし」の結句は、萬葉にも語例が多過ぎるほどある。

四句、伊勢物語、六帖、家集等には袖のみひぢてとある。次の返歌に、「袖はひづらめ」とあるに合はせて考へると、本文の、「ぬれて」とあるはよくないかも知れない。わざと詞をいひ換へたのだといへばそれまでだが。

かの女にかはりて返しによめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながると聞かばたのまむ

釋 ○かの女云々　この詞書の書きざまは拙い。勢語には、「返し、例の女にかはりて」とある。思ふに、もとは返しとのみあつたのを、勢語によつて書き加へたものかも知れない。景樹いふ、「上の歌の詞書は『女の許によみて遣しける』とのみありけむを、勢語によりて業平云々の語を入れ、この返しも『よみ人しらず』なりけむを業平の名を署せしならむ。この次なる『徒に行きては歸る云々』の歌は詠人不知なるを、勢語には『在原なりける男』と、業平めかせたるなど、いろ〳〵に繰れるものなり」と。○あさみ　淺み。こゝの「み」は、サニ、又、クテと譯すべき副詞格の助辭であるやうに、眞淵以降の註者は解したが、なほ舊註、及び契沖、雅嘉等の說の如く、形狀體言と見るのが穩やかであらう。

大意 貴方は「袖ばかり濡れて」と仰しやるが、一體河水の淺い處こそ、渡りなどするに袖は濡れるでしよう、涙川がそのやうに淺い事では、頼みにはなりませぬ、袖が濡れるどころか、貴方の御身までが流れると聞きませうならば、それは深い涙川で、御思の程もさこそと存じまして頼みに致しませうわ。

評 長い袖が水に漬いて徒渉する位の水は、淺いにきまつた事だから、

廣瀨川袖つくばかり淺きをや心深めてわが思へらむ　（萬葉集巻七）

澤田川袖つくばかり淺けれど久邇のみや人高橋わたす　（催馬樂）

など、古へより詠み來つてゐる。こゝもその意である。「つれ〴〵の詠めに增る涙川」に袖が濡れるといふは、既に甚しい誇張であるのに、なほも不充分として、今一倍元を掛けた「身さへ流る」の意表の奇言、これ小さな虛を衝くに、更に大きな虛を以てしたものである。戀二に、

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず瀧つ瀨なれば

と小町が返歌したのも、同一の筆法である。この大膽な誇張は、尋常一樣の歌人の、とても出來得る處でない。この作者は全く業平であらう。

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき

釋 ○よるべなみ　寄方無さに。○影となりにき　この「影」は影身に添ふなどの影である。戀一に「戀すればわが身は影となりにけり」、「篝火の影となる身のわびしきは」などの影は、痩せ細つたのを形容したので別である。混じてならぬ。

大意 不斷貴方に近寄るすべが無いので、身をこそかうして遠く隔てゝ居れ、しかし戀しく思ふ心は、不斷貴方

のそばを離れずに、貴方の影となつてしまひましたわ。

評 戀心にあくがれた人の作である。形と影とは必ず相伴ふものであるから、相副ひて離れぬ意を、「影となる」と轉義した。遠近の合拍はこの組織の骨子である。

○

徒にゆきては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

釋 ○來ぬる　上に「行きては」とあるので、返るといふ意になること、往來の來と同じい。○物ゆゑに　物乍にの意に解するのは早い。下に最早ゆくべきではないにの語を補つて解するがよい。○見まくほしさに　見むことの欲しさにの意。「まく」は、むの延言。

大意 思ふやうに逢はれずして、折角往つては空しく返り〳〵する物なので、最早ゆくべきでもないものを、それを逢ひたいと思ふ心にサ、誘ひ出されゝ〳〵しては、又しても往き又しても往きすることよ。

評 詩の召南の、

陟彼南山、言采其薇、未見君子、我心傷悲、云々。

の趣に彷彿してゐる。上句、やゝ理路に渉る嫌ひもある。但、「ゆきて」の下に、わづかに「は」の辭を點出して、幾たびも往來する趣を現はしたり、能ふかぎり多くの語言を省略したりなど、叙述の精巧は頗る見るに足るものがある。

この歌の作者、伊勢物語では例のよみ人しらずである。六帖には人麿の名を署してある。もとより風體が殊つてゐるから信ぜられない。

○

あはぬ夜のふる白雪と積りなば我れさへともにけぬべきものを

この歌は、或人のいはく、「かきのもとの人丸が歌なり。」

釋 ○白雪と積りなば　白雪と共に積りなばの意。「と」の辭早く解すると、白雪の如くともいはれよう。花と散る、雪と降るなど皆この意。

大意 思ふ人に逢はぬ夜が、この降る雪と同じやうに、幾夜もゝ〳〵積つたなら、又この雪の消える時分に、え逢はぬ悲しさに、自分の命までが共に消えてしまひさうであるものを、さても逢はれぬことかな。

評 一度逢つて後、故障が出來てか、人が逢つてもくれない頃、雪の降るのを見て、忽ち感興を發して、わが運命を卜すると、遂には雪とおなじ逕路をたどつて消えてしまはうかとはかなんで、無情な戀人を怨んだものと思はれる。或はかう詠んで、その人に贈つたのかも知れない。譬喩の親貼なのはこの巧處で、また拙處であらう。結句の「を」の辭を解して、景樹は、「八重垣造るその八重垣を」、「夜には九夜日には十日を」などの、をと同じ歎辭であると論じたが、上來の語勢を味ふと、言外になほ餘意ののこるほどに、強い調子に聞きなされるので、やはり抑揚の意味に用ひられた辭と解するのが穩やかだらう。

左註は信ぜられない。風調叙法すべて人麿には似もつかない。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢ増りける　なりひらの朝臣

釋 ○笹　小竹。

大意　秋の野で、笹原を踏み分けて來た朝の間の袖は、露の爲に隨分濡れたが、それよりも貴方の所へ往つてえ逢はずに戻つて來た夜の間の袖がサ、意外にも涙の爲にひどく濡れまさつたわい。

評　小笹の露にそぼちつゝ秋野を分けたのは、以前その人に逢つて立ち歸つた朝のことであつた。今は訪ねたかひもなく、叩きわびて、空しく夜中時分に立ち歸つた袖のうへの涙に、かの後朝の朝の袖の露が聯想されて、比べて見れば今の涙の方が濡れ勝つたとの斷案を下した。この誇張はその佗しさの一通りでない趣を見はすに力がある。「朝の袖」とあるに讓つて、夜の袖といふべきを省き、又上句に露、下句に涙の語を着けずに、たしかにそれと思はせるなど、頗る老練なものである。一篇の骨子は有情無情の對照にある。

四句、伊勢物語にあはでぬる夜ぞとあるはいかゞ。これは我が家に丸寢した趣だから、秋の野に笹分けつゝ立ち歸つた後朝の袖を聯想するに、緊切でない。但、ぬるの現在法を用ひたのは、その理がないでもない。本行のやうに、「笹分けし朝」、「逢はで來し夜」とあつては、いづれも過去の出來事を後で比較して見た趣になつて實感が遠くなる。されば過去と現在とを對比して、無量の感愴を搖曳させる叙法に依るのが適當だから、四句は、逢はで來る夜と改めるがよい。

みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海士の足たゆくくる　小野小町

釋 ○みるめ　見る目に、海松布をよせた。○わが身をうらと　我が身を憂といふに、浦をかけた。○かれなで離れずしての意、變ることのないのをいふ。○足たゆく　「たゆく」は口語のだるくといふに同じい。

大意　海松布の無い浦といふことを知らぬせるかして、それを刈らうと思つて、海士が休無しに足のだるくなるほど來るやうに、何遍來ても逢ひ見るといふ事が無い私の身を、憂い辛い者とも知らぬかして、途絶えも無く、貴方が足のだるいほどお出になることわ。

評　愚なる業かな、やめ給への餘意がある。「みるめ」とか「うら」とかいふ緣語から、思ひ切りわるく附き纏ふ未練男を、海松布の無い浦に、足たゆくかれず來通ふ海士に比喩し、的の無い矢を放つなと、下に嘲つたのは、人のわるい仕打である。當時の宮仕に出で立つた、口賢い女房の狀態が見るやうではないか。構想は一機軸を出してゐるが、詞は煩瑣に失する。初二句を、宣長が、「わが身をみるめなき浦と、下上に打ち反して、心得べき格なり。後に、わが身のうらと詠める歌多きは、これに據れるものなり」といつたのは從はれない。これは、この時代に於ける一つの成語で、さう切り放して釋くべきでない。

流れてはゆく方もなしなみだ川我が身のうらや限りなるらむ　（千兼）

わたつみと賴めしこともあせぬればわれぞ吾が身のうらは怨むる　（伊勢）

わび渡るわが身のうらとなれゝばや戀しきことのしき波に立つ　（寛平歌合）

その例證はこんなに多い。又これらを必ず小町の歌に據つて詠んだとするのは泥んでゐる。この事は、既に景樹も論じてゐる。

あはずして今宵明けなば春の日の長くや人をつらしと思はむ　源宗于朝臣

釋 ○春の日の　「長く」にかゝる序。

大意　これまでは度々逢はずにこそ戻つたが、今夜は是非と思つて來たに、又逢はずに今夜が明けたならば、この節の春の日のやうに長くいつまでも、貴方をつらいと思つて、過すでがなあらうわ。

評　さる女房の格子わたりを這ひあるいて、叩きわびた折の作であらう。水鷄かともいはずひそまり返つた、女のつらい心にも思ひ知られるやうに、「長くや人を」と打ち詠めた。

初句、六帖、及び家集にあかずしてとあるはわるい。

在明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし　みぶのたゞみね

釋 ○在明のつれなく　「在明の」は在明の月の如くといふべきを省いたので、在明の月は、夜が明けてもなほさりげなく空にある物なので、「つれなき」にかゝる序に置いた。○つれなく　平氣に。つらいなどの意。

大意　在明の月が夜の明けるのも、よそ〳〵しく知らぬ顔で、空にあると同じやうに、人の氣強く見えたあの一別以來、今は世に曉ほど憂いものは又と無いわ。

評　よく世に曉の別がつらいといふが、それは逢つての上の事である。これは女がつれないまゝに別れた曉で、まことに曉の憂さをしみ〴〵と味つた趣である。女の同情のない仕打を、殘月の無頓着に空に明け殘つてゐるに譬へたのは、丁度その折柄の景物を想ひ出して、倩つて來たものである。夜もすがら格子の外に居明して、碌なあしらひも受けず、すご〳〵と曉方に殘月を踏んで歸つた戀想人の見じめさが思ひやられる。

この集の歌の編次は、撰者達の非常に注意したもので、殊に戀の部は、一々その意を綜ねて配列され、毫末も忽せにしなかつたものらしい。この前後はいづれも、逢はずに夜の明けた意の歌だから、これも必ず同じ趣と見るべきである。六帖にも、「來れゝど逢はず」といふ題のもとにこの歌をおいてある。まして作者忠岑は已に撰者として、この歌の序次を是認してゐる人である。若しこれを拘泥の論といふならば、却つて疎鹵の嘲を得るだらう。然るに顯昭は、逢つて別れた趣に解し、宣長、及び石原正明またこれに從ひ、中井履軒はその百首贅々に、

かの時男心は殘りがら、泣く〳〵出でて歸るに、曉月は我れを送らむともせず、依然と閨にさし入りて女を照して居るを、羨ましくも妬ましくも思ひし情を述べたり。

とあるも、皆當らない。更に宣長が、「此處に入りたるは、ふと所を誤れるなり」と論じたのは、私意を挿んだ誣言である。さて、定家卿が、

この詞つゞきを見るに、及ばず艶に面白くも詠みて侍るかな。これ程の歌一つ詠出でたらむ、この世の思出に侍るべし。

といひ、又、古抄に、

後鳥羽院より、定家家隆兩人の許へ、八代集の中に面白き歌は、取分けいつれぞと勅問ありしかば、有明のつれなく見えしの歌を、兩人同心に申されし。

と見えたのは、皆、顯昭の解に據つた贅辭で、假にその意と見ても、過褒を免れまい。

あふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち返りける　ありはらの元方

釋 ○あふ事のなぎさ　逢ふ事の無きに、渚（ナギサ）をかけた。渚は波打際をいふ。○うらみて　恨みてに、浦見てをかけた。

大意　自分は丁度、人の逢つてくれる事が無いといふ名の渚にサ寄る波であるから、その波が浦を見たのみで立ち返るやうに、折角その人の許に通つて往つては、逢ふ事もなしに、一途に恨んでサ立ち歸つたわい。

評　おのれを波に、つれなき人を渚に譬喩して、その緣語で仕立てた。波の如くと直喩せずして、「波なれば」と穩喩したのが面白い。そして、「浦見て」と擬人した。後にも、戀五に、

わたつみのわが身こす波たち歸り蜑のすむてふうらみつるかな

又は、

あふ事のなぎさに身をしなしつれば袖も涙に濡れぬ日ぞなき　（六帖）

大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみも返る浪かな　（伊勢物語）

かねてより風にさきだつ波なれやあふ事なぎにまだき立つらむ　よみ人しらず

釋 ○波なれや　「なれや」はなればやの意。○あふ事なぎに　逢ふ事無きといふに、和（ナギ）をかけた。和は風波の穩やかなのをいふ。

大意　浪は風が吹くに因つて立つ物であるが、自分の人を戀ふといふ名は、前以てまだ、風の吹かぬ凪（ナギ）のうちに立つ浪であればかして、このやうにまだ逢ふといふ事も無いのに、早くから噂に立つことであらうぞ。

評　逢はぬのに名の立つた戀である。萬葉集卷十一に、

風吹かぬ浦に波立ちなき名をも吾れは負へるか逢ふとは無しに

とあるを藍本として、多少の塗抹を施したに過ぎない。一首の上に、名といふ語の無いのを、顯昭が不審したのに景樹も同意し、又眞淵、廣陰は、先立つ名といふに、波をかけたものとした。これは皆我が戀を波に比喩したものと思ひ込んだ誤である。これは戀故に立つ名が主格なので、それを波に比喩したのだから、もとより詞のうへに現はさないのである。意釋にあるやうに主格の語を補つて見るがよい。「かねてより」、「さきだつ」、「まだきたつ」など、同語類語重疊して、頗る洗煉を缺いてゐる。

陸奥（ミチノク）にありといふなる名取川なき名取りては苦しかりけり　たゞみね

釋 ○名取川　陸前國にある。名取郡の中央を貫流して海に入る。

大意 奥州にあるといふ話である、名取川といふ川の名のやうに、譯の無いのに、譯のあるといふ名を取つてはさて迷惑な事であるわい。

評 これが實ある名ならば苦しくもないがの餘意、「ては」の辭によつて表現される。上句は、「なき」の語を隔てて、「名取りて」へかゝる序である。「いふなる」は、

みちのくにありといふなる松島のまつに久しくとはぬ君かな　（六帖）

瀧つ瀨のなかにも淀はありてふを云々　（戀一）

の類例で、足いまだ邊陬の奥地を踏まず、話にばかり聞き及んだ都人士の口吻である。聲調は流滑である。結句、家集にわびしかりけりとある。

あやなくてまだきなき名のたつ田川　みはるのありすけ
渡らでやまむ物ならなくに

釋 ○あやなくて　春上「春の夜の闇はあやなし」の條に既出。○なき名のたつ田川　無き名の立つに、立田川をかけた。立田川は、秋下「立田川もみぢば流る」の條に既出。

大意 厄介にも、まだ事實も無い先から、かう名の立つことよ、このうへはいつそ、渡りかけた立田川を渡らずに已まう物では無いに、どうしてなりとも逢つて、この戀を遂げようわ。

評 貴女もその覺悟でゐて下されと、思ひ入つたますらを心は哀れである。濡れぬ先こそ露をも厭へで、かうお互の浮名の立つた以上はいつそと、捨鉢的に強く出るのは、高ぶつた感情の所産である。人に逢ふことを、川を渡るに喩へる例は、外にも數多例が見えて、この獨創ではない。下句の高調なのにあはせては、上句がやゝ煩瑣の傾のあるのはくちをしい。

二句、新撰和歌にはまだきうき名のとある。

人はいさわれはなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ　もとかた

釋 ○人はいさ　「いさ」は清んで讀む。否やの意。春上「人はいさ心も知らず」の條に既出。○とを　「を」は歎辭。

大意 貴方はどうか知らぬが、自分はありもせぬ事をいひ立てられる名が惜しいから、前方も今も一切、貴方の事は知らぬとサいはうわ。

評 後撰集戀二に、「大つぶねに、物のたうびつかはしけるを、更に聞き入れざりければつかはしける」、元良親王、

大方はなぞやわが名のをしからむむかしの妻と人にかたらむ

返し、「大つぶね」とあつて、この歌を擧げてある。眞淵いふ、「元方も大つぶねも、俱に在原棟梁の子なれば、この集には、元方の姉とか、妹とかありつらむを、文字の落ちたるを寫し傳へしならむ」と。この說まことに從ふべきである。想ふに、天曆時代に傳はつた古今集には、既に元方とのみあつたので、後撰の選者達がその誤

である事を心付いて、更に贈答二首を載せて、作者の名を訂されたのであらう。大つぶねは、僻案抄に、

敦忠中納言の姨、中納言幼くて呼びつけられたる名といふも、無下に打解けたり。名なくば、棟梁がむすめとも書くべきに、勅撰の作者に、かくて載せたれば、定まりにける名と聞ゆ。大納言行成本にも、おほつぼねとあり。

と見えて、元方の妹二人のうち、長は始め藤原國經の室で、後時平大臣に通じて敦忠を生んだ人、次はこの大つぶねである。季吟が「心よく叶へる故に、兄の歌を借り用ゐたるにや」と推量したのは、無理な解説である。親王の御歌は、餘りに先の女が聞き入れぬ妬さに、只入懇といふほどの間柄なのを、なき名の立つたを幸ひに、もと相語らつた妻だと人に語つてやらうと、厭がらせをいひやつたのを承けて、それならば此方は、後にも先にも、全く一面識もない赤の他人ですといはうと、虚を以て虚に酬いたので、いづれも口巧者の贈答である。返歌はさう佳作ともいひかねるが、冗字冗語がなく、句々力つよく、洗煉を經た作である。後撰の選者達も、同感であつたと見えて、贈歌をば省いた。

結句、古本伊勢集に知らずとやいはむとある。やと疑つては、左右決せぬ趣になつてをかしくない。「とをいはむ」と、一途に思ひ入つたのがこの場合に叶ふ。

こりずまに又もなき名は立ちぬべし　よみ人しらず
人憎からぬ世にしすまへば

釋 ○こりずまに　懲りずにといふに同じい。

大意　以前世間から、無い事をいひ立てられて、據なく一時疎々しく打ち絶えたが、それに懲りもせずに、又も無き名が立ちさうなことよ、なぜなれば、あの人がどうしても憎まれぬこの世にサ、住まつて居るからサ。

評　つい知らず〳〵中よくなり過ぎて、又も浮評の立つことゝならうとの杞憂、萬更でもない女との浮名をいひ立てられて、一旦は世間のうるささに控へた心の駒の、ともすれば跳り出しさうにするのを歎いてゐる。意思の弱い人か、情熱の高い人か。

ひんがしの五條わたりに、人を知りおきてまかり通ひけり。忍びける所なりければ、門よりしもえ入らで、墻のくづれより通ひけるを、度重なりければ、あるじ聞きつけて、かの道に、夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえあはでのみ帰りて、よみてやりける　なりひらの朝臣

人しれぬわがかよひ路の關守はよひ〳〵毎にうちも寢なゝむ

釋 ○ひんがしの云々　この詞書も、伊勢物語に、

昔男ありけり。東の五條わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりしもえ入らで、わらはべの踏み明けたるついぢのくづれより通ひけり。人繁くもあらねど、たび重なりければ、主人聞き付けてその通ひ路に、夜毎に人を据ゑて守らせければ、かの男いけどもえあはで歸りけり。さて詠める、

とあるを摘み入れたもので、もと「題しらず」の歌であらう。ひんがしの五條は、東の京の五條通り、昔の京都は、朱雀大路を中心に、東西兩京に別ち、北より南へ、九條の街路を設けてあつた。「人を知りおきて」は女を懇にしておいての意。「いきけれどえあはで」は、行つたけれども〳〵、え逢ひ得ないでの意。詞書の意は、東の五條附近に、或女を拵へておいて通つていつた、堺といふ譯でない所だから、公然と門からは這入れないで、墻の崩れから通つたのを、度重なつてゐるうちに、家の主人が聞き知つて、その忍び込む道に毎夜番人を寢させて守らせたので、いくら往つても逢へないで、空しく歸つて來て、そこで詠んで贈つた歌との意。○人しれぬ　人に知られぬの略。「人しれぬ思を常にする河なる」「人しれぬ思やなぞと」の例に同じい。内々のと譯すのが當る。○關守　關を守る番人。○よひ〳〵毎　「よひ」は夜と同意に用ひた。必ず今いふ宵の口の意とするは泥んでゐる。○うちも寢なゝむ　「うち」は接頭語、「も」は歎辭、「なむ」は希望の辭。

大意　外の關守はともかく、内々の私の通ひ路の關守だけは、毎夜〳〵に寢てしまつてまあ貰ひたいなあ。

評　さらば絶えず通つて逢はうものをの餘意がある。まことの關守に對へて、我が通ひ路の關守のみは「打ちも寢なゝむ」と、切に思ひ入つた趣が、「は」の辭で表現される。このことは既に春上「春日野はけふはな燒きそ云々」の條に委しく辨じておいた。初句を、舊説に「今は主人の知りて、關を据ゑたる程なれば、人知れぬとはいはれぬ道理なり」と疑つたのは粗い。又或人は、人に知らさぬの意に解いたが、それも强ひてゐる。「よひよひ毎にうちも寢なゝむ」はこの場合大分おとなしやかな注文である。「人の戀路の邪魔する奴は、犬にくはれて」といふ程の事はなくとも、今少し激越の詞がありさうに思はれる。「おしなべて峯も平になりなゝむ」といふ位の口をもつて居ながらと、齒痒くも思つたが、格調がのびやかで、意促つて詞迫らぬ妙味もある。

633

題しらず

忍ぶれど戀しき時はあしひきの山より月のいでてこそくれ　つらゆき

大意　隨分怺へ忍びはすれども、ひどく戀しい時には、怺へかねて、あの山の端から月の出てくるやうに、思ふ人の所へさして出てサくるわ。

評　三四の句は、「出でてこそくれ」の序詞ながら、東の山際に、月の立ち昇つた折柄の哀れさが思ひやられる。思ひ妻などの許へ通ふには、夕暮がその時であつたから、人戀しさのいとゞまさつて來て、堪へられぬ趣である。「山より月の」の促調は、この氣分をよく表して、敍述が簡淨である。

戀ひ〳〵て稀に今宵ぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ　よみ人しらず

語　○今宵ぞあふ坂の　今宵ぞ逢ふといふに、逢坂をかけた。相坂は離別「あふ坂の關しまさしき」の條に既出。○ゆふつけ鳥　鷄の事だらう。戀一、「相坂のゆふつけ鳥も」、雜下「誰がみそぎゆふつけ鳥か」の條を參照。

大意　戀ひ慕ひ〳〵して、たま〳〵今宵といふ今宵サ逢ふことだから、その逢ふといふ名の相坂に名の高い庭鳥は、どうぞ鳴かずにまあ居つて貰ひたいなあ。

評　夕方逢つて朝に別れてゆく男女、明けたと告げる鷄の音の恨めしさは勿論だらう。秋上、

戀ひ〳〵てあふ夜はこよひ天の川霧立ち渡り明けずもあらなむ

詩材の異なつてゐるのみで、想も詞も大同である。たゞその少異の點がこの兩者の巧拙の別れるところである。天の川の歌は、二句の敍法が非常に緊迫して、稀に逢ふ夜を喜んだ眞摯の情が、一段と切に聞える。これは又二三句のうつりに、一番の工夫を弄してゐるが、もとより小刀細工で、到底匹敵しがたい。六帖に、

こひ〳〵てまれにあふ夜のあかつきは鳥の音つらきものにざりける

は、これを又やゝ變へたもので、鳥の音つらきの說破は最も拙い。

以下三首は逢戀である。

秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ぞともなく明けぬるものを　をのゝこまち

釋 ○事ぞともなく　さしたる事も無いのをいふ。

大意　世に長い物といふ秋の夜も、名ばかりであつたわい、たま〳〵戀しい人に逢ふ夜といへば、何を語らふ間も無くて、これぞといふ事もなく、つい早く明けてしまふものを、何の秋の夜が長からうぞ。

評　秋の夜を長しといふ事は、春の日を長しといふと同じく、遍く世にいひ慣れた語だから、長しといふ秋の夜もといふべきを略いて、想像に任せた。「事ぞともなく明けぬる」は、短いの意を持たせた轉義だから、結局、長短の對照がこの骨子である。この構想はさう珍しい事ではない。萬葉集卷十、

秋の夜を長しといへどつもりにし戀をつくせばみじかゝりけり

は、この先型ではないか。又、誹諧部に躬恒、

むつごともまだつきなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

とあるも同型ではないか。さはあれ、かうした作意は、誰れも思ひ寄る筈のものだから、踏襲も剽竊もない。只敍述の巧拙によつて優劣を判けると、萬葉のは婉曲の妙味に乏しく、理路に落ちてゐる。躬恒とこの作者との間にあつて、躬恒のは男だけに語氣が鋭く、これは女だけに優しく述べられてある。なほ躬恒は、ほゞ伯仲の間にこれを說明しよう。

三句、六帖にあひしあへば、打聽本にあふてへばとある。

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人がらのあきの夜なれば　凡河内躬恒

釋 ○はてぬ　不竟（ハテヌ）の意。○昔より　先々から。○人がら　人體。

大意　秋の夜を長いとも、え思ひきめられぬわ、以前から逢ふ人物次第に依つて、長くも短くも覺える秋の夜であるから。

評　戀しい貴方に逢つては、大層短く思はれてサの餘意がある。逢ふ夜は秋の夜も長く思はれないといふを基想として、更に一層の工を弄し、相手の女の喜びさうなうまい事をいつた。

二句、家集の古本に思ひもとある。

しの〻めのほがら〳〵と明け行けばおのがきぬ〴〵なるぞ悲しき　よみ人しらず

釋 ○しのゝめの　もと「ほがら」にかゝる枕詞である事は、既に夏部「夏の夜のふすかとすれば云々」の條に解した如くである。但こゝは轉つて、夜の引き明け方の意に用ひてある。○ほがら　明らかの意。○おのがきぬ〳〵　銘々自分の着物〳〵と取り分けて着ることをいふ。源氏物語などにも見える。男女が逢つて起き別れる朝を、きぬぎぬといふのも、この意から轉つた語である。

大意 夜明の空が明らかに明けて行くと、一つに打ち重ねて掛けて着た、銘々の着物と着物とが、別々に着られて別れることであることがサ悲しいわ。

評 何だか面白くもなささうな歌である。それは「悲しき」と說破してしまつたので、含蓄の味が消えた爲であらう。「ほがら〳〵」と「きぬ〴〵」と疊語の對を爲してゐる。以下の歌は別戀である。

結句、顯昭本にきるぞ悲しきとあるのを定家はたすけて、本行のを書寫の誤にやといつた。理は聞え易いが、趣は劣つて聞える。

明けぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思そふらむ　藤原國經朝臣

釋 ○今はの心つくからに　今は歸らうと思ふ心の萌すをいふ。○など　口語のなぜに當る。○いひしらぬ　いひやうも知らぬ。

大意 夜が明けて來るといふので、もう今は別れねばならぬと思ふ心が附くにつけて、なぜかういふにいはれぬ、情無い思が添ふことであらうぞ。

評 せめて機嫌よくと思ふ別れ際に、生憎なる愁思の生ずるこの心を打ち歎いた。所謂別れのつらさであるのを、さう說破しない處に味ひがある。

結句、顯昭本に思なるらむとあるはわるい。六帖には、閑院大臣の歌としてある。閑院大臣は、嵯峨、淳和の朝に大臣であつた藤原冬嗣のこと。この風調を味ふに、今すこし時代はおくれてゐる。國經のものであらう。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　とし行朝臣

あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

釋 ○こきたれて　扱き垂れてで、すごき落すをいふ。雜上「刈りてほす山田の稻のこきたれて」も今と同じい。「こき」は秋下に「もみぢ葉は袖にこき入れて」とある、こきと同語。

大意 このやうに雨の降るのに、夜が明けたといふので、別れて歸る道には、物をこきおろすやうに、雨も涙も一所に降つて來て、着物が濡れ〳〵して、さて難儀なことよ。

評 後朝の別愁を敍べた。本來涙の落ちるのが主であるを、わざと輕く傍に取り成して、まづ「雨も」といひ、次に「涙も」といひ添へたのもをかしく、涙を雨に竝べ擧げて、「こき垂れて」、「降りそぼつ」の誇張も「かへる道には」のはの辭に呼應して面白い。

題しらず

しのゝめの別ををしみわれぞまづ鳥よりさきになき始めける　寵

釋 ○寵　この作者の名のことは、離別「朝なけに見べききみとし」の條に既出。

大意　夜あけの別が惜しさに、自分がサまづ、鶏より先に泣きはじめたわい。

評　「なく」の聯想から、折柄の晨鶏を對比の材料として、それに先んじて泣かるとあるに、惜別の情が強く印象させられる。

ほと、ぎす夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきの聲　よみ人しらず

釋 ○うつゝか　「うつゝ」は正氣なこと。○朝露の　「おき」にかゝる序。哀傷に「朝露のおくての山田」とある例に同じい。

大意　朝露のおきといふやうに、起きて別れて來た曉に聞いた時鳥の聲は、夢であるか現であるか、しかとは覺えぬわい。

評　女の許を夜深く立ち出でた後朝の空に、端なく杜鵑の一聲を聞き付けたらば、どんな心地がするであらう。ほんに夢とも現とも方角がつかなからう。女が氣が進まぬか何かで、話しかけても返事がなく、一夜を過した曉の別にやつと一言洩したのを、時鳥の一聲によそへ思慕の情を歌つたものである。句々字々力量あり、一煉の鐵のやうである。造語また精煉を極めてゐるが、「朝露の」とある朝の語、はての曉とさし合つて、聊か妙でないが、古歌には萬葉以來一首のうちに朝と曉とを疊用した例が頗る多い。「あかつきの聲」の辭樣は漢文直譯から來て、この時代に行はれ始めた。すべて元久時代の歌仙が希つた風格で、新古今調の胚胎である。

○

玉くしげあけば君が名立ちぬべみ夜深く來しを人見けむかも

釋 ○玉くしげ　玉は美稱、くしげは櫛笥などの調髪具を容れる筥をいふ。「あく」にかゝる枕詞に用ひた。○立ちぬべみ　「べみ」は秋上「佐保山のはゝそのもみぢ」の條に既出。

大意　歸るのに夜が明けようならば、人目にかゝつて、君の名が立ちさうなので、まだ夜深なうちに別れて來たが、それにしても若し誰れぞ、人は見たであらうかしらぬわい。

評　忍んで逢つた戀である。人目に觸れぬようにとは注意はしたものゝ、なほ萬一を氣遣つて、事の破綻を恐れてゐる。「立ちぬべみ」の句、この時代の造語で、前後の古調に調和しない。着想は萬葉集卷十一、

月しあれば明くらむわきも知らずして寐てわが來しを人見けむかも

の先型がある。これになほ同集卷二、

玉くしげおほふをやすみ明けて行かば君が名はあれどわが名しをしも

を搗き混ぜて拵へ上げたやうな歌である。

三句、一本立ちぬべきとあるはわるい。四句、六帖には寐てわが來しをとあるは、萬葉のが紛れたので、この歌では意が徹らない。

けさはしもおきけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき　大江千里

釋 ○けさはしも　「し」は強辭、「も」は歎辭で、霜を寄せた。○おきけむ　起きに、霜の置くを寄せた。○思ひ出づる　思ひに、日を寄せた。○消えて　心の消え入るに、霜の消ゆるを寄せた。

大意 今朝はサまあ格別に心が亂れて、どのやうに起きて來たやらも、一向覺えがなかつたわ、今その時の事を思ひ出すのがサ、置いた霜が朝日が出れば消えるやうに、心が消え入つて悲しいわ。

評 初二句、四句の細瑣ないひかけは厭になる。興風の歌に、

おもひには消ゆる物ぞと知りながらけさしもおきて何に來つらむ　（後撰集雜二）

とあるなども、全く同巧の双生兒である。

人に逢ひて、あしたによみてつかはしける　業平朝臣

寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增るかな

釋 ○人に逢ひて云々　「人」は女であることはいふまでもない。その後朝に家に歸つて後贈つた歌との意。この詞書、伊勢物語には、

昔深草の御門に仕うまつりける男ありけり。いとまめに、じちやうにて、あだなる心なかりけり。さるに、心あやまりやしたりけむ、皇子達の仕ひ給ひける女を相知りにけり。さて朝にいひやる。

とあつて、この歌をあけ、次に「となむよみてやりける。さる歌のきたなさよ」とある。○夢をはかなみ　「を」は歎辭。苦を荒み、瀨を早みなどのをと同じい。○まどろめば　睫を交すをいふ。目蕩（トロ）むの義とぞ。○いやはかな　「いや」は彌（ヤヤ）々の意、「はかな」ははかなしの假體言。

大意 昨夜逢つて二人寢たあの暖い夢がまあ、餘りはかないので、たしかに今一度見ようと思つて、トロリと目をねぶつて見れば、却つて寢られもせず夢さへ見えずに、いよ〳〵はかない事になり增る事よ。

評 逢ひ難い女に、やつとの事で忍び逢つた後朝の心とするは、勢語に泥んだ誹があらう。たゞ飽かぬ別の後朝の意ばえを敍べたものとしてよい。寐不足で自然うつら〳〵と、うつゝなき後朝の態を、逢つた夢が見たさに目どろむ趣にいひなして、わが思を深げに見せたのは、頗る老獪である。三四句のうつり、意釋の如く詞を入れて見ないと、意がはつきりしない。「まどろめば」といひ下す時はまた、自然さうした詞の生まれてくる調であることは、秋上、

天の川淺瀨しらなみたどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける

の條に解いた如くである。序文中に「心餘りありて詞足らず」と評せられたのも、こんな類をさしてゐるかも知れない。さて、勢語の地の文に「さる歌のきたなさよ」と評したので、季吟、契沖は「これは自記の詞にて、卑下して云へるなり」といひ、眞淵は「さる忠實人の思ひ亂れし歌詠めるを、心きたなしと云へるなり」といひ、高尙は「歌のとあれば、歌を指して、きたなしと譏れるなり。いと〳〵をかしき歌なれば、記者のわざとうらをいひて、戯れたる詞と見るべし」と。

以下五首後朝戀の歌である。

業平朝臣の、いせの國にまかりける時、齋宮（サイグウ）なりける人の、いとみそかにあひて、又のあしたに、人やるすべなくて、思

ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

君や來し我れや行きけむおもほえず夢かうつゝか寢てかさめてか

よみ人しらず

釋 ○業平朝臣の云々　齋宮は、伊勢の皇太神宮に奉仕し給ふ内親王を申す。「みそか」はひそかと同じい。「人やるすべなくて」は使して便りする手段の無きをいふ。伊勢物語には、

昔男ありけり。その男、伊勢の國に、狩の使にいきけるに、かの齋宮なりける人の親、常の使よりは、この人、よくいたはれといひやりけり。親のいふ事なりければ、いと懇に勞りける程に、いひつきにけり。二日といふ夜、男、われて逢はりは、こゝに歸りこさせけり。かく懇に勞りける程に、いひつきにけり。二日といふ夜、男、われて逢はむといふ。女もはた、逢はじとも思へらず。されど、いと人目繁ければ、えあはず。使ざねとある人なれば遠くも宿さず、女の閨も近くありければ、女、人を靜めて、子一つばかりに、男の許に來りけり。男はた、寐られざりければ、外の方を見出してふせるに、月の朧なるに、人の影するを見れば、小さき童を先に立てゝ人立てり。男いと嬉しく、わがぬる所にゐて入り、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らひあへぬ程に歸りにけり。男いと悲しくて寢ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もなくて待ち居れば、明け離れてしばしある程に、女の許より、詞は無くて、「君やこしわれや行きけむ云々」

とある。さて「男、いといたう泣きてよめる」とあつて、次に「かきくらす心の闇に云々」の歌を擧げてある。上にもしば〳〵論じた如く、勢語は古歌にさま〴〵の物語を附會したもので、この文など殊にその痕跡を顯はしてゐる。抑も齋宮はさる淫行ある場合には直に廢せられるのが、當時の例規であつた。業平時代の齋宮にさる事のあつた事は史書に見えない。よし又事實であつたとしても、勅撰の集には憚つて、書くべき筋のものでない。この詞書が勢語によつて書かれた後人の筆である事は必定である。行文もまたいと拙い。○おもほえず覺えずといふにちかい。

大意　昨夜お逢ひ申したやうなが、貴方がお出で下されたか、たゞしは私が參つたか、あわたゞしくお別れ申したので、一向覺えませぬ、それにつけて思へば、お逢ひ申したも夢であつたか、正氣の事であつたか、眠つてゐる間の事であつたか、目の醒めて居る間の事であつたか、いづれやらとんと覺えませぬわ。

評　私はこんなですが貴君はどうですかと、うら問うたのである。初めて男に逢つた婦人の優ない告白で、私はまるで夢中だつたといひ贈つたことは、貴君はもとより浮氣な方で、從來も多くの女に關係したでせうから、そんな事もありますまいが、といふ諷詠の餘意があるのである。こゝを聞かなくては生きた解ではない。「君や來し」が主であるのを、更に反對の意なる「我れや行きけむ」をいひ添へ、なほ詞を換へて、「寢てか」といふに、「醒めてか」をいひ添へて、漸層法を用ひつつ、その兩端を叩いた表現に情味が活躍して、いはれぬ妙味が生ずる。況や、君や、我れやといひ、夢か、うつゝか、寢てか、さめてかとある疑問語の疊用、同語、同形語、同音の反復が、自然に諧調を成してゐる。三十一字七段に切りとゝのへられて、節短く音促り、とかうに惑つた情態がよく表現された。縱横の口吻、矯健蕩宕の筆路、殆んど婦人の作とは思はれない。

三句、古本業平集にはおほつかなとある。

かへし　なりひらの朝臣

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

釋 ○心の闇　闇の夜は惑はれるものだから、心の惑ふをも聯想上から、心の闇と混喩にいつた。○世人　世間の人意の。

大意 まことに昨夜の事は、私も掻き暮れた心の闇に惑つてしまひました、それ故、夢か現か一向に覺えぬが、かうお互に知らぬからは、そのいづれであるかといふ事は、局外の世間の人が定めて呉れよ。

評 「夢か現か寢てか覺めてか」と、眞向から斬り掛けたる大太刀を、危く體をかはして、私も貴女と御同感で全く夢中でしたから、お尋ねに對してのお答へは出來ません。それは寧ろ局外者にきいて下さい、卽ち「世人定めよ」と、餘所へ外らせた意表の辭令、その技凡ならずといつてよい。といつて、こんな事を本當に世人に話されては溜らない。「世人」とひろくいつたやうものゝ、實は相手の女一人をさしたものである。

結句、六帖、伊勢物語にはこよひ定めよとある。意は聞え易いが、詩味は遠く劣る。

題しらず　よみ人しらず

ぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり

釋 ○ぬば玉の　うばたまに同じい。闇にかゝる枕詞。物名「うばたまの夢に何かは」の條に既出。○闇のうつ

つ　闇の紛れなる或事實をいふ。

大意 闇夜の紛れに、ひそかに逢つた現の事は、これまで思寐に見たたしかな夢に比べると、何ほども增らなかつたわい。

評 暗夜を利して出會つた位だから、それははかない瞬間の契であつたらう。で思寐の「定かなる夢」に對比して、嬉しい逢瀨の現を、夢にすこし增し位の物そといひくたしたのは、頗る意表の語で、雋永の味がある。

六帖に、作者を敏行としてある。

○

さよふけてあまのと渡る月影にあかずも君を逢ひ見つるかな

釋 ○さよ　夜をいふ。「さ」は美稱。○あまのと　天の門。空といふに同じい。委しくは秋上「秋風に聲をほにあげて」の條に既出。○君を逢ひ見つる　この「を」の用法は珍しい。然し誤ではなくて、當時に使用された一格と見たい。

大意 夜ふけて、大空を渡る月の光に、あらはに見てもく見飽かずにまあ、逢ひ難い君を逢ひ見たことよ。

評 月下の會合から得た感慨である。上のは、闇夜に逢つてかひもないと歎き、これは、月夜に逢つて夜よしと悅んだ反對の意を以て序でた。三句の「に」を、の辭の誤だらうといふ宣長、景樹等の說は當らない。六帖に見える、

あしひきの山したとほる月影にあかずも人に逢ひ見つるかな

は、このやゝ變化したもので、月影にとある。意釋を尋ねて心得られたい。秋成が「月影には、月影の如くにの意なるべし」といつたのも牽強である。又、景樹、雅嘉が、「小夜ふけて」とあるので、曉月の趣に解きなしたのはいかゞ。秋上の、

小夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空に月わたる見ゆ

も中夜の景で、曉更の光景ではない。是等みな、上句を「他かずも」にかゝる序とのみ心得ての誤である。

○

君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

釋 ○難波なるみつ　難波の御津に、見つをかけた。難波の浦は、攝津職がおかれて、船舶の出入を管理した官津なので、御津といつた。○あひき　逢ひきに、網引を寄せた。

大意　貴方の名も私の名も、世に立てはしまいと思ひますわい、それ故、この難波には御津といふ所があり、又網引をするが、その名の如く、私を見たとも貴方は仰しやるな、私も貴方に逢つたともいひますまいわい。

評　狡童の奔女に誨へた語である。萬葉集に、

大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人のよび聲　（卷三）

吾がころも人にな著せそ網引する難波をとこの手にはふれゝど　（卷四）

など見えて、難波は往時の都に近い漁業地とて、難波とさへいへば、御津と網引とは、直に聯想の出來る事柄であつた。でかういひ寄せたのである。「君が名も我が名も」と、又「みつともいふなあひきともいはじ」と、自他の排偶が、上下に聯對された敍法は頗る齊整である。かう一再反覆する漸層法は、自然に丁寧苟もせざる意趣を生じて、物の大事を取るが爲に、相互の祕密を口堅むべく、諄々と說いて已まぬ細心さが歷然としてゐる。よほど、神經質の作者と見える。いや餘程むづかしい間柄の戀であらう。

大津のみつとはいはじあかねさし照れる月夜にたゞに逢へりとも　（萬葉卷四）

を更に一層潤飾し加工したものである。

以下逢ひ見てのち忍ぶ戀である。

○

名取川せゞの埋木あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ

釋 ○名取川　木巻、上に既出。○せゞの埋木　瀨々の埋木。「埋木」は水土の中に埋れた材木をいふ。故に谷の埋木なども詠んである。景樹は、「瀨々に打ち捨てた古杭などを指す」といつた。必ず今陸前地方の名產なる半化石した古代の遺木の稱とするのは當らない。河內の弓削川にも、埋木を詠んだものが萬葉集にある。

大意　名取川の瀨毎にある埋木のやうに下に忍んで、上へは顯はさぬやうにはして居れども、若し世間へ露はれて、戀のうき名を取つたらば、その時はどうしようと思つてかサ、かう逢つて馴染み初めた事であらうぞ。

評　意馬心猿の狂ひ疲れたる刹那、電光一閃、胸前を刺す理性の利刃に、覺えず身の毛いよ竪つた折の作であらう。社會と個人との葛藤衝突、これらの危險をも忘れたわが心を訝しむ間に、嗟歎の聲が自然と永くなつた。想ふに、作者は分別盛の男であらう。萬葉集卷十、

寸十板もてふける板目のあはざらばいかにせむとかわが宿そめけむ

が平安の風調に轉唱された際、初二句の序詞を萬葉集卷七の、

眞鉋もち弓削の川原の埋木のあらはるまじき事とあらなくに

の趣をうつし、しかも名取川に名の立つ事を籠めなどして、巧にして艶なのは全くこの時代の風調である。「いかにせむとか」の疑問、語調一段と強く、無限の意趣がこゝに生じて、一波、萬波を描くの姿態がある。定家卿は、この集秀歌十首の一とした。

六帖に、作者の名を貫之とある。

○

よしの河水の心ははやくとも瀧のおとには立てじとぞ思ふ

釋 ○水の心　混喩にいつた。○はやくとも　逸るともの意。○おとには立てじ　素振には出すまいの意を喩へた。流聲を立てまいと解しても聞えるが、「おと」に拘泥し過ぎてゐる。

大意 瀬の早い吉野川の水のやうに、自分の戀の心ははやるとも、その川の瀧の音を立てるやうに、素振には出しはすまいとサ思ふわ。

評 比興の作である。何處までも内證にして包まうといふ。いかに世間を憚る戀であるかゞ知られる。「立てじとぞ思ふ」と抑へたのであるが、それは端的の理性の閃きで、實行の如何を考慮においてない處に面白味がある。戀の比喩に、山川の水をいふことは、既に萬葉集卷十二に、

山河の瀧にいやまさる戀すとぞ人知りにける間無くおもへば

足ひきの山川水のおとに出ず人の子ゆゑに戀ひ渡るかも

など見え、この集にも、「足引の山下水の木隱れて瀧つ心をせきぞかねつる」など、等類が頗る多い。殊に、

高山の岩本たぎち行く水のおとには立てじ戀ひて死ぬとも　（萬葉十一）

吉野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも　（戀一）

などは同型で、畢竟山近い土地に住み馴れた奈良時代の人の遺想である。

打聽本には、四句瀧つおとにはとある。

○

戀しくばしたにを思へむらさきのねずりの衣色に出づなゆめ

釋 ○したにを思へ　「した」は心の内をいふ。「を」は强辭。○むらさきのねずりの衣　紫色を染めるに、紫草の根で、布帛に摺り著ける方法があつたと見える。其の色が映えゝくしいので、「色に出づ」にかゝる序に用ひられた。昔の紫染は大抵は紫草の根の皮の汁を採つて染める。小野博いふ「紫草、春分後種を下す。長じて苗高さ二尺許、葉は細長くして、旱蓮草の如く互生す。夏月白花開く。五出にして、大さ三分ばかり、梅花に似たり。實は紅花の實に似て小し。熟して白色或は淡褐色を帶びて光あり。その根直にして深紫色」と。○ゆめ　萬葉集には、努、禁、勤などを訓ませてある。禁止の副詞。

大意 戀しく思ふなら、心の内でサ思つて居てくれい、紫の根摺の衣のやうに、色に出るなよ、人目に立つから、

急度よ。

評 片戀には戀ひ死んでも構はない者が、諸戀には永しへにこの甘露に醉ふべく、「色に出づな」と警戒した人情變轉の機微、味ふとひどく面白い。「したにを思へ」と、强辭を挿んだ命令法、「出づなゆめ」といひ重ねた禁止の語、相俟つて、大事を取つた老婆心切が想ひ遣られる。派出やかな紫の根摺の衣を着て、はかなけに兒めいた人の、年嵩なる男の胸にかゝつて點頭く姿態は、そもどんなであつたらう。

初二句、六帖に思ふともしたにや逢はむとあるはわるい。

花すゝきほに出でてこひば名を惜み下ゆふ紐のむすぼほれつゝ　をのゝはるかぜ

釋 ○花すゝき　穗の出た薄をいふ。「ほに出でて」にかゝる序。○ほに出でて　秀に出ての意。表面に顯はすをいふ。○下ゆふ紐　下裳の紐をいふ。下に結ぶ物なれば、心のうちに結ぼれる比喩で、「下ゆふ紐の」と序に用ひた。○むすぼほれ　結ばると同じい。

大意 花薄の穗に出るやうに、表へ顯はして戀ひ慕ふなら、名の立つことが惜しさに、衣の下に締める紐が下に結ばるやうに、心の内でばかり思つてゐて、氣が結ぼれ〳〵して、甚だ難儀である事よ。

評 「花薄」、「下結ふ紐の」の序詞、奈良時代から盛んに用ひられて、殆ど陳腐に近い。ましてや、これを一首中に併用したのは、なほこの感じが强く、又修飾に過ぎてこちたい。風調やゝ卑靡、當時武邊を以て、朝野に重きをなした作者の人柄に似ないといはうか。いや作者は寛猛幷び濟す人で、藤原保則傳に、

春風率三兵四百餘一、取二陸奥路一、入二上津野一、宣二諭恩詔一、賊徒悉降（中略）春風少在二邊塞一、能通二夷語一、脱レ甲釋レ兵、獨入二虜軍一、具宣二朝命一、於レ是夷虜大服、奉レ書乞レ降、云々。

とある。あゝこの寛裕仁恕は、卽ちこの和いだ心から出てくるのであつたと知られる。

思ふどちひとり〳〵がこひ死なば誰れによそへて藤ごろもきむ　せたりける

釋 ○橘の清樹が云々　橘の清樹の情婦の許から詠んでよこした歌との意。○ひとり〳〵が　いづれか一人がといふ程の意。一人毎にの意ではない。この說古事記傳に委しい。○藤ごろも　喪服をいふ。もとは、葛布にて製した粗服の稱。

大意 かう思ひ合つた同士の間に、貴方か私かの一人が、若し焦れ死をしませうなら、喪服を着ようにも、表立つた夫婦でないから、世間へは、身内の誰れが死んだので服を着ると、誰へかこつけて喪服は着ませうぞ。

評 餘計な取越苦勞をしたのに、婦人の情致が見えてをかしく、更に矯飾の浮辭ではない。といふは敵は本能寺にあるので、本意は、晴れた夫婦中になつてくれと、間接に迫つたのである。

なきこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてらよるこそは著め　かへし　橘のきよき

大意　いはれる通り、若しいづれか戀ひ死んだ時は、悲しくて泣き慕ふ涙に、袖が甚く濡れようから、それを脱ぎ換へがてら、人の見ぬ夜の間サ、その喪服をば着ませうわサ。

評　戀歌の深意はそ知らぬ風にそらして、只對手の詞について、痴案を立てた。誠意のない奴である。

題しらず　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもるると見るが佗しさ

釋　○人目をもる　人目を憚り愼むをいふ。「もる」は守の意。

大意　互の逢瀬に人目を憚ることは、現にてはさうもサあらう、それは無理も無いが、夢にまでも、人目を憚ると見ることが難儀なことわ。

評　一途に思ひ迫つた婦人の情には、婉曲の辭樣を用ひる餘裕もなく、頗る露骨に流れた。戀二、敏行、

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ

に比すれば、眞摯の點は或は勝るかも知れないが、含蓄の餘味は乏しい。

四句、定家自筆本に人めをよくとある。この方が意が明晰である。結句、諸本見るが佗しきとある。

○

かぎりなき思のまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

釋　○こむ　行かむの意。かゝる例は常に多い。

大意　限り無い胸の思にまかせて、夜も夢に往つて逢はう、現に通ふは格別の事、夢に通ふ路をまで、人は咎めはすまいわ。

評　晝の間往つたけれど、人目に支へられて、逢へずに戻つたらしい。この趣が一首のうへに反映してゐる。據なくはかない夢路をすら、唯一の頼み處として、逢はうと思ひ入つた情熱は同情に値する。宣長、景樹等が、夢にもといふべきを、下に「夢路」とある故に、詞を換へて、「よるも」といつたやうに釋いたのはわるい。「夜」も晝も來たのに對しての辭樣である。

又思ふに、當時の習慣として、普通は男の方から女の許に通つてゐた。されば、この歌は婦人の作としてはふさはしくないやうである。必ず作者を小町とするなら、三句の「こむ」はこよの誤ではあるまいか。

二句、顯昭祕註には思のまにまとあり、下句、六帖に夢路をさへや人の咎めむとある。

○

夢路には足もやすめず通へどもうつゝに一目見しごとはあらず

釋　○一目見し　一寸見たといふに近い。○ごとは　如くはの意。

大意　夢の路には、足も休めず精出して通つて、度々逢ふと見るけれども、やはり本當に、嘗て一目逢つたやうにはいかないわ。

評　嗚呼夢ではつまらないの餘意がある。けれど、今は夢を頼むより外に、すべのない逢瀬なのだから情けない。表現の率直なのが却つてよい。結句は見し事はあらずの意にしても解されるが、この部立、皆逢つてのうへの

戀であるから、如はの意に從ふがよい。

六帖に、二句足もやすまずとある。又、四句うつゝにひとりとあるは殊にわるい。

思へども人目づつみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね　よみ人しらず

釋 ○人目つゝみ　人目を憚むに、堤をかけた。○かは　彼はに、川を寄せた。

大意 堤が高いので、それは川と見ながらも、渡りかねるやうに、戀しく思ふ人を見ては、あゝ彼れはと思ひながらも、人目をつゝむ心が大方ならぬによつて、逢ひたく思ひながらも、ようサ逢はぬわ。

評 意中の人を問近く見ながら、人目を憚る場合には、他人顔をして逢ふことも出來ない、その苦惱をうち出した。「人目づつみ」は、奈良時代には絶無の造語で、この頃に剏まつたらしい。註者、萬葉集卷八なる、

妹がりと吾が行く道の河なれば附固紘結跡夜ぞ更けにける

の四句を、人目つゝみと訓んで、この先例としたのは誤である。又、「かは」の弄語と譬喩とは、後撰集、戀二、

かはと見て渡らぬ中にながるゝはいはで物おもふ涙なりけり

大和物語にも、

古里をかはと見つゝも渡るかな淵瀬ありとはうべもいひけり

など例は多いが、それらは時代が後れるから、恐らくはこれを學んだものだらう。なほ後撰の詞書を見ると、「おなじ所にて見交しながら、え逢はざりける女に」とある。全くこれと同一の事情であるのを見ると、いよ〳〵この歌から生まれたものであることが諾かれる。

○

たぎつ瀬のはやき心を何しかも人目づつみのせきとゞむらむ

釋 ○はやき心を　はやき心なるものをの意。瀬の早きに、心の逸るを寄せた。○人目づつみ　人目を包むに、堤をかけた。

大意 たぎり落ちる川瀬のやうに、逸る胸の思であるものを、何故かまあ、堤の水を堰きとめるやうに、人目を包むばかりに、怺へ忍んで居る事であらうぞ。

評 早瀬の水は、堤を築いて堰けども堰かれぬものなので、託して以て、わがこの一方ならぬ熱愛の、世間の制裁位の事に憚るは何ごともどかしがつた。この衝突この苦悶、これ戀愛に於ける第一活劇である。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　きのとものり

くれなゐの色にはいでじ隱れ沼のしたに通ひて戀ひはしぬとも

釋 ○くれなゐの　「色には出でじ」にかゝる序。委しくは、戀一、「人知れず思へばくるし」の條に既出。○隱れ沼の　草などうへに茂つて、水の下に溜つた沼をいふ。故に「したに通ひて」にかゝる序とした。

大意 紅のやうな、人目に立つ色には出しはすまいわ、隱れ沼の水の下に通ふやうに、心の中にのみ思つて、戀ひ慕ひはするとてもサ。

評 戀緒百端、すべて心に呑む。萬葉集卷四、

いふことのかしこき國ぞ紅のいろになに出でそ思ひ死ぬとも

などの類型で、自他の差がある。友則の作としては可なりのものだが、萬葉のに比すれば遙かに下つてゐる。しかも序詞の重疊は煩はしい。

題しらず　みつね

冬の池に住むにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

釋 ○冬の池に住むにほ鳥の　にほ鳥は鸊鷉（カイツムリ）のこと。鴨の字をも塡てる。鴨より小さく、小鴨よりは大きい、俗にむぐりといふ鳥で、常に水に出沒し、藻木葉などを集めて、水上に巢を浮べ作る。冬の池は、氷の張るにもかかはらず、鳰鳥はその水底に潜き入るので、「つれもなくそこに通ふ」にかゝる序に用ひた。○つれもなく　知らず顔、或は口語の平氣などいふ意に當る。○そこ　底に、人代名詞の其許（ソコ）を寄せた。

大意 冬の池に住む鳰鳥は、氷を潜つて、水底を通ふによつて、うはべには見えぬやうに、私がそこ許に通ふといふことを、何氣なく知らぬ顔して、人に知らせるなよ。

評 これも奔女に誨へた語で、上なる、

君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

こひしくは下にを思へむらさきの根摺のころも色にいづなゆめ

の儔である。「難波なるみつ」と、「紫の根摺の衣」とは、殆ど伯仲の間にあつて、氣格はこれが最も下つてゐる。鳰は鴨などの類と異なり、常に居る物なのを、取り立てゝ「冬の池の」といつたのは、その氷つてゐることを聞かせる爲である。

後撰集冬に再出して、四句下に通はむとある。家集にもさうある。六帖には、氷の部に出て、下句氷の下をわれは通はむとある。又後撰には、作者不詳の歌である。

○

さゝの葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色に出でめや

釋 ○しみはつく　氷り付くをいふ。氷ることを、しむといふこと、今も方言に遺つてゐる。さて染（シ）み付くを寄せた。

大意 笹の葉におく初霜が、夜の寒い爲に氷み付くとても、笹の葉が他の草木のやうに色に出ようかまあ、色に出はすまい、それと同じ事、自分の戀も、染み付くやうに貴方の事を思ふとても、氣色に顯はさう事か、いや如何なる事情の下にも、氣色に顯はす事では無いわ。

評 夜衾氷の如く冷たく、懊惱として夢もむすばれぬ朝、庭上を見やれば、細竹は眞白に霜にまみれてゐる。覺えずそれに感奮して、「色に出でめや」と獨言つた、諷託の作である。

二三の句、六帖に、おきゐる霜の寒ければとあり、又家集には、二句おく白露のとある。

よみ人しらず

山科（ヤマシナ）の音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

この歌、ある人「あふみのうねべの」となむ申す。

釋 ○山科の音羽の山　山城の今の清水寺のある山。戀一「音羽山おとに聞きつゝ」の條に既出。○おとに　風聞に、噂などの意。○かも　やもと同じい。反動辭。

大意 このやうに忍ぶ中を、山科の音羽山の音といふやうに、風聞にも人の聞いて知りさうには、現はれて戀ひ慕はうかまあ、いやさうは戀ひ慕はぬ、ごく内々に忍んで戀ふるわ。

評 されば、事の露顯に及ぶ氣遣ひないから、御安心下さいの餘意がある。恐らくは返歌であらう。卷末、墨滅の歌の部に、あめの御門の、近江の采女に給へる「犬上の床の山なるいさや川云々」の歌のかへしとて、この歌を擧げてある。近江の采女とあるは、近江より貢した采女であらう。あめの御門は聖武天皇の事と見られてある。けれど、この歌の辭樣用語を察すると、更にその頃のものでない。初二句の「おと」の二音を反覆した序の體は、奈良時代まではなかつた。その時には、吹風のおと、行水のおと、鳴神のおとなど、直にいひ續けた。結句の「めかも」も平安朝になつての新語である。左註は、墨滅の詞書によつての書き入れと思はれる。二句、墨滅には音羽の瀧のとある。これは優つてゐるやうである。

みつ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそ待て　きよはらのふかやぶ

釋 ○みつ汐の流れひるま　滿潮の水の流れて干るといふに、晝間をかけた。○みるめの浦に　浦に海松布の寄ると續けた。みるめの浦といふ地名があるのではない。さて、海松布に、見る目をかけた。○よる　寄るに、夜をかけた。

大意 滿潮の水の流れて干るといふその晝間はサ、人目に障へられて逢ひ難いので、海松布が汐に連れて浦へ寄るといふその夜をサ、逢ひ見たさに自分は待つわ。

評 緣語の鎖り續け、いひ掛けの多さ、實に厭はしい。たゞ小手の利いたのを見るだけだ。

うらみても汐のひるまはなぐさめつ袂に波のよるいかにせむ　（續後拾遺集）

これもこの作者ので、模型が同じである。清少納言の曾祖、元輔の祖父としてこれでは困る。躬恒集に齋宮屏風の歌、

あつさ弓いるまとかたにみつ汐のひるあひがたみよるをこそ待て

似たやうな修辭で、この頃流行つたものである。

二句、六帖にひるまもとある。

白川のしらずともいはじ底清みながれて世々にすまむと思へば　平貞文

釋 ○白川　山城國愛宕郡にある。志賀山越の溪間から發して、南流して末は鴨川に合する。○ながれて　流れてに、存在（ナガレ）てをかけた。存在（ナガレ）ては、ながらへての約。○世々に　歳月の長（ハハハハ）きをいふ轉義。一世二世の意ではない。○すまむ　澄まむに、住まむをかけた。この住むは、男が女の許に住みつくをいふ。

大意 二人の中を、若し人が問はば、一向そのやうの事は、白川の名のやうに知らぬともいひはすまいわ、その

譯は、その白川の水底の清さに、流れて何時までも水の清むやうに、私は心きれいに眞實にかねての詞の通り、長らへて世と共に相變らず、貴女と一緒に住まうと思へばサ。

評　「底清み」は心の誠あるを喩へたので、あの人と末始終添ひ遂げようと思へば、人に問はれても打ち明けて隱すまいと、さも思ひ入つたらしい戀である。「底清み」など自讃してゐる點や全體の趣からいふと、機會のありつ次第二人の仲を表向にしようではありませんかの意をほのめかして、女の許にいひやつたものらしい。

初句、一本にしら浪のとあるは采らない。

したにのみ戀ふればくるし玉の緒のたえて亂れむ人な咎めそ　とものり

釋　○玉の緒の　玉の緒の如くの意。○たえて亂れむ　玉の緒が絶えると玉が亂れるのを喩へた。「たえて」はひたぶるに、一向になどいふ意。「亂れむ」は放蕩れむの意で、實の反對。

大意　心のうちにばかり戀うて居れば、ひどく苦しいわ、これではかなはぬ程に、いつその事打ち出して、玉の緒の切れて玉が亂れるやうに、一向に戀に亂れようと思ふ、必ず誰れも人は咎めて下さるなよ。

評　姿詞、大やう、戀一の、

人しれず思へば苦しくれなゐの末つむ花のいろに出でなむ

と同じやうで、堪へに堪へ、怺へに怺へた餘りに破裂した情熱である。但これは、既に逢ふ瀨を經ての戀だから、事態がやゝ殊つてゐる。萬葉集卷十一、

いきの緒に思へば苦し玉の緒のたえて亂れな知らば知るとも

に至つては、字句に二三の出入こそあれ、全くこの同意同型である。剽竊の謗は梨壺の歌人友則でものがれる事は出來ないものか。次の歌も萬葉に淵源した形迹があるから、作者は多分萬葉に枕藉したものであらう。

二句、六帖に思へば苦しとある。

○

わが戀をしのびかねてば足引の山たちばなの色に出ぬべし

釋　○足引の　山にかゝる枕詞。○山たちばな　藪柑子をいふ。冬その實が赤く色づく。本草和名に「牡丹也末多知波奈」とあるはいかゞ。

大意　自分の戀の思を、今までこそは、とかくして忍び隱して居れ、これから先、どうも堪へられなくならば、山橘の實の色に出るやうに、人目にかゝる位に、氣色に顯はれてしまひさうなわ。

評　山橘を詩材とすること、夙く奈良時代に行はれ、殊に、

足引の山橘のいろに出でて語らばつきてあふ事もあらむ　（萬葉卷四）

足引の山橘のいろに出でて吾が戀ひなむをやめがたくすな　（同卷十一）

の如き、同想の序である。しかく、修辭の一部に萬葉の糟粕を舐つてはゐるが、著想におのづから特異の點が認められ、平凡のうちに、大きな眞摯の情が籠つてゐる。一氣呵成にいひおろして、調に弛緩のないのも宜しい。

二句の終りの「ば」文字は清んでも、その意が聞える。

大方はわが名も湊漕ぎ出なむ世をうみべたにみるめすくなし　よみ人しらず

釋 ○大方は　大抵ならばといふ意に近い。七八までそれとして許すをいふ。○世をうみべたに　世を憂といふに、海べたをかけた。倦みにかけたのではない。「海べた」は海端（ウミバタ）の轉。海濱をいふ。

大意 磯端は海松布が少なさに、舟を湊から沖へ漕ぎ出して、存分に海松布を刈るやうに、大抵ならば、自分の名も、世間に立てゝしまはうわ、隱し忍ぶ中は、思ふやうに度々逢はれぬが、如何にも憂い事であるによつて、いつそ顯はしたらば、却つて思ふまゝに逢ひ見る事が出來ようと思へばサ。

評 ふと聞いたばかりでは、上句が意味を成さない。下句の説明を見るに及んで、はじめて轉義よりきた譬喩であることを曉る。素性集、

たよりなくなき名は沖にこぎ出なむよるべたもとにみるかひもなし

は、この等類だらう。いづれもいやな彫琢である。

下句、六帖に人をみるめをおきにこそかれとある。

枕よりまた知る人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかな　平のさだぶん

釋 ○枕より　枕より外。の意。○こひを　戀なるものを。の意。

大意 逢つた夜の枕より外に、又と知る人も無い戀であるものを、思に堪へかねて、つい涙を堰き止めおほせずこぼして、自分の戀を洩らしてのけた事よ。

評 知らず〳〵こぼれる戀の感傷の涙は、物や思ふと人に怪まれたら、ほんにどうならうぞ、危い事かなと、みづから悚然とした趣が見える。戀を枕が知ることは、下にも「知るといへば枕だにせでねしものを」などあつて、夙くから、普くいひならはした諺であつたらしい。必ず戀一の、

わが戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそ知るらめ

を本歌と定めるのは泥んではしまいか。歌は戀の實情があらはれてをかしいが、大したものではない。

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり　よみ人しらず

此歌は、ある人のいはく、「柿本の人まろがなり」。

釋 ○松なれや　「や」は歎辭。○ねにあらはれて云々　根に音をかけて、「顯はれて」といつた。「音に顯はれて」は、聲に立てるをいふ。

大意 風が吹くと、浪打ち寄せる岸の松は、波に洗ひさらされて、根が顯はれる物だが、自分の戀は丁度その松であることよ、實にその根の顯はれるといふやうに、音に顯はれて、ひどく泣きもしさうなわい。

評 「松なれや」の隱喩、「秋の野におくしら露は玉なれや」、「伊せの海に釣する海士のうけなれや」、「うき草のうへは茂れる淵なれや」、「わが戀は深山がくれの草なれや」の類、上にも數多散見して、面白い辭樣と思はれた

が、これは四句の秀句がなまじひに細碎に過ぎて、感興の自然を害つてゐる。却つて六帖の、

風ふけば浪うつ岸のそなれ松ねにあらはれて泣きぬべらなり

又同、みつねの歌に、

五月雨の玉にぬく日のあやめ草ねにあらはれて泣きぬべらなり

などあるが如く、上句を普通の序詞に仕立てた方が優りさうである。

左註は勿論信ぜられない。六帖にも人麿の作としたが、「べらなり」の語が、奈良時代のものでないことは、夙く春上「春のきる霞の衣ぬきを薄み」の條に説明した。

○

池にすむ名ををし鳥の水を淺み隱るとすれどあらはれにけり

釋 ○名ををし鳥の　名を惜むに、鴛鴦をかけた。

大意 あの池に住む、名がサ惜しいといふ名の鴛鴦が、池の水が淺いので、水底へ隱れるとはするが、顯はれてしまつたわい、その如く、自分の戀も憂き名の立つが惜しいので、隨分と隱れ忍ぶとはするが、顯はれて人が知つたわい。

評 庭前の池に鴛鴦の出沒するのを見て發した感興で、論語の「隱したるよりあらはるゝはなし」に表裏してゐるだけ、歌らしい氣分にはなつてゐるが、比喩がやゝ不完全である。「名ををし」の秀句が、夙く諷託の本意をいひ顯はした爲だらう。

○

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つ瀨のごと

釋 ○玉の緒ばかり　少しの間ほどの意。玉の緒のこと、戀二「死ぬる命いきもやすると」の歌の條に既出。

大意 自分達二人の中は、逢ふ事は、丁度玉の緒位のわづかな事で、その癡愛き名の立つことは、吉野川の瀧の音の高いやうで、世間へ響き渡つて、それは〳〵喧ましい事よ。

評 さても割のわるいあぢきない戀よの餘意が、上下の應接によつて生ずる。兩極端の反對してゐる現象を、ただ具體的の譬喩を以て排對した外に、何等の言葉をも挿まぬは、この簡古の妙を具へる所以で、又情味永く、風韻の高い所以である。萬葉集卷十四、

さぬらくは玉の緒ばかり戀ふらくはふじの高根の鳴澤のごと

は同想の先型である。抑も彼れを點化して詠んだものか。それともこの時代調に、彼れの轉訛して傳はつたものか。修辭表現の完全した點からいへば、吉野の瀧つ瀨の方が、富士の鳴澤に勝つてゐる。

○

むら鳥の立ちにしわが名今更にことなしぶともしるしあらめや

釋 ○むら鳥の　むら鳥は群鳥の轉。その飛び立つ光景の目につくより、「立ち」にかゝる序とした。○ことなしぶ　事無し振の意。「ぶ」は形容の接尾語。

大意　群鳥の立つやうに、世間に一度立つてしまつた自分の戀のうき名は、今改めてそ知らぬ風をしたとて、その甲斐があらう事か、いやありはすまいわ。

評　取り返しのつかぬ以上は、まゝよ事實を事實として、寧ろ遠慮もなしに逢はうと、決心の臍を固めた。この捨鉢的な態度に、その抑へ切れぬ熱情がほとばしる。二句、打聽本には立ちぬるとある。

○

君によりわが名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

大意　貴方故に、自分のうき名は、花にかゝるこの節の春霞が、野にも山にも一面に立つやうに、世に遍く立つてしまつたわい。

評　誘つた水を怨んだ落花の述懷であらう。うき名の立つにつけて、流石に女の小さい胸には、戀の甘い露に酔ひながらも、一面には空おそろしく感じたのである。「花に春霞」は、眼前の景物を序に用ひたので、世に遍くの意を、霞の縁で、「野にも山にも」と轉義した。「花に」は對手の人を擬へたとする契沖、眞淵の說はやゝ鑿に過ぎはしまいか。二句は碎けて、敍法が明快でない。初二句、六帖に君が名もわが名もおなじとある。

知るといへば枕だにせで寢しものを塵ならぬ名の空に立つらむ　伊勢

釋　○空に立つ　パッと高く立つをいふ。

大意　「いかに包んだ思でも、枕は知る」と諺にいへば、その枕さへせずに寢たものを、どうして人が知つて、塵こそ空に立つが、その塵でも無いうき名が、かう高く立つことであらうぞ。

評　假令そんな諺があつたとて、落ち着いて寢るのに、枕をしないこともなからう。これはほんの手枕ばかりの假寢を、わざと枕を取らず寢たやうに假託したのである。かうして塵ならぬ名の空に立つを訝る素地を作つたのである。さて、使はぬ枕には塵の置くことは、夙くからいひ來り詠み來つてゐるので、忽ち塵を聯想して、その縁によつて、名の高く立つことを、「空に立つ」と轉義した。修辭が纖細巧緻で、調が流滑なのは、この作者の特技である。又いふ、「空に」の語に拘泥して、なき名の立つことゝ解してはわるい。この篇次、皆その實があつて顯はれた戀である。

古今和歌集卷第十四

戀歌四

題しらず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひや渡らむ　よみ人知らず

釋 ○みちのくの云々　「あさかの沼」は今の岩代の國安積郡にある沼。古へは今の福島縣以北はすべて、「みちのく」といつた。道の奥の義。東海東北兩道の道のゆきどまりだからいふ。○花かつみ　何物とも定かでない。能因が歌枕に「かつみは菰をいふ。菰花を花かつみといふか」とある。契沖、榊原玄輔、土肥經平、星代弘賢、伊勢貞丈、喜多村節信、山本明清、井上文雄、近藤芳樹等皆これに從つた。六帖に、菰の次に、かつみの題を立てゝあるから別物のやうだが、ぬなはに次いでねぬなはを載せた類で、畢竟同物だらうと契沖はいつた。東雅、物類稱呼に陸奥の方言とあるは、萬葉集に陸奥でなくても詠んであるのを知らないからである。田字草といふ説は荷田東滿に起つて、眞淵、狛諸成等も主張したが、伊勢貞丈は同名異物と斷じた。楫取魚彦、加藤千蔭は、陸奥で今菖蒲に似て花の四片なのを、かつみといつてゐる、それが眞の物だらうといつたのに、谷川士清、石川雅望は從つてゐる。橘守部は、茨(ウキヤブ)だらうといつたが、餘り僻してゐるらしい。本草啓蒙に、菰米を充

て、あるが、それは菫葭の類で、花とはいはれない。蘆蔣といふ説もあるが、あれは深い沼には生えない。無名抄、奥儀抄などに、蘆の花とあるが、夙く、顯昭は聞えぬ説と難じてゐる。上田秋成は參河美濃などに、かつみと呼ぶ物がある。菰の類であるといつた。なほ諸説紛々として決しないが、煩はしいからあとは省く。○

大意　陸奥の安積の沼の花かつみの名の、かつみといふやうに、かつ〴〵に一寸逢つたばかりの人なのに、心に戀しく思つて、永く月日を經てることであらうか。

評　かりそめの契に捧げたわが生涯を豫想して、打ち歎いた。上句は同音を疊みかけた序で、爲にかつみるの意が強く印象されて、おのづから「戀や渡らむ」と、時間上の對映を生ずる。この語勢によつて、「人に」が、人なるにの意に聞えてくる。

下句、六帖にかつみる人の戀しきやなぞとある。

以下九首、逢ひ見て後の戀をあげた。

○

逢ひ見ずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける

大意　一度も逢つた事が無いならば、このやうに戀しい事もありますまいわ、されば、逢ふことなどせずに、只よその事の風聞にばかりサ、あの人の事を聞いて居るべき事であつたわい。

評　なまじ逢つたが爲に、枕より跡より、戀の奴が攫みかゝつて、何とも仕樣がないので、却つて噂にばかり聞いてゐた逢はぬ昔がましだと回顧した。後の物だが、敦忠の中納言の「あひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を」と詠んだのと、その情況を同じうするものである。さりとて、實に昔を今にしたいと希つたのではない。現在の苦境にたまりかねた呻吟の聲なのである。逢ひ見ると音に聞くとを對比して、本末好惡顚倒の言をなした處に詩味がある。

いそのかみふるの中道なか〳〵に見ずば戀しと思はましやは　つらゆき

釋　○いそのかみふるの中道　大和の山邊郡石上（イソノカミ）の布留（フル）の中にある道をいふ。美濃の中山、佐夜の中山、鈴鹿ふるの中道などの類である。○なか〳〵に　却つて。

大意　石上の布留の中道の名の、なかといふやうに、なか〳〵却つて、一度も逢つた事が無いならば、このやうに戀しいとは思はうか、いや思ひはすまいわ。

評　上の歌の上句の意に、初二句の序をつけた形である。逢ひ得ずに人を思ふのは、もとより戀しいに定まつたことを、なか〳〵に戀しと思ふまいといつた反興、以て今の愛慕の情の切なさが見られる。上のもこれも、業平の「世の中にたえて櫻のなかりせば」と同一の心理狀態から出てゐる。例の同音の反復もあり、かた〴〵語々流暢に詰つてゐる。

君といへば見まれ見ずまれふじの根の珍しげなくもゆるわが戀　藤原たゞゆき

釋 ○見まれ見ずまれ　見るにもあれ見ずにもあれの約。○ふじの根　根は峯の上略。○珍しけなくもゆる　當時の富士山は常に噴烟して居たからいふ。○わが戀　戀に火をいひかけた。

大意 富士の山の燃えるのは、常住の事で珍しけも無いが、貴方の事とサいへば、逢ふにつけ逢はぬにつけ、何時も富士の山の燃えるやうに燃える、私の戀の火であることよ。

評 見るに慰み、見ぬに燃えるといふのは、戀の常態なのを、我が胸のはしり火は、そんな差別がないと、常に烟火の絶えぬ富士の山を例に引いて、水平以上に熱狂した情懷を敍べた。初句は面白い。君故はなどいふ力弱い調べと違ひ、しかも、字餘りときてゐるので、「君」といふことが、絶對に重く點出されてゐる。且二句の語法が短截なのに、結句を體言で止めたので、全首の語調がおのづから勁健である。「君」と「我が」との對照の如き、卒にその用意不用意が斷ぜられない。

友則集に入つてあるのには、初句君てへば、結句もゆるわが身をとある。

夢にだも見ゆとは見えじ朝な〳〵わが面影にはづる身なれば　伊勢

釋 ○夢にだも　「だも」はだにもの略。○見ゆとは見えじ　かの人に、わが目見ゆとは見られじの意。

大意 思ふ人には、現には勿論夢にさへ、此方から逢ふとは見られますまいわ、毎朝鏡に向ふにも、甚くやつれた自分の面影に、恥かしくたまらぬ身であればサ。

評 鏡に對つて、寢くたれ髪を取り上げるのは、女の身嗜みだから、朝な〳〵の面影は、鏡の影であることは勿論である。一度逢つてから思に痩せ細つて、容色の衰へが目立つので、今更男に會ふ事を羞ちるその心根のいぢらしさ、神經質な婦人の特質を現はしてゐる。「みえじ」の決心を強くいふとて、現在を夢にまで延長した。「夢にだも」と誇張して、夢は心にも任せぬものであることを忘れた狂痴の想が面白い。一說に、たゞ容貌の醜いを羞ちる意と解したのは、こゝの部立に協はない。逢つて後色衰へた顏と見るがよい。

石間ゆく水の白波立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな　よみ人しらず

釋 ○石間　眞淵は「イシマと訓むべからず、イハマと訓むが古語なり」といひ、景樹は人丸集に證を引いて「この頃は、イシマの語ありしならむ」といつた。○水のしら波　水の色の白く立つ波をいふ。水の白しに白波をよせた。

大意 山川の石の間を流れて行く水の、白い波の立ち返るやうに、何遍も立ち戻つて來て、この通りにサ逢はうわ、いくら逢つてもく見飽きの無いことよ。

評 「立ち返りかくこそは見め」とは、常に逢ひ見むといふことを婉曲にいつたのである。上句の序、敍景がおもしろい。「水の白波」は元久時代の歌人達に喜ばれた語である。結句が惜しいことに甚だ率易である。

○

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな

釋 ○朝な夕な　宣長いふ「『な』は、何にまれ飯に添へて食ふ物をいふ稱にて、魚菜を通じていふ。轉じては單に朝夕の意にも用ゐる」と。又齋藤彦麿の說に「朝な夕なのなを魚菜の事といへるは、萬葉集の借字書きより誤を傳へたるなり。朝の間夕の間といふ事にて、之間の約はなり。よな〳〵は夜之間〳〵にて、晝を晝間といふに同じ。夜をよはといふも夜の間の義なり。夜半と書くはもとより借字なり」と。○かづくてふ　潛くといふの約。「潛く」は波にもぐることであるが、こゝは潛いて獲物を取るにいふ。○みるめ　海松布に、見る目をかけた。

大意 伊勢の海の海士が、朝夕の食物に潛き上げるといふ海松布のやうに、思ふ人を逢ひ見ることに、飽き足る仕方があつてほしい事よ。

評 上句の序は、萬葉集卷十一、

伊勢のあまの朝魚夕菜にかづくちふ鰒の貝の片思にして

を、全く襲つたものである。「みるめ」のいひかけを以て序としたのは、おのづから奈良時代とこの時代との風調の相違を示してゐる。四句、人をみるめにといひ下すべきを、調のうへから倒裝して諧へた。「朝な夕な」は、萬葉に朝魚夕菜の字を充てた如く、必ず朝食夕食の菜料に潛くことゝするがよい。輕く朝夕の意に見ては、この結構の旨趣に協はぬかと思ふ。作者は京人で、伊勢の海にはそんな事があると聞き及んだまゝに、「潛くてふ」と餘所〳〵しい表現をした。

初句、六帖に伊勢の海のとある。

友則

はる霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

大意 長閑な春霞のなびく、山の櫻の花のやうに、見ても逢つても、飽かぬあの方でまあある事よ。

評 思ふ人を花に擬へたのは、世辭か慾目か。花顏といひ、花想容といひ、似君花發兩三枝ともいつて、漢詩にも例が多い。景樹が、春霞を重く見て、「霞の隱せる山の櫻はさやかならぬ物なれば、見れどもあかぬの序とせり」といつたのはわるい。たゞ春山の花は景氣が面白くて、見飽かれない趣とするがよい。この事は既に春下、「はる霞たなびく山のさくら花」の條に論じておいた。

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

ふかやぶ

釋 ○わりなき　道理の無いの意。○ものからや　「から」は乍の意。「や」は反動辭。

大意 この心をサ、道理ない物と思ひ定めたわ、一體逢つて居ながら戀しからうか、いや戀しい筈が無い、然るにかう戀しい故にサ。

評 募る戀のあこがれに、われとわが心に愛想を盡かした趣である。「もの」の語無意味に重複してゐる。後撰集戀一、

戀のごとわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつぞ戀しき

はこれと同意で、敍述はなだらかだが、語調平靜に過ぎて、これに比するとや、情熱の活躍を缺いてゐるやうだ。

686

かれはてむのちをば知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな　凡河内みつね

釋 ○かれはてむ　「かれ」は草木の枯るに、人の離るを寄せた。

大意 夏草は今こそ茂りが深いが、時が來れば枯れる物であるやうに、追付け見捨てゝ遠退いてしまふ先の事をば知らずに、さし當つてはその夏草の深いやうに、深くもその人の事が思はれる事よ。

評 「夏草の」は「深く」の序ながら、上に「枯れはてむ」と緣語をおいて、ことわりを合はせてあるから、おのづから、比興の體を成してゐる。四句の「も」、及び「の」辭の應接、聲響がことに和諧に覺える。六帖に、二句ことをば知らで、結句人をたのみける哉とある。

飛鳥川ふちは瀨になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ　よみ人しらず

釋 ○飛鳥川　大和國高市郡にある。明日香川とも書く。冬部「昨日といひけふと暮して」の條に既出。

大意 假令飛鳥川の深い淵が、淺い瀨になる世の中であるとも、自分は一度深く思ひ染めたであらう人をば、何時までも忘れはすまいわ。

評 飛鳥川に淵瀨の變ることをいふは、奈良時代には一向無かつた。そのこれあるは、本集雜下、世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀨になるにはじまる。この歌もそれを本據として、常住の物がない世といふことを、飛鳥川を引いて具象的に敍した。「忘れじ」は卽ち變らぬのである。よつて上句に對映を生じてくる。强い貞操觀を歌つたなつかしい愛の歌である。又思ふに、四句は「思ひそめてし」といつた方が切實で、感哀が深くはなからうか。

688

寬平の御時后宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

釋 ○秋をへて　飽きを寄せたとする說もあるが穩やかでない。

大意 すべて草木の葉は、秋は色の變る物であるが、私が貴方を思ふといふ言の葉に限つてサ、秋を越しても、色の變らぬ物ではあらうか。

評 草木の葉に對映させた言の葉の混喩、尋常のことで、さのみ奇とするにも足らない。續後撰集に、昌泰四年八月十五日夜歌合の歌に、よみ人しらず、

おしなべてうつろふ秋もあはれてふ言の葉のみぞかはらざりける

時代も餘り隔らず、おなじやうに歌合の歌なのに、かほどに似てるのはいぶかしい。

題しらず

さむしろにころも片敷きこよひもやわれをまつらむ宇治のはし姫

又は宇治の玉姫

釋 ○さむしろ　狭莚。延喜式に、廣席、長席、狭席とあつて、狭い短い莚をいふが、なほ思ふに、こゝの「さ」は輕く見て、接頭語としても更に差はない。○衣片敷き　獨寢の丸寢をすれば、衣の片敷かれるのをいふ。○宇治のはし姫　「宇治」は山城國宇治郡。「橋姫」は山姫、市姫の類で、橋を守る神を橋姫といつたものか。今も宇治の橋本に姫大明神といつてある。然し眞淵が「萬葉にはしき妻、はしき妹など詠める、はしきを略きて、はし姫といへるなり。はしきは精しきにて、よき事をいふ」といつた如く、愛姫がもとで、橋姫はその附會かも知れない。秋成は眞淵説を强言だと論じた。

大意　寢莚の上に、着物を片敷いて片寢をして、今宵も多分、自分を待つてゐるであらうか、あの宇治のはし姫がサ。

評　はし姫は、宇治の里なる寵妻をさしたとしたい。平安の京から宇治は、僅に四里强の道程だから、京紳の別業を營み、或は忍び妻など据ゑた例は頗る多い。源氏物語にも、薫大將が、こゝに隱れ住ませ給ひし八宮の大姫君を思つて、京から通はれた事が出てゐる。想ふに、世のさがなき物言ひを避けて、思ふ人をこゝに隱し据ゑて、忍び〳〵に通つた人などの詠か。蘆分小舟障り多さに、この日頃打ち絶えて、今宵も亦行かれぬのを、かの情ある橋姫のことなれば、恐らくは日頃に戀りず、帶紐解き設けて下待つことだらうと、その女の動作を、細やかに想ひめぐらしたのに、いよ〳〵わが行かれぬことをもどかしがつた、纏綿の情致が露はれて、餘味が言外に饒い。「こよひ」と指定したのは、必ず逢はうと約束のあつた夜でゝもあらう。風調もまた高い。左註の宇治の玉姫とあるは取り難いかと思ふ。契沖いふ「顯註に引きたる六帖の宇治のはし姫とある歌を、今の六帖には、宇治の玉姫とあり。さればこれも六帖によりて、後人の書き加へたるなるべし」と。

○

君やこむわれや行かむのいさよひに槇の板戸もさゝず寢にけり

釋 ○君やこむわれや行かむの　この「の」は體言を承けた格で、上を一の成句と見たのである。○いさよひ　滯りて進まぬをいふ。○槇の板戸　檜などの板戸。槇は眞木の義で、美稱である。故におもに建築材料によい常磐木をいつた。今、被をのみいふは轉つたのである。○さゝず　戸鎖さぬこと。

大意　君が來うか、私が行かうかと、ためらひ〳〵して居たうちに、闇の眞木の板戸も、さゝずに寢てしまつたわい。

評　元來人の來ることを主としたのだから、「われや行かむ」は映帶の敍法で、且同調の語を反復して、姿致を取つたに過ぎない。そのいさよひに板戸をも鎖さずに寢てしまつたといふに、如何に夜ふけまで待ち設けて居つたかを思はせて、暗に來なかつた人の無情を怨んでゐる。かくて、その人に贈つたものらしい。婉曲で情味の長い作である。

六帖に、三句やすらひに、下句槇の板戸をさゝでとある。

今こむといひしばかりに長月の在明の月をまちいでつるかな　　そせいほうし

釋 ○今　口語のすぐといふに當る。○長月　陰暦九月の異名、秋下「夕づく夜をぐらの山に」の條に既出。○在明の月　空に在りながら夜の明ける頃の月をいふ。卽ち廿日以後の月である。

大意　宵の程、人が只今行かうといつてよこしたばかりに、それを誠と思つて待つもく〳〵來ずして、待ちもせぬ、夜の長いこの長月の末の、しかも早くでも出ることか遲く出る在明の月を、早もう待ち出した事よなあ。

評　さても待つ人は、どうしたのかの餘意がある。待たねど出てくる月を擧げて、待てど來ぬ人の不信を反映させ、長月の在明の月と諄くいひ立てゝ、さほど夜の更けるまで音もしないのは、いよ〳〵來ぬに定まつたと、失望怨嗟の意を深めた。況や時もあらうに夜の最も長い長月の、しかも最も遲く出る頃の在明の月を待ち出したといふに、ひどく待ち恍けた趣を思はせたもので、婉曲で味ひ永く、姿は素直に、めでたい歌である。

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず　　よみ人しらず

釋 ○月夜よし夜よし　月夜よし、月夜よしと重ねた詞であるのを、上略したのである。「東屋のまやのあまり」「忘るなよよといひにし」など、皆同じ省略格である。○こてふ　來といふの約。「來」は命令格。○待たずしも　「しも」は十の八九は、しかる意を表す辭。

大意　今夜は大層よい月夜だが、月がよい〳〵と、表向きあの人の所へ告げて遣らうなら、やはり來いと催促するに似て居るわ、それも餘りはしたないからやめにしようとは思ふが、あながち又あの人のお出を、待たぬ譯でも無いわ。

評　月のさやかな夜中まで男が來ないので待ちあぐんだ、女の煩悶の聲である。月に託する好方便もつゝましく、さりとて待たずしもあらずを何としよう。この撞着が胸中に反復されて、苦悶の末は、遂に茫然自失するに至つて已む。この心理狀態を想像する時は、詩味一段と長い。萬葉集卷六、

わが宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たりちりぬともよし

を本歌にした換骨奪胎で、おのづから別趣の妙を具へ、文情曲折して、餘韻悠然として永い。風格も高古で語語遒健である。「待たずしもあらず」は何といつても掉尾の豪句。四五の句間に意釋の如き意が略されてある。

○

君來ずば閨へも入らじこむらさきわがもとゆひに霜はおくとも

釋 ○閨　寢屋の義。○こむらさき　濃紫。○もとゆひ　元結。髻を結ぶ物をいふ。和名鈔に「髻、和名、毛度由比、以レ組束レ髮也」とある。

大意　君が來ぬならば、何時までも閨へ這入るまいわ、かうして夜の更けるまで外に立ち待つて、私の濃紫の元結へ、眞白に霜はおくとも構はずにサ。

評　古は男女を通じて髻を取り上げ、元結に紫などの組絲を用ひたと想はれるから、歌主はいづれとも決し難い

が、閨をいひ、濃紫の元結をいふ處、何となく女らしい方に傾いてゐるから、婦人と見てよからう。さては、婦人の情として、最も大事にすべき頭髪に元結に、霜の零るをも厭はず、門に倚つて立ち待つとは、どんなにか切な戀であつたらう。蓋し肺腑の語で、同情に堪へない。三四の句、正しくは、濃紫なる元結といふべきを、なるの辭を省き、「わが」を隔てゝ「元結」へ續けたのは、詩形に制限せられた結果であらう。濃紫の元結に霜を取り合はせたのは、色相の配合が鮮やかである。「霜はおくとも」の語に戀の決心の深さを表した例は、集中にも多い。但萬葉集に、

居明かして君をば待たむぬば玉のわが黒髪に霜はおくとも　（卷二）

待ちかねてうちには入らじ白妙のわが衣手に霜はおくとも　（卷十一）

これら同想同型である。剽竊とすれば餘りに甚し過ぎるが、想ふに、或はこの歌どもが轉つて、本文の如く傳へられたのかも知れない。但三首中では、これが最も優れてゐる。起句既に千鈞の力あるうへに、原歌の君をば待たむ、或は待ちかねてなど、卒易な語を著けたのと選を殊にし、又、黒髪に換へて「元結」を擧げたのも婉曲で、格調もまた高古である。

○

宮城野の本（モト）あらのこはぎ露をおもみ風を待つごと君をこそ待て

釋 ○宮城野　陸前國宮城郡。今の仙臺市の東偏にその名がなほ存してゐる。○本あらのこはぎ　幹疎（モトアラ）の小萩。末の茂つて、本立のあら〳〵とした萩をいふ。おなじ草萩でもこれは野萩であらう。「小」は美稱と見るがよい。眞淵は、これを木萩と解したが、あのあたりの丘陵原野に今も萩が多いが、皆草立で、木立のは見えない。○待つごと　「ごと」は如くの意。

大意 宮城野の本あらの小萩が、枝の露が重いので、その露を吹き散らす風を待つやうに、私も貴方をサ待つことわい。

評 幹疎く枝葉の密なのは、露に撓み易い譯なので、さも風を待つてゐるさうな趣が見はれ、隨つて君を待つことも大方ならぬことが、言外に立證された。「待つ」の反復はこの場合最も有力な表現である。「風を待つ」の擬人、結句への關係を親切ならしめる。湊合的確に、情思曲折して清麗である。

○

あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

釋 ○あな　歎辭。○見てしが　「か」は願望の辭。がなと同じい。○山がつ　山住の賤民をいふ。○垣ほ　「ほ」は秀の意であるが、垣とのみいふに同じい。○やまとなでしこ　秋上「我のみやあはれと思はむ」の條に既出。

大意 あゝ戀しい、只今なりとも逢ひたいものよ、山人の家の垣根に咲いてある、その大和撫子をサ。

評 撫子がしどけなけに咲き出した山里の垣根のうちに、いと思の外なやさしい綺麗な人を見たので、垣根の撫子にその人を擬へて、戀し見たしと、立つても居ても物の思はれる熱情を敍べた。初二句の漸層はこの意趣を描くに、適當の表現である。眞率のうちに寄興あり、情文相協つて面白い。

○

津の國のなには思はず山城のとはに逢ひ見むことをのみこそ

釋 ○津の國　攝津の古名。○なには　難波に、何はをかけた。常は永久不斷などの意。

大意　自分は、津の國の難波といふ名の如く、何もは外に思ひはせぬ、山城の鳥羽といふ名の如く、常に卽ち不斷、只あの人に逢ひ見ようことばかりをサ、思つて居るわ。

評　津の國の難波、山城の鳥羽、名所を聯對して、序に用ひた。結句、「事をのみこそ思へ」といふべきを、上の「思はず」を響かせて略いた。初二句は映帶の筆法で、句法も三句以下に排對させ、「思ふ」「思はず」を照映せしめた。畢竟一途に逢ふことを思ふの意を、かう潤飾したものである。もしこれが難波男が京女を戀したのなら、地名の運用が單なる修飾の爲ばかりでなくなり、頗る自然に聞えてこよう。

敷島の大和にはあらぬ唐ごろもころもへずして逢ふよしもがな　つらゆき

釋 ○敷島の云々　「敷島」は大和國磯城郡の今もある地名で、此處に欽明天皇の磯城島の金刺宮を建てられてから、遂に大和に續けての枕詞となり、大和の國がまた代々に帝都であつたので、延いて日本全國の稱と轉つては、敷島も日本全國にかけて稱する名となつた。○唐ごろも　羈旅「から衣きつゝなれにし」の條に既出。

大意　敷島の倭の國では無い、唐といふ國の名のついて居る唐衣の、ころもといふやうに、頃も經ずに間無しに、逢ふ仕方があつてほしい事よ。

評　「頃も」の同音を冠せる爲に「唐衣」とおき、その「唐」をいふ爲に「敷島の大和にはあらぬ」とおいた累々層々の序、これも一體である。雜下、

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

と、殆ど同型の作である。「頃も經ずに」が強く印象させられるが、又源氏物語に「かへすがゝぞ唐衣なる」の刺笑も一寸聯想されないでもない。

戀しとは誰が名づけけむ言ならむ死ぬとぞたゞにいふべかりける　ふかやぶ

釋 ○言ならむ　事ならむではない。○たゞに　ひたすらに、一途になどの意。直にが正義。

大意　思ふ人を慕ふ事をいふに、戀しいとは、昔誰れが名付けて置いた言葉であらうぞ、そのやうな生ぬるいひ方よりは、死ぬとサ手短く直にいふべきであつたわい。

評　戀しといふ詞では、死ぬほどに戀しい表情に、不十分な氣持のするまゝに、直にその結果たるべき「死ぬ」の語を以て、その表情の符標としようといふ、常識を失した不合理の論理とその辭氣の劇しさとは、殆ど狂人の譫語にひとしい。この血の氣澤山なる所に詩味の活躍がある。

二三の句、六帖に誰が名付けゝる言の葉ぞとある。

みよし野の大川のへの藤なみのなみに思はゞわが戀ひめやは　よみ人しらず

釋 ○大川のへ　大川の邊。大川は、吉野では吉野川をいふ。○藤なみ　春上「わが宿に咲ける藤なみ」の條に既出。○なみに　並に、一通りになどの意。

大意 三吉野の大川の邊の、花の咲いて居る藤波のなみといふやうに、並々の者と貴方を思はうなら、このやうに私が戀ひ慕ひはしますか、いや戀ひ慕ひはしませぬわ。

評 三句までは、「なみ」の同音に疊みかけた序である。古へは吉野川の岸邊には、山藤など這ひかゝつて咲いてゐたので、序詞に使つたと見える。實際眞劍に人を戀することは、あだやおろそかな事ではないが、「なみに思はゞ」は或は世にいふ氣休め文句で、かういつて人に贈つた歌ではあるまいか。萬葉集に、松浦川で釣魚の娘子等の詠んだ、

若鮎つる松浦の川の川波のなみにし思はゞわれ戀ひめやは　（卷五）

に下句が全く符合してゐる。いづれも序歌で、松浦の川波と、吉野の藤波との差があるだけだ。場所を近畿に換へ、調をも改めて、平安朝の手振に近づけてはあるが、つまりは一つ歌と思はれる。

○

かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける

釋 ○心のうら　心中に立てた占形。○まさし　正し。卜占は正確なるを尚ぶ。故に占正の語がある。

大意 最初から、後でこのやうに戀しくならうものとは、自分も思ひ設けた事であつた、されば、その最初の自分の心の内の占ひがサ、正しかつた事であるわい。

評 果して豫想した如くであると、知りつゝも苦しい戀の淵にはまつた今を、自分から弔してゐる。初二句、六帖に忘れなむ物とはかねてとある。

○

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

釋 ○ふみとゞろかし　踏み立てゝ轟かし。○なる神　雷。○さくる　遠退くるの意。鳴神の裂くにかけた。神代にも、拆雷の名がある。中島廣足いふ、「避は下二段活、裂は四段なれど、鳴神の方にてはさくまでにかゝりて、さくるとまではかゝらず。いひかけにはかやうの語例多し」と。

大意 あのやうに、大空を踏み轟かして、仰山な音を立てる鳴神は、何でも割り裂く恐ろしい物ではあるが、その鳴神さへも、互に思ひ合つた中をば遠ざけるものか、いや遠ざけはせぬわ。

評 假令何事が起るとても、二人が仲は決して裂かれるものではないの餘意がある。景樹が「世に噂の高くなりたるに怖ぢて、女の、かくては添ひ遂げむ末いかゞならむなど打ち詫びたるを諫めて、遣はしたる歌ならむ」といつたのは當つてゐる。來れ天雷何物ぞの所信、その情熱の天地に磅薄して、いかに高くいかに大いなるかが見られる。「踏み轟かし鳴る神」すら既にかうだとすると、かの紛々たる人言の如き何かあらむの反映が、言

外に躍如としてゐる。雷の音を「踏み轟かす」といつた擬人的想像も、また頗る面白い。尤も雷は日本でも支那でも、古代から神格を與へてはゐるが、その連鼓を負つて荒れまはる樣子を出したことが、鳴神の力强さを表現するもので、隨つて下句の意を强く反覆する。辭氣跌宕で、理無く情あり、語々句々百錬の鐵の如くである。傑作と稱してよい。

前卷の「かねてより風に先立つ云々」より「こりずまに又もなき名は云々」までの五首は虛名を歎く戀、「池に住む名ををし鳥の云々」より「君によりわが名は花に春霞云々」までの四首は實名を歎く戀、この卷のこの「天の原」より「里人の言は夏野の云々」までの四首はいひ妨ぐる戀を並べた。おの〳〵大同にして小異がある。

○

梓弓ひき野のつゞら末つひにわがおもふ人に言のしげけむ

この歌は、ある人、「あめのみかどの、あふみのうねべに給ひける」となむ申す。

釋 ○梓弓　ひき野に、梓弓ひくといひかけた枕詞。梓弓のことは春上「梓弓おしてはる雨」の條に既出。○ひき野　河内國に日置と書いて、今へキと唱ふる所がある。そこの野であらう。○つゞら　延喜式に、黑葛と書いてある。和名鈔、葛類に「本草云、防已、一名解離、阿乎加豆良」とあるは同物か。小野博いふ「防已は、青かづらとも、青つゞらとも、つゞらかづらとも、つゞらふぢともいふ。蔓至りて長し」と。枝から枝が咲いて蔓延してゆくので、「末遂に繁し」と喩へた。○言のしげけむ　言の繁くあらむの意。物言のうるさいのをいふ。

大意 日置野の葛の、ひろがつて繁つてゐるやうに、末には遂に、自分の思ふ人に名が立つて、いろ〳〵と世に噂が繁くなるであらうわ。

評 世の物言のさがなさは、昔も今も變りはない。若しそれが男女間の事となると、一層甚しい。戀路に立つ者としては、これが一番こはい。詩の鄭風に、

將仲子兮、無レ踰二我園一、無レ折二我樹檀一、豈敢愛之、畏二人之多言一、仲可レ懷也、人之多言、亦可レ畏也。

人情は何處も同じものである。但かう將來の人言を豫想して危惧の念に驅られてゐるが、よく見ると、更に踏み込んだ第二の危惧が暗示されてある。それは外でもない、もしその場合には手を切らずばなるまいかといふ事である。夏草などに喩へて、人言の繁きを歎いた例は、萬葉集に數多あるが、かう葛蔓の末繁きに比興したのは無い。緣語の寄せに、ひき野まで取り出したのは、この時代の風調である。左註の「あめの御門云々」は例の采らない。

○

夏引の手びきの絲をくりかへし言しげくとも絕えむと思ふな

この歌は、返しによみて奉りけるとなむ。

釋 ○夏引の云々　春蠶倒して夏絲を引けば「夏引」といひ、手して引けば「手引の絲」といひ、それを、籗に懸けて繰り反すが故に、「くりかへし」といつた。○絕えむ　語らひを罷めること。俗に手を切るといふに同じい。

大意 ゆくする假令、世間の噂は、夏引の手引の絲を繰りかへし〳〵するやうに、かへす〴〵繁くとも、何時までも私との手を切らうとはお思ひなさる勿よ。

評 女の歌であることは勿論である。されば、女紅なる手引の絲のくりかへしを以て序とし、絲の縁で、「絶えむ」といつた。まことに引き延へて繰つた絲の如き敍法である。世間の噂を憚つてゐるやうではと、豫め相手を警戒したのに、婦人の思ひ迫つた情致が見える。

左註は例の采らない。しかし上の歌の返歌としてふさはしい趣である。

○

里人のことは夏野のしげくとも かれゆく君にあはざらめやは

釋 ○夏野の　夏野の如くの意。○かれゆく　離れゆくに、枯れゆくを寄せた。

大意 世間の噂は、假令夏野の草のやうに繁くあるとしても、それ故遠退いてゆく君に、逢はずにおかうか、いや逢はずにおきはすまいわ。

評 上句は、全く萬葉集の、

人ごとは夏野の草のしげくとも妹とわれとしたづさはり宿ば（卷十）

から出てゐる。「枯れゆく」の緣語を持ち出したのは、上の「梓弓ひき野つゞら云々」、「夏引の手引の絲云々」と同巧で、皆この時代の風調である。萬葉卷四、高田女王が今城王に贈れる、

人言をしげみこちたみ逢はざりき心あるごとな思ひわが背

この世には人言しげしこむ世にも逢はむわが背子今ならずとも

の返歌ともいふべきさまで、世間の人言に躊躇する戀と、それを物の數ともせず猪進する戀とを對映させて、愛の高潮を歌つてゐる。

藤原敏行の朝臣の、業平の朝臣の家なりける女をあひしりて、ふみ遣はせりけることばに「いままうでく、雨のふりけるをなむ見わづらひ侍る」といへりけるを聞きて、女に

かはりてよめる

かず〳〵に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞ增れる　在原業平朝臣

釋 ○藤原敏行の朝臣の云々　敏行朝臣が、業平朝臣の家に居る女といひかはして、消息を贈つた文句に、「今參らうと思ひますが、雨が降つて居るのを見合はせて居ります」といつてよこしたのを聞いて、その女に代つて業平が詠んだとの意。これも伊勢物語の文意を摘んで書いたものと覺しい。伊勢の本文は長いから略する。前田夏蔭いふ「この端詞定家卿の書かれしといふのに、『雨のふりけなるをなむ』とあり。これいとよろし」と。○かず〳〵に　數々に。宣長が、深切の意と解いたのははやい。○とひがたみ　問ひ難さに。○身をしる雨　身の運命を知る雨。

大意 いろ〳〵に、親切にいはれるが、誠に思ふやら思はぬやら、お心のうちが問ひ難いので、心配して居ましたが、幸ひ私の身の程が知られる雨が、降りに降つてサ來ました、この大降の雨に濡れ〳〵も來て下さらば、私は深切に思はれて居る幸ある身と知りませうし、來て下さらずば思はれぬ不幸の身と知りませうわ。

評 顯註をはじめて、諸家の說まち〳〵である。中に、高尙、廣蔭の釋が優れてゐる。依つて兩說を參酌して意

釋に擧げた。景樹は素より、この詞書を勢語の攙入としてゐるから、詞書を離れて、

懇に思ふ故に訪ふ、さは思はぬ故に訪はぬといふにあらず、とてもかくても訪ひ難さに、只涙のみ落ちまされり。

と釋き、「身を知る雨は涙を云へるにて、この頃のいひならひなり。伊勢集『かたみにも身を知る雨の降りし哉』、六帖に『今日は身をしる雨とこそ降れ』の類、證とすべし。さて詞書は『題しらず』か、又は雨によりたるさるべき詞ありけむかし。今知れ難し」といつた。「身を知る雨」を涙とするは古說で、既に顯昭は、それを僻言だと難じてゐる。身を知るといふに、何とも仕樣模樣もない、わが身の宿世を怨ぶる意が、下に匂つてゐる。

ある女の業平の朝臣を、所定めずありきすと聞きてよみ

てつかはしける

大幣（ヌサ）のひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

釋 ○所定めずありきす　彼方此方に人を据ゑて通ひあるくをいふ。○大幣の　大幣の如くの意。これも伊勢物語に「晉男、ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみまさりつついへる」とある。「大幣」は顯昭が「祓するに、陰陽師の持ちたる串にさしたる四手（シデ）なり。祓へて果てぬれば、これをおの〳〵引き寄せつゝ撫づる物なれば、ひく手あまたと詠めるなり」と解したので明らかである。「大」は美稱、「幣」は本來麻でつくる故に、麻をヌサとも訓む。○ひくて　引く方といふに近い。幣のうへでは、勿論ひく手である。○頼まざりけれ　頼まれざりけれの略。頼まぬの意とするはわるい。

大意　大幣が數多の人の手に手に引かれるやうに、貴方は、近頃は引つ張られる所が、方々に多くなつたので、私こそ淺からず思ふけれども、貴方は一向頼みになりませぬ事わい。

評　あゝ、私ひとり情ないの餘意がある。頼まれぬは人情の哀切者である。その辯それに愛想をつかす程の勇氣をもち得ないで、いら〳〵悩する。こんなみじめな事は世にあるまい。想ふに、はじめは大層篤實らしいのにめでて、許した戀であらう。この趣、「なりぬれば」とあるので聞き知られる。三句、伊勢物語には聞ゆれば」とある。

かへし

なりひらの朝臣

大ぬさと名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀨はありてふものを

釋 ○流れても　「も」は歎辭、口語のてもの用法とは殊なる。幣に「流れて」とあるは、水無月祓（ミナヅキバラヘ）に麻（ヌサ）を川に流すことがあるからである。

大意　私は引手數多の大幣なりと、名にこそ立てられたれ、その大幣も川へ流れ〳〵てまあ、果には流れ寄る所の瀨はあるといふものを、私とても末にはいづれ、寄る所がありませう。

評　その寄る所はいふまでもなく貴方の處です、それをお怨みなさるは心得がたいの餘意がある。文情曲折の間に、餘韻悠然たるものあるはこの朝臣の壇場で、殊に諷託の妙がある。

題しらず

すまのあまの鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

よみ人しらず

釋 ○伊勢物語に出て、詞書に「昔男、懇にいひちぎりける女の、ことざまになりにければ」とある。○すまのあま　須磨の海人。須磨は攝津國武庫郡。○風をいたみ　風が太くての意。いたみは甚しきをいふ。

大意 須磨の浦の海人の鹽を燒く烟は、風が格別に強いので、あれあのやうに、思ひも寄らぬ脇の方へたなびいて往つたわい、といふが表面の意で、自分の思ふ人も、強ひて誘はれるまゝに、思ひも寄らぬ人の方へ靡いてしまつたわい、といふが裏面の意。

評 山厲河帶の盟誓もその甲斐なく、艶なる夢も今は冷たいものとなつた。それも他の者に見換へられたとなつては、嫉妬と悔恨とで胸は張り裂ける。萬葉集の、

志賀のあまの鹽やくけぶり風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく　（卷七）

を襲つたやうだが、原歌は單なる旅中の敍景なのを、これは諷喩に仕立てたから、蘊含の味ひに、無量の感慨を生じて、おのづから獨立したものとなつた。おなじことながら、躬恒集に、

もしほやく蜑のたく火の烟こそ思はぬかたに立ち昇るらし

は、これに比して大いに劣つてゐる。

初句、六帖に伊勢のあまのとある。

○

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

釋 ○この歌伊勢物語に出て、詞書に「昔男久しく音もせで、忘るゝ心もなし、參り來むといへりければ、女」とある。○玉かづら　蔦類の植物。和漢三才圖會に「玉蔓、其蔓引地、葉似忍冬葉而厚、春開小花、色青綠可レ愛」とある。○たえぬ心　緣を絶やさぬ心。

大意 葛のあの木へもこの木へも這ひかゝるやうに、貴方もあちこちと通ふ所が數多になられた故、私の方の緣を切りはせぬものゝ、そのお心が、何の嬉しいやうも無いわ。

評 口ばかりうまくて誠實のない人に贈つたのだらう。「たえぬ」は比興の玉葛の緣語である。といふは、葛はその蔓が長々と生び延びて、引いても切れぬからである。

顯本には、二句以下、はふ木のあまた見えぬればたえぬ言の葉とある。伊勢物語には、四句、普通本は本文のと同じく、眞名本は顯本と同じい。すべて顯本が宜しいかと思ふ。本文の二三の句は、上の「大幣の引く手あまたになりぬれば」にほゞ同じい。筆寫の際つい混れたものであらう。次々の五首の歌も、詞の僞なのを怨んだ意だから、これもその一列で、たえぬ言の葉は書簡だけ絶やさず通はすのをいふ。

○

たが里に夜がれをしてか時鳥たゞこゝにしも寢たる聲する

大意　今夜は珍しく、何處の里に一夜を闕かしてか來て、この時鳥はそらさぬ顔して、只此處にサ寢る積りで泊つたやうな聲をすることよ、といふが表面の意で、絶えず通ふらしい誰が里をか、めづらしく今宵夜離れして來ながら、外へなどは一向通はぬ風をして、只私の許にばかりにサ、泊つてゐるやうな事をいふ事よ、といふが裏面の意。

評　作者は婦人であらう。夏歌、

時鳥なが鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

と同一の諷喩で、さる輕薄なる男が辯口を弄する狀態が、「聲する」の一語に表現されてある。宣長が「これは時鳥を詠める歌なるを、こゝに入れるは誤なり」といつたのは、この諷意を聞き知らぬ疎漏である。「誰が里に夜がれをしてか」とその急處を衝いて、詰責冷罵した口氣には、流石の鐵面漢も慚汗三斗、その背を沾すを覺えるであらう。實にこの歌の活躍して、一段の妙味と一層の姿致と添へるのは、この疑問の體を用ひた處にある。

○

いで人はことのみぞよきつき草のうつし心は色ことにして

釋　○いで　發語である。○ことのみ　言のみ。○つき草　螢草をいふ。委しくは、秋上「月草にころもは摺らむ」の條に既出。この花の色は物に移つて染み易い。これを貯へておくには、その花汁を紙に染ませて乾しておく。入用の時水に浸して溶かして使ふ。これを移し花といふ。よつてうつし心の「うつし」にかゝる枕詞とする。○うつし心　移し心で、變り易い心をいふ。○色ことに　色殊に。格別に色の深いのをいふ。

大意　いやもう貴方は、逢ふと親切さうに、ひどく口先ばかりサよいわ、月草のやうに移り易いお心は、月草の色の、一時はあざやかであるやうに、格別に御親切らしく見えてサ。

評　月草の緣で、著き心を「色殊に」といつた。「人は」は差別の語だから、お世辭こそいはぬが誠ある自身を誇つて、他をおとしめた寓意が隱然としてゐる。

○

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし

大意　嘘といふものゝ無い世の中であらうならば、貴方のこのやうに親切にいつて下さるお詞が、どの位嬉しい事でありませう。

評　しかしとかく嘘の世の中なれば、貴方のお詞をうかと信じて嬉しがられもせぬの餘意がある。狂熱の血を湧すものもなく、思索の顧を解くものもない、平々凡々たる口頭語のやうではあるが、一誦再誦、必ず人をして同感に禁へざらしめる。想ふに平凡の眞なるものであらう。殊に場合が戀であるだけに、餘計に痛切な感じがする。六帖に、

世の中に絶えて僞なかりせばたのみぬべくも見ゆる玉章

同一の構想ながら、巧拙に月鼈の差がある。措辭の忽せにし難い一例である。

○

いつはりと思ふものから今更にたがまことをか我れは賴まむ

大意　あの方のお詞は例の嘘ごとは思ひながらも、やはりそれを頼みにして居るわ、假令ほかに誠ある人がかれこれいつても、今更心を移して誰れの誠をサ、自分は頼みにはしようか、決して頼みにはしはすまい。

評　貞女の兩夫にまみえぬ決心である。この誠意は空言する不誠實な人の心に、好個の反映を成して、一段の光彩が添はる。好かぬ人の誠よりは好いた人の嘘がよいとは、眞に嬉しい實意である。隨つてその聲沈痛で、怨意がおのづから深い。かの口蜜の如き輕薄の兒、これを聞いては羞死せずには居られまい。上の歌に比すると、一歩思索の境に足を進めたものである。僞と誠との對照の如きは、そも〳〵語言の末である。拾遺集戀五に再出してゐる。詞書にも字句にも、異同が無いのを見ると、偶然の重複と思はれる。

秋かぜに山の木の葉もうつろへば人の心もいかゞとぞ思ふ　　素性法師

釋　○うつろへば　花や木の葉には、色の變つて散るのをいふ。

大意　この頃の秋の風に、山の木の葉が變つて行くのを見ると、頼みに思ふ人の心もどうあらうか、變りはすまいかとサ、氣遣ひに思はれるわ。

評　時節柄ゆゑどうあらうかと疑つたのは、素より頼もしけなき人の心を、下に歎いたものである。「移ろへば」が字眼で、聯想の楔子になつてゐる。「いかゞとぞ」と疑問を存した敍法は、不盡の意があつてよろしい。以下六首は、皆人の心の移るのを詠じてある。

蟬の聲聞けばかなしな夏ごろもうすくや人のならむと思へば　　寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　友則

釋　○かなしな　「な」は歎辭。

大意　蟬の聲を聞けば悲しい事よ、そのわけは、はやまことの秋が來るばかりか、心の飽きさへ來て、夏の衣の薄さを覺えるやうに、人の契が薄くならうかと思へばサ。

評　「夏衣」は時節の景物を以て、「薄くなる」の序に用ひた。夏衣の薄くなるとは、その薄さを感ずることで、即ち秋の來ることが聯想され、秋のくるは即ち飽きのくることを暗示してゐる。宣長が蟬の羽衣の緣をかねていつたのはわるい。蟬は秋の景物とし點出されたのである。

結句、六帖にならむとすらむとある。

題しらず

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬものゝかれぬべらなり　　よみ人しらず

釋　○空蟬の　世にかゝる枕詞。春上「うつせみの世にも似たるか」の條に既出。

大意　世間の人の噂が繁くあるから、互に約束した心は忘れはせぬものゝ、おのづから世間を憚つて、逢ふ事も遠退いて、二人の中も離れてしまひさうだわい。

評　これ決して杞憂ではない。社會に從順な自我的でない當時の人の心持からは、進退に谷つた場合の呻吟の聲

であらう。

○

あかでこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

釋 ○忘れがたみ　忘れ難(カタ)みに、形見をかけた。形見は記念の物をいふ。

大意　思ひ合つて居る中は、互に飽きの來ぬうちにサ、別れてしまはうよ、飽きが來て別れたのでは、思ひ出しても臭れまいから、それよりは今のうち別れて、この互に飽かぬ心持をなりとも、後々の忘れ難い記念にしようわサ。

評　痴話が嵩じての喧嘩も、度重なつては、自然末の見込もなくなる道理で、男は流石に何とも思はぬが、氣の小さい女としては、緣を切るならば、愛想盡しをせぬ今のうちになど、悲觀することもありさうである。作者は必ず婦人であらう。結句、形見にせむの意であるのをいひさしてある。

○

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき

釋 ○ありしよりけに　「けに」は殊に、勝つてなどの意。

大意　あのやうに不實な人の事は、もう忘れてしまはうと思ふ心が附くにつけて、さて絶えて後はどうであらうかと、又心細くなつて、今までよりはなほ增つて、別れぬ先から早悲しいわ。

評　いくら怨めしいの憎いのといつた處が、もとが愛し合つた中で、いざといふ土壇場となると、心の底に潜在してゐる曲者が頭をもち上げてくる。そこが人情の嬉しい處だ。伊勢物語に、

忘らむと思ふこゝろのうたがひにありしよりけに物ぞ悲しき

は、これを少し換へて、物語を添へたものか。玉葉集戀四に、

忘れなむ今はと思ふ時にこそありしにまさる物思はすれ

は、二三の文字に出入はあるが、全く同歌である。作者は詠人しらずであるが、詞書に「謙德公に贈れる歌」とある。謙德公は圓融帝の朝の一條攝政藤原伊尹公だから、時代が差つてゐる。或は、折に打ち合つてゐたまゝに、古歌を書いて贈つたとも考へられる。後撰集雜二に、上句はこれと同じで、下句「言の葉さへやいへばゆゝしき」とある歌の詞書に、「みそか男しける女を、荒くはいはで問へど、物も言はざりければ」とある。この詞書の意は大抵この歌の趣に合つてゐる。

○

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

釋 ○人のあき　飽きに、秋をかけた。

大意　もう貴方の事は忘れてしまはうわ、さりとて必ず私を恨んでくださるなよ、あの時鳥は、人の心の飽きといふ名の、秋の時節には逢はうともせずに、夏のうちに去つてしまう、私もうかゝとして居て、人の心に飽きの來る時節に逢はうとは思ひませぬわ。

評 むごい目にあはぬ先に、此方より身をひかうと思ひ込んだのは、よく〳〵の事であらう。飛花の如き遊蕩子そも何と聞くであらう。

この歌、兼輔集に入つて、女に贈つたものとなつてゐる。けれども兼輔は撰集當時の人だから、こゝに詠人しらずとする譯がない。

○

たえずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

此歌、ある人のいはく、「なかとみのあづま人がうたなり」。

釋 ○飛鳥の川　冬部「きのふといひけふと暮らして」の條に既出。

大意 絶えず流れて、遂に淀んだことの無い飛鳥川が、忽に淀むといふやうに、何時も絶えず通ふこの自分が、餘義ない事情の爲に、暫時も通はぬ事があらうならば、絶える心のあることゝ、あの人が思ふであらうか。

評 あゝ心配の事かなの餘意がある。障る事があつて、行きかねた折の作であらう。飛鳥川は比興に用ひたのだから、「たえずゆく」は作者の行動をも擬へてある。通ふ事の滯るを、川の緣で「淀み」と轉義した。この歌のいゝ處は、「人のおもはむ」と氣遣ふ處にある。一にも二にもあれが〳〵と氣に懸けて、その機嫌取に汲々として居る作者の態度が見はれて、そのやさしい萬斛の情味が、湧然として生じてくる。風調がまた古に近い。果して萬葉集卷七、詠者不詳の歌の、

たえずゆく明日香の川のよどめらば故しあるごと人の見まくに

と同想同型である。この轉つて傳はつたものか。

四句、一本に心あるとやとあるについて、田中道麿は、「心あるごとやのご文字の落ちたるならむ」といひ、宣長は「この歌古き姿なれば、必ず然るべし」と賛したが、この集はわざと今調に引き直して採錄するは常の事だから、古き姿必ずしも、この集の眞面目とは定められない。左註は例の據り難いものだらう。

○

淀川のよどむと人は見るらめどながれて深き心あるものを

釋 ○淀川　宇治川の末で山城攝津を流れる川。○ながれて　長れてに、流れてを寄せた。

大意 この頃しばらく、繁くもえ通はぬを、淀川の淀むやうに、何ぞ此方の心に滯があると、貴方は見るであらうけれども、此方はそれは〳〵深い思はくがあるものを、しばらく遠退いたとて怨んで下さるな。

評 人目人言を憚つて、しばし躊躇うてゐる頃ほひでゝもあらう。當分足を退いて、嫌疑でも避けて、それから末長くゆるりと逢はうといふ計畫なのを、一方では察しがなく怨んで來たので、自分の態度について辯明したものである。恐らくは返歌であらう。初句は「よどむ」の序、「ながれて深き」は川の緣語であることは勿論である。そして淀川の實景も帶敍してゐるらしい。

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は立て

素性法師

釋 ○そこひ　退方(ソキヘ)の轉語で、極み、果てなどいふ意。○淵やはさわぐ　淵は波の騒がんやはの意。○あだ波役にも立たぬ波。「あだ」は空の意。

大意　底のはても無いやうな深い淵がサ、波の騒ぐものかいや騒ぎはせぬ、山川の淺い瀨にこそ、ざわ〳〵と仇な波は立つわい、といふが表面の意で、私のやうな淵のやうに深く思ふ者は、口へ出して何かといひはせぬが、貴方の眞實らしく何かといひ騒ぐのは、つまり山川のやうな淺い心の仇浪ぞよ、といふが裏面の意。

評　一寸地理的報告めいてゐるが、よく見ると作者の主觀が活いて、そこに不可動の眞理が籠り、諷喩として多くの場合に適應する。今は、我が戀に餘りはづまぬやうに卽ち冷淡なやうに、向からいつてきたのを承けて、借りて以て答へたのである。字句精鍊をきはめて、窮りない含蓄がある。

初句、六帖におほかたのとある。結句、素性集も六帖もうは波は立てとある。景樹はこれを執したが諸はれない。うは波は平凡で何の事もない。「あだ」の一語でこの歌は生きるので、口前ばかりよい人にさし當てた趣が、強く表現されて面白い。

上の「たえず行く」「淀川の」の二首は、我がと絶えをわが心苦しく思つた意、この歌より「陸奥の」の三首までは、人より恨み咎められたのを受けて、詠んだもの。

くれなゐのはつ花染のいろ深くおもひしこゝろわれ忘れめや　よみ人しらず

釋 ○はつ花染　くれなゐ卽ち紅花(ベニバナ)は、房(フサ)の數多あるが中に、その中央なるが早く咲いて、殊に色がよいので、「初花染の色深く」といつた。

大意　紅の初花染の色の深いやうに、初戀に深く思ひ染めた心を、いかな事のあればとて、私は忘れようか、いや決して忘れはすまいわ。

評　萬葉集卷十一、

うまびとの額髮結へる染木綿(ソメユフ)の染めしこゝろはわれ忘れめや

と同型で、只その序が異なつてゐるだけのやうであるが、これは初戀、彼れは單なる戀を歌つたのである。初戀とすると「くれなゐの初花染」は頗るふさはしい情調を漂はすもので、艶冶な特殊の光彩が動く。體調も蒼古である。

六帖に、三句色ごろも、結句われは忘れずとある。

陸奥(ミチノク)のしのぶもぢすり誰れ故に亂れむと思ふ我れならなくに　かはらの左大臣

釋 ○しのぶもぢすり　信夫捩摺か。「もぢ」はもぢれた卽ち亂れた樣にいふ。信夫は岩代の國の地名で、その頃は、大やうに「みちのくのしのぶ」といつて、まだ郡名とならなかつた。和名鈔に信夫郡の名が見えないから、後に至つて、郡名となつたのだらう。信夫山、信夫の里など名高い。此處で草の花葉を摺りつけた布を產したのを信夫摺と稱するのだらう。東鑑に信夫毛地摺(シノブモヂスリ)千端と見えた。なほ諸說を採錄すると、顯昭いふ「この地にて、古へ布帛に忍草の莖葉を種々の色に摺りたる物にて、その文亂髮の如く捩れる狀なれば、捩摺といひ、地の名

をかけては、信夫捩摺ともいふ。又一説、信夫郡に、大なる石二つあり、其の面平にして、もぢのやうなる文あり。それに藍もて摺りたる布を、年貢に昔奉りたるを、狩裝束などにしたるなり」と。又古川辰が東遊雜記に「陸のくにて、福島の里にて、沼崎某といふ人にあひて、文字摺石の事を問ひしに、その人のいひけらく、今それとてあるは諸け難し。想ふに、古へこのあたりの人、石の面の平なるに、色よき草花を竝べおき、藤布を覆ひて、丸き小石をもて上より摺りて、草花の色を、布へ移しゝなるべし。今もこゝより十里もをちの、出羽近き所などにては、貧しき者ども、しかするを見しなり。信夫郡なる面の平なる石は、皆文字摺石ならむといらへき」とある。荷田東滿は、「しのぶは地名にあらず。古記に、産出の證明なし」といひ、眞淵は、この意を演べて「伊勢物語に『春日野の若紫の摺衣しのぶの亂れかぎり知られず』とある、素より地名ならむには、打任せて、信夫の亂れといはれず」といひ、景樹は「顯注に定かに云へるも、東鑑に、陸奥なる信夫摺の布を供養せし事見えたるも、この歌や伊勢物語の歌やに本づきて、かの里に、あやしき摺布を出だしゝにや。その形なりとて傳ふるを見るに、眞の忍草にあらず。眞のは、被(マキ)の葉の形したる物にて、しか摺らるゝ物ならず。只青色に摺りたるを、しか云ふならむ」といつた。○我れならなくに　「なく」はぬの延言。

大意　陸奥の信夫捩摺の模樣の亂れて居るやうに、私の心は亂れたが、それは貴方より外の誰れ故に、心を亂さうと思ふ私ではありませぬ、皆貴方故に亂す心なのに、推量して下されよ。

評　仇なりなど、人に疑はれたのに答へたのであらう。初二句は「亂れむ」に係かる序なることは勿論である。廣陰が、「しのぶに重き心をあらせて、「君を思ひ偲ぶ故に心の亂れたるを、推して給はれ」と釋きなしたのは、勢語の「春日野のわか紫の摺衣忍ぶのみだれ限知られず」の意を以て、これを解いたので差つてゐる。勢語のは、その意が素より異なつて、これに關はるべきでない。歌は流石にやむごとなき血胤におはする、この人の氣品が現はれて、高古の調仰ぐべく、しかも意詞の幽婉なる、おのづから延喜時代には見られない風調である。上乘の作と稱へよう。

四句、伊勢物語には亂れそめにしとある。

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる　　よみ人しらず

釋　○思ふより　思ふことより外にの意。○あさぢ　淺茅。茅(チ)はたけ低く、まばらに生へるので淺茅といふ。秋その葉色づく。○色　心の色をよせた。○ことになる　變つてくる。

大意　自分は、思のかぎりを思つて居るが、まだこの外にどうせよといふ事でやら、秋風に靡く淺茅の色の變るやうに、あの人の樣子が變つて來るわ。

評　わが誠の盡し甲斐の無さを歎いた中に、怨意が隱然としてゐる。

二句、顯註にいかにせよとてとあるは劣つて聞える。

以下の二首も心の變る戀をあげてある。

○

ちゞの色に移ろふらめど知らなくに心し秋のもみぢならねば

釋　○ちゞ　秋上「月見ればちゞに物こそ」の條に既出。○移ろふらめど　「ど」の辭濁る。○知らなくに　知られ。

ぬのにの意。かやうの場合に、れの音の略かれる例が多い。「なく」はぬの延音。

大意　人の心は定めてあちこちと、いろ〳〵に移ることであらうけれども、その心はサ秋の紅葉でないから、色の見えないので、移ろふ樣子が表面には知れぬに、何とも致し方が無いわ。

評　心の移ろふといふより、紅葉を聯想して、その緣語で、心の動いてさま〴〵なるを、「ちゞの色に」と具象的に轉義した。初二四五三と句を次第して聞く格である。戀五、小町、

色見えで移ろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける

と同一の着想。但おのづから輕輕の分があることは、いふまでもない。

蜑のすむ里のしるべにあらねどもうらみむとのみ人のいふらむ　小野小町

釋　○しるべ　知る方。案内者をいふ。○うらみむ　浦見むに、恨みむをかけた。

大意　海邊の海人の住む里の案内者に對つてこそ、浦を見ようとはいへ、自分はその案内者では無いけれども、何でうらみよう怨みようとばかり、あの人のいふのであらうぞ。

評　男が血眼になつて、ひたすらに逢はゞ恨まうといつてよこしたのを受けて、「馬鹿〳〵しい、浦の案内者ではあるまいし」と茶かして、空恍惚けた虚實の驅引、その對照が頗る面白い。「うらみむ」の洒落は、この頃は既に二番煎じて、新奇とはいへないが、「海人の住む里のしるべ」を聯想し來つて趣向を立てたのを、手柄とする。これらはこの作者の家風である。

曇り日の影としなれる我れなればめにこそ見えね身をば離れず　しもつけのをむね

釋　○曇り日　空の曇つた日。○影としなれる　痩せることをいふ。戀一「戀すればわが身は影と」を參看。○身をば　貴方の身をば。

大意　曇り日には人の影はあつても見えぬが、戀に痩せて、その曇り日の影のやうにサなつた自分なので、それと目にこそ見えね、影の身を離れぬやうに、心は常住貴方の身をば離れはせぬわ。

評　貴女は知るまいがなあの餘意がある。戀する人は精神病者だから、こんな纖細な事をも考へ付く。いはゆる「影身に添うて離れない」は、當時とても常套語であつたらうが、その影を「曇り日の影」と見立て、「めにこそ見えね」と應じた一轉語は、陳を化して新としたものである。初句、顯註にくもる日のとある。

色もなき心を人にそめしより移ろはむとはおもほえなくに　つらゆき

大意　まる切無垢の色さへもない自分の心を、貴方に染み込ませたからは、何時までも變らうとは思はれぬにサ、さう思つて下され。

評　無垢の初戀のやうなことをいつてゐるが、もしこの歌が女に贈つたものとすれば、驅引上こんな事もいふの

で、實の處はわからない事になる。又獨坐の偶吟とすれば眞實な心の現れとなる。景樹が「戀の的面は、移ろはむとは更に思はずなど、たしかに云ふべきなれど、色もて染むる方にいひなしたれば、姑くそを評する側になりて、然は思はれずと弛ぶる方に、『おもほえなくに』と詠み下せり」と評したのは、よく當つてゐる。色の緣語のいひつゞけは、例のことである。初句理路におちた語で、爲に全篇が面白くなくなる。

めづらしき人を見むとやしかもせぬわが下紐の解け渡るらむ　よみ人しらず

釋 しかもせぬ　然も爲ぬ。こゝでは下紐を解くことをさす。○下紐　下裳の紐。

大意 久しく逢はぬ、珍しい人を見ようといふ事でか、解きもせぬ自分の下紐が、かうも解けるのであらうわ。

評 あのつれなく中絶えた人も、この頃は思ひ出してくれるのかと滿悅してゐる。下紐の解けることを、人に戀ひられる兆とする事は、奈良時代からの遺風である。

以下五首は立ち返つて戀ふるの意歌である。

○

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人みれば袖ぞ濡れぬる

釋 ○かげろふの　かげろふの如くの意。「かげろふ」は絲ゆふのこと。陽炎、野馬、遊絲とも書く。その見えみ見えずみするので、「それかあらぬか」へ續けた。○あらぬか　それにあらぬかの略。○ふる人　故人。春雨の降るとかけた。

大意 空に立つ陽炎のやうに、さうかとも思はれ、さうで無いかとも思はれて、春雨の降るといふ、古い馴染の人を見れば、春雨にあつたやうに、うれし涙に袖が濡れたわ。

評 李益の詩に「問レ姓疑ニ初見一、稱レ名想ニ舊容一」と。これはそれほど忘れ果てた舊い事ではないが、久し振で逢つたのが、まるで夢のやうに思はれるので、「それかあらぬか」とまで誇張した。袖の濡れるのは、蓋し嬉し涙である。燒木杭に火のつき易いのもこの心持である。「かげろふ」も「春雨」も、時節の景物を序に使つたのであつて、實景ではない、といふのは雨中に陽炎は立たないから。

四句、普通本ふる人なればとあり、奥儀抄にもさうある。意がよく通じ難いから、六帖、及び顯註に見ればとあるに從つた。なほ奥儀抄には、結句袖ぞひぢぬるとある。

○

堀江こぐたな無し小舟漕ぎかへりおなじ人にやこひ渡りなむ

釋 ○堀江　攝津國の難波の堀江。堀江川ともいふ。日本紀に、仁德天皇の御時掘らしめられたことが見える。○たな無し小舟　小さい舟には、船棚が無いのでいふ。船棚とは和名鈔に「枻、和名不奈太那、大船旁板也」とある。船の小緣のわたり板のこと。

大意 堀江を往來する棚無し小舟が、幾度も同じ川筋を上り下りするやうに、又も立ち返つて、自分を一旦見捨てた、同じその人に戀ひ焦れて、月日を經てる事であらうか。

評 上句は序である。舟を以て比興とした。堀江の小舟は、往來上下が頗る頻繁なものであつたらしいから、「漕ぎかへり」と續けた。同じ人に戀の蒔き直しをする。燃木杭につく火で、我れながら情に脆い愚かな所爲と知らないでもないが、心が自分のいふことを聞かないので仕樣がない。はかない運命に翻弄されることを長歎した意が、言外に籠つてゐる。「こぐ」の語が重複してゐる。不用意の誤らしい。

六帖に、初句入江こぐ、下句おなじ人のみおもほゆる哉とあり、又六帖の一本には、四句戀ひ渡るらむとある。

わたつみとあれにし床をいま更にはらはゞ袖や沫と浮きなむ　伊勢

釋 ○沫と　沫の如くの意。

大意 人に見捨てられた悲しさに、涙が海をなして、その海の流れるやうに、荒れてしまつた床なのに、今更その人に逢ふとて、その床を袖で拂はうなら、海に沫の浮くやうに、袖が涙の海に浮くであらうか。

評 音づれの絶えた間の悲歎の趣を、甚しくすさまじく聞かせる爲に誇張したのである。空しく塵にまみれた床を、「わたつみと荒れにし床」と比喩したのは、上に「敷妙の枕の下に海はあれど」とあると同巧である。袖を「沫と浮きなむ」は海の緣で首尾をあはせたので、例のこのお許の口吻である。床を拂ふは人待つ時の仕業で、元來塵を拂ふが主だけれど、「眞袖もて床うち拂ひ君待つと」など萬葉集にも見えて、塵の語をいはずして聞えてゐる。この歌、後撰集戀三に再出して、詞書に「宮仕しける女、程久しくありて、物いはむといひ侍りけるに、遲くまかり出でければ」とあつて、枇杷左大臣、（仲平）

よひの間にはや慰めよいそのかみふりにし床も打拂ふべく

とある歌の返しとして詠んだ伊勢の歌である。家集にもさうある。この事情を明らかにすべく、後撰に再錄したものと見える。

結句、六帖、家集共に沫と消えなむとあり、後撰は本文と同じい。

いにしへになほたち返へる心かな戀しきことに物わすれせで　つらゆき

釋 ○戀しきこと　「こと」は事の意。毎ではない。

大意 久し振に昔の人に逢へば、そのつれなさは忘られて、戀しいといふ事には物忘れをせずして、いろ〳〵嬉しかつた事を思ひ出して、昔の馴染んで居た時に、立ち戻る自分の心である事よ。

評 自分を見捨てたつれない人の、物忘れした無情さを反映してゐる。

結句、六帖に物忘れしてとある。これに從へば、四句を、戀しきごとにと濁つて、人の戀しい度毎に、年頃のつらさをも物忘れして、逢ひ初めた古へに猶立ち返る心なるよと解されよう。けれども部立に從ふと、やはり本文の如くでよい。

人をしのびにあひ知りて、あひ難くありければ、その家のあたりをまかりありきけるをりに、雁のなくをきゝて、よ

みてつかはしける　大伴くろぬし

思ひ出でて戀しき時は初雁のなきてわたると人知るらめや

釋 ○人をしのびに云々　女に忍びあつて、それが容易に逢ひにくいので、その女の家の附近をあるき廻つてゐる折に、初雁が鳴くのを聞いて詠んで贈つた歌との意。

大意　思ひ出して戀しい時は、あの初雁の今鳴いて通るやうに、こゝの門を泣いて私が通るといふことを、この家のうちの思ふ人が知らうか、いや恐らくは知りはすまいわ。

評 空飛ぶ雁の初聲は或は聞き知りもしようがと、わが泣き渡りながら知られぬのを、雁にも劣るやうにくやしがつてゐる。せめてもの心遣りに、その家の前渡りするは、詩の鄭風に、

東門之墠、茹藘在レ阪、其室則邇、其人甚遠。

とある趣に似て、人情は東西一軌である。戀三、貫之、

忍ぶれどこひしき時は足引の山より月の出でてこそくれ

も同じ境地で、詩材と着想がすこしちがふ。熱情は貫之のに優つてゐる。蓋しこの作者としての傑作であらう。

右のおほいまうち君住まずなりにければ、かの昔、おこせたりける文どもを取り集めて返すとて、よみておくりける　典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今は返してむわが身ふるればおき所なし

釋 ○右のおほいまうち云々　右大臣源能有公が通つて來ずなつたので、以前よこした文殼を集めて返すとて、添へて贈つた歌との意。○言の葉　書簡をさす。○ふるれば　舊さるればの意。

大意　これまで末賴もしさうにいつて下されたお文も、もうお戻し申しませう、私の身が古臭く飽かれましたから、このやうな艶なるお文は、私方に置所が御座りませぬわ。

評 花やいだ言の葉などは、今の舊されたこの身にはふさはしくもないからと、嫌味を竝べたのは、何處までも女心である。その實をいふと、風月定情のさる艶めいた消息などが目に觸れるにつけ、思ひ出の種となつて、「形見こそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらましものを」といつた調子で、斷腸に堪へないので、屑く否むしろ當てつけに返してしまはうと思ひたつたのである。「置き所なし」を諸註に「我が身すら置所なきを聞かせたり」とあるのはわるい。それでは意が兩端に岐れて、歸着點がない。

戀文を一纒めにして渡すことは、一般的慣習でもないが、折々あつたことが平安期の文書に散見する。それは絶緣のしるしであつた。

かへし　近院の右のおほいまうち君

今はととてかへす言の葉拾ひおきておのが物から形見とや見む

釋 ○物から　物ながらの意。

大意　今はもう見限つたといつて、お返しなされたこの文を拾ひ上げて置いて、もと〳〵自分の物ながらも、一旦貴女のお手に觸れた物故、貴女の形見と思つて見ませうか。

評　彼れは示すに絶を以てしたのに、これは戀々として故を懷ふ情を敍べた。その對照がおもしろい。おのが物からの形見、眞に才人の言である。

題しらず　　よるかの朝臣

玉桙の道はつねにもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

釋　○玉桙の　「玉」は美稱、桙は古の鉾は、木で造つた物なので、偏旁は木に從つてゐる。こゝは、道の枕詞に用ひた。眞淵はその冠辭考に、「玉桙の身と、ミの一言にかゝれるなるべし」といひ、宣長は、「道のミは美稱にて添へたるなれば、枕詞はチへかゝれり。古へは戈の柄に取持つ便に、乳のありしなるべし」といひ、雅澄は、「古への戈は一木なれば、身のあるべき筈なし。これはミチの二言にかゝれるものと覺し。玉桙の圓といふを、通音なればミチにかけたるなるべし。さるは玉は美稱にあらで、桙を圓く、石劍などのさまに作成したる形よりつけたるならむ」といつた。以上三說中、眞淵の說が宜しい。欄柄に對して、刄渡を身といふに何の差支はない。雅澄の說はむづかしい。

大意　毎夜餘所にお通ひなさる貴方が、今夜珍しくこれへ來て下されたのは、定めてお門違へだらうが、貴方のお通ひ道は、いつも〳〵戸惑ひして、取り違へて下されて頂きたいわ、さらば餘所へ志してのお出も、亦私の所に來て下されるものかと思ひませうわ。

評　たまさか忘れた時分に訪ねて來た男に對しての挨拶で、筆路迂餘曲折して、暗に諷詆の意を寓してゐる。貫之集なる、

月影に道まどひしてわが宿にひさしく見えぬ人も見えなむ

などの儔である。六帖に「文たがへ」の題に收めたのに據つて、人の許へ行くべき文を門違ひして、常に迷ひ來よかし、せめて我れかと思はむといふ意に解いた說もあるが無理である。

まてといはゞ寢ても行かなむしひて行く駒の足折れ前の棚橋　　よみ人しらず

釋　○駒の足折れ　駒の足を折り伏せよの意。「駒」はもと小馬の義で、齡のわかい馬をいふことであるが、大方、馬といふも同じことに用ひられてゐる。「折れ」はこゝでは挫折の意ではない。折り敷かせよの意である。祝詞萬葉集などに、鹿自物膝折敷とある折敷とおなじい。○前の棚橋　家の前の小川に架けた棚橋。「棚橋」は顯昭は「板にて棚のやうに柱立てゝ渡したり」といひ、景樹は、「たゞそとしたる橋にて、大方は柱も無き、一枚の板打渡したるなるべし」といつた。

大意　まあ暫く待つて下されといふからには、今宵は泊つて寢てまあ往つて貰ひたい、それを聞かずに無理に往かうとする、あのお方の駒の足を爪づかせて止めて呉れい、門前の棚橋よ。

評　小やかなる門前の流に、棚橋うち渡せる趣は、田舍でなければ京も場末であらう。車にもえ乘らぬ地下の物けなきわび人か、或は公達殿原の若く好いたるが、志のあつい忍びありきか。いづれにもあれ、遙かな道を馬

で通つて來たらしい、たまくもとより差支のあつてか、さらずは口說など嵩じてか、俄かに歸らうとして、馬引き寄せて這ひ乘りつゝ出て行く後影を見送りながら、詠んだものである。假初に板うち渡した棚橋は動もすれば躓き易い。卽ちこの棚橋を有情に取り成して、かの無情な人の駒の足折れと絕叫した。構想奇矯、筆また豪宕である。初句の字餘りから、四句に命令を用ひ、結句を體言に止めたのが、この勁健の調を成す所以かと思ふ。この歌、實に尋常の婦人の口吻でない。餘程雄々しい氣性の者であつたらう。否待てといふに强ひて郎の歸るのに、ひどく激昂した結果であらう。かう極度に憤慨することは、一面に限ない戀の高潮を示してゐる。千秋がこれを俳諧の類かと評したのは淸言の言で、采るに足らない。二三の句間に然るを、三句の下に人のといふ語を省いてある。讀人しらずの歌の中では、その中期以前に屬する作である。

中納言源のぼるの朝臣の、あふみのすけに侍りける時に、

閑院

よみてやりける

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなく〳〵も見め

釋 ○中納言源のぼるの朝臣云々　今中納言である源昇朝臣が、昔近江介であつて赴任する時に詠んで贈つた歌との意。源昇朝臣は左大臣源融の二男で、近江介に任ぜられたのは、仁和四年二月である。「介」は國司の次官である。○相坂のゆふつけ鳥　戀一「相坂のゆふつけ鳥も」の條に既出。

大意　相坂の關に放してある、木綿附け鳥といふ雞は、貴方が近江への往來の度毎に、啼きつゝそのお姿を見るが、私の身がその木綿附け鳥ならばこそ、泣きつゝも御往來なさるお姿だけは、餘所ながらも拜見致さうに、木綿附け鳥ならぬ私は、それさへも叶はぬ事が恨めしい。

評　婦人の身としては自由に外出も出來ず、思ふ人の遠行も見送りすらなり難く、徒に近江へ越える國境の相坂の木綿付け鳥の、君がゆきゝを鳴くくも見るを羨むに過ぎない。その衷情實にあはれである。その假設の構想はさう珍しくもないが、この集中、木綿附け鳥四首のうちでは最も勝れてゐる方だらう。「こそ」の辭力ある用法であるから、必ず言外の餘意を聞かねばならぬ。

題しらず

伊勢

故里にあらぬ物からわがために人のこゝろのあれて見ゆらむ

釋 ○故里　都址。なほ春上「人はいさ心もしらず」の條參照。○こゝろのあれて　心の變るをいふ。

大意　故里こそ荒れても見ゆれ、あの人の心は、故里では無い物ながら、何で自分の爲には荒れて、うとうとしく見えるのであらうぞ。

評　怨意は十分である。心の荒れることは土佐日記に、

聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。

と、貫之が書いたと同一の措辭で、これは故里を帶敍したのが一ふしである。二三の句間に、何故にの語を補足して聞く格である。

山がつの垣ほにはへる靑つゞら人はくれどもことづてもなし

寵

釋 ○垣ほ　垣といふに同じい。「ほ」は秀の義。○青つゞら　玉かづらと同じい。上の「玉かづらはふ木あまたに」の條を參照。○人はくれども　人は來れどもに、繰れどもを寄せた。青つゞらを採るには、手繰り寄せるので、その緣によつた。○ことづて　言傳(コトヅタ)への約。今いふ傳言。

大意　山賤の垣ほに這つて居る青葛(アヅマヅラ)を、繰るといふやうに、このあたりへあの思ふ人は度々來れども、自分の方へは寄り付かぬばかりか、一向言傳も無いことわ。

評　さて〳〵氣強い人よの餘意がある。「人はくれども」は、その男が自分の所にくるのではない。自分の近處に住む他の女の處にくるのである。かうした男の放縱らしい振舞は、當時の慣習からは、さう珍しい事ではなく、寧ろ當り前であつた事を記憶してほしい。然し門前を素通りしてゆきながら、聲一つ懸けられないのは、何としても婦人の堪へられる處でない。その氣強さを怨まずには居られぬ。「言傳もなし」といひ離した辭樣は、その深い心の波動を響強く表現してゐる。上句は、「くれ」にかゝる序であることは勿論なのを、廣陰が「わが居所を山賤の垣ほに比喩したり」と解いたのは鑿である。

六帖には、下句たづね來れども逢ふよしもなしとあつて、作者の名がない。

大空はこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ　さかゐのひとざね

釋 ○かは　反動辭。○ながめ　物思ひつゝ諦視すること。

大意　あの大空は戀しい人の形見かまあ、形見でも無いわ、それを何故に、その人を戀ひ慕つて物思ふ度毎に、かう空が詠められるのであらうぞ。

評　戀の懊惱に空のみながめられるので、自分ながら自烈たくなつて、自分の態度に對して、一棒を喝はしたのである。畢竟これ幻化手段で、上句にまづ意表の落想を著けて、人の視聽を聳かし、下句にその謂れをことわつたのである。上下句の間に、例の何故(ムムム)にの語を補足して聞く格である。

あふまでの形見もわれは何せむに見ても心のなぐさまなくに　よみ人しらず

釋 ○何せむに　下に、とゞめおきけむといふ詞が略かれてある。

大意　あの人がこの間、又逢ふまでの形見にと殘し置かれたこの物も、自分は何にしようとて、留め置いたのであらう、これを見ても、戀しく思ふ心が一向休まらぬのにサ。

評　いづれ逢はねば、この胸がをさまらぬといふに歸着する。形見で紛れる位の淺い思でないと主張した。それでは形見を不要とするのかといふと、決してそんな事ではない。實は形見があるから安心して、それ以上を欲求するのである。

親のまもりける人のむすめに、いとしのびにあひて、物らいひけるあひだに、親の呼ぶといひければ、いそぎかへるとて、裳をなむぬぎ置きて入りにける、そののち、裳をかへ

七五〇　おきかぜ

すとてよめる

あふまでの形見とてこそとゞめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

釋 ○親のまもりける云々　親の守りかしづいてゐる大事の人の女に、密かに逢つて話などして居つたうちに、女中共が來て、親がお喚びですといつたので、女が周章てゝ去ぬるとて、裳を脱いで置いて奥へはひつたそのあとで、その裳を取り上げて持つて歸つたのを、その後返すとて詠んだ歌との意。「物ら」は物等である。「裳」は婦人の禮服で、腰のうしろに襲ふ褶である。○もくづ　藻屑。裳を寄せた。

大意　この裳は定めて、又逢ふまでの形見よとての事でサ、留め置かれたのであらう、しかしこの裳を見れば、貴方の事が思ひ出されて、涙がひどくこぼれるから、その涙の海に浮く藻屑のやうな、つまらぬ裳であつたわい。

評　それ故お返し申しますの餘意がある。折角の形見も、たゞ涙の種となるのみなればといふことを潤飾した。「涙に浮ぶ」は誇張で、それに藻屑を取り合はせたのに、海の意がおのづから廻護映出されたなど、纖細浮華である。

題しらず　よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを

釋 伊勢物語に「昔あだなる男の、形見とておきたる物どもを見て」と詞書があつて、この歌が出てゐる。○あたゝんで讀む。仇讐の義。

大意　戀しい人の殘して置いた形見がサ、今は却つて、自分の爲にはかたきではあるわ、なぜといふに、これが無いならば、少しは忘れる時もあらうものを、なまなかこの形見があるので、見ては思ひ出し〳〵して、忘られぬによつてサ。

評　勢語の詞書は、よくこの事情を説明してゐる。居らぬ間の形見に見なさいと男の殘して置いた物があつたが、その男が浮氣者で、それ切り忘れて來なくなつた時に詠んだのである。「今は」の一語、心長く我慢に我慢をかさね、辛棒に辛棒をした趣が見えて、最も緊切に器用に使はれた。すべて情眞に語摯である。故によく人の肺腑に入つて、一唱三嘆に堪へざらしめる。逸品と稱へてよからう。

古今和歌集卷第十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に、ほいにはあらで物いひわたりけるを、月のとをかあまりになむ、ほかへ隱れにける。あり所は聞きけれど、え物もいはで、又の年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、こぞを戀ひて、かの西の對にいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

釋 ○五條のきさいの宮は、仁明天皇の皇后藤原順子を申す。文德實錄、嘉祥三年四月の條に「皇大夫人、移御五條院」とある。「西の對」は中昔の家造は、寢殿を正中に、東西に對屋を建てる。その西の對屋である。「ほいにはあらで云々」のほいは本意の音の略で、卽ち初めよりこの女をと思ひ込んだのではなくて、何となきこ

とのついでに語らひついて、志の深くなつたのである。「あばらなる板敷」は端つ方の板敷の、格子も几帳も立てぬをいふ。あばらは荒頽の義で、四壁の無い家卽ち亭を、和名鈔にアバラヤと訓んである。さて、この詞書も伊勢物語の攙入らしい。勢語を解する者、多くこの「西の對に住みける人」を、五條后の姪の藤原高子の事とし、「外へ隱れにける」を、その兄基經などの計ひで、淸和帝の後宮に奉つた事としたのは、大鏡をはじめ、後世の書に準據がないではないが、元來が傳說で、確たる事實と見難いから、それに拘泥して釋かぬ方が穩やかと思はれる。○月やあらぬ春や昔の春ならぬ　二つの「や」は反動辭。舊註に疑辭と見たのはわるい。「昔」は廣い意味での過去をいふ。

大意　今この月はもとの月で無いか、やはりもとの通りの月である、今のこの春はもとの春で無いか、やはりもとの通りの春である、すべて何もかも去年と變つた事はないのに、只我が身一つばかりはもとの身であつて、しかも身の上が去年とは變りはてた事よ。

評　詞書に「月の十日あまり」とあるので思ふと、今はその翌年の二月頃の十日あまりで、月の最も面白い夜頃である。あはれ花天月地、春色は依然としてゐる。失意失戀の身でこれに對すると、その感愴はどんなものか。かく自然の景物を借り來つて、その不變の現象を境遇上の變化に對照させたことは、感哀を永からしめる詞家の慣手段で、趙嘏の詩に、

獨上三江樓一思渺然、月光如レ水水連レ天、同來翫レ月人何處、風景依稀似二去年一。

と作つたのも同一帆である。「わが身一つは」の「は」の辭、暗にわが身以外の或者の變つたことを反襯してゐる。只その變つたがために、月も花もわが身も、もとのまゝながらもとの物とも思はれざるに歸著する。初句、「月や昔の月ならぬ」といふべきを、二句に讓つて略き、結句「して」といひさして餘意を含めたのなどゝ、省筆の限りを盡したのは、語簡に味ひの永い所以である。新古今集雜上、淸原深養父の、

昔見し春は昔の春ながらわが身ひとつのあらずもあるかな

はこの註解である。序文の「この朝臣の歌は、意餘ありて詞足らず」の評は、よく病處を穿ち得たやうだが、この歌の如きは、斷じてその權衡に上すべきものでない。寶玉集に「綠の空に遊絲を望むが如し、あるにあらず、なきにもあらず、幽にして境に入らざらむ人の得難きなるべし」とあるは名評である。上句の「月や」「春や」、又「あらぬ」「ならぬ」の同語同音の重疊反復、下句の「身」の語の重疊など、聲調の和諧を極め、又上句なる二つの反動の「や」の辭は下句の「は」の辭と力量相匹敵してゐる。概するに、蒼凉淒婉の調で、餘意あり餘情あり、情景兼ね到つて、眞の黃絹幼婦といふべく、實に朝臣が作中の神品に屬するものである。

題しらず　藤原なかひらの朝臣

花すゝきわれこそしたに思ひしかほに出て人に結ばれにけり

釋　○したに　「した」は心の底をいふ。○ほに出て　「ほ」は表面、公などの意。穗をいひかけた。

大意　あの人を自分こそわが物にしようと、内々思つて居たことわ、然るに、この花薄の穗に出たのを結ぶやうに、公然と外の者に、意外にも取られてしまつたわい。

評　殘念なる事かなの餘意がある。初句の「花薄」は二三の句を隔てゝ四句へかゝる。「穗」も「結ばれ」も薄の緣語で仕立てたまでゝ、内容は一向つまらない。伊勢集のこの歌の詞書に、

この男の兄なるをとこありけり。「今はあの人は世にも訪はじ、何か頼み給ふ、我を思へ」などせちにいへど文ばかりは見つゝも、更に逢はでありけり。かくいふけしき、もとの人は知りたりけむ、女里に出でて、秋前栽などをかしかりけるを、花をなむ手ずさびに結びたりける。このつらかりし人の來てよみたりける。と見えて、作者は仲平の兄とある。この人の兄は時平で、時平は好色の人だから、多少形迹はありさうだが、この詞書の趣は、歌の意とは相違してゐる。

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれ初めけむ　藤原かねすけの朝臣

釋 ○音羽川　山城國山科なる音羽の瀧の流の末をいふ。○みなれ　見馴れに、水馴（みけ）れをかけた。見馴れは馴染むをいひ、水馴れは水に親み馴れるをいふ。

大意　いつそ只餘所にばかり、噂だけに聞いて居ようものを、何でその音羽川を渡るといふでもないやうに逢ふといふでもなしに、水馴れるといふやうに、見馴れ初めたのであらうぞ。

評　逢ふ瀬の中の絶えた折、いつそ馴染まぬ昔がましと、かひない今を悔んでゐる。かういつても絶對に相見ぬ昔がよいとするのではない。只現在の境遇の苦惱を甚しくいつたまでゝある。詞の皮相に泥んで、その深意を誤つてはならぬ。音聞きの語緣によつて、「音羽川」を取り出し、さて川の緣語で、渡らばこそ水には馴れようが、かう渡らぬ中のいかで「みなれそめけむ」といひなした轉義、技巧に趨つて、感哀を殺いでゐる。初句、古本、家集におとにのみとあるはいかゞ。

わが如くわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ　凡河内躬恒

釋 ○わが如く　我が人を思ふ如くの略。○さても　然してまあの意。もやと續けて萬一を疑ふ辭と見てはならぬ。○世を　「世」は伊勢物語などに多く見えた語で、男女の中らひをいふ。

大意　自分があの人を思ふやうに、自分を思つてくれる人もあつてほしいことよ、そのやうに人に思はれても、やはりかう憂いものであるかどうかと、一つこの夫婦中を試して見ようわ。

評　何とあの人は自分を思つてみてくれぬかなあの餘意がある。思つてくれゝば希望通りだから、憂きことなどは全く無い譯である。それをなほ、「さてもやうき」と思案した痴愚が面白い。上句は、自分ばかり戀ひ焦れて、人が自分を思つてくれぬ憂さを、下句は、それにつけてもこの世の中の心憂く思はれる趣を寓したのは婉曲で、言語の驅使に自在を得たものである。

拾遺集戀五に再出したのは、初句われば かりとあつて、讀人しらずの歌である。六帖も同樣。また、古本信明集に出てゐるのは疑はしい。

ひさ方のあまつ空にもすまなくに人はよそにも思ふべらなり　もとかた

大意　自分はあの天のやうな遠くにも住まぬのに、とかくあの人は、自分を餘所〳〵に思ふ樣子であるわ。

評 どうした事ぞの餘意がある。この怪訝の意を輕々に看過してはならない。さうでないと餘りにこの歌を凡丁してしまふ。上句は、「よそにも思ふ」といひ出す伏線で、まあ一寸した口合である。

三句、六帖にはあまの空にもとある。又三句、新撰和歌にはあらなくにとある。

見てもまた又も見まくのほしければ馴るゝを人は厭ふべらなり　よみ人しらず

釋 ○見ても　「見て」に「も」の歎辭の添はつたのである。口語の「見れども」の意に用ひるとは異なつてゐる。

大意 逢ひ見てもまあ逢ひ見てもまあ、やはり又も又も逢ひ見たくなるので、それで二度三度と馴染むことを、どうやらあの人は嫌がる樣子であるわい。

評 それであの人はかう疎々しく自分を扱ふのだらうと、一遍は表面的善意に解釋して見たのである。昨日鴛鴦の夢を訝した人、今日は早く路傍の人で、炎涼は飜掌の間に變ずる。どうして我慢がなるものではない。畢竟は、わが切ない情思とは反對に、一度の契に絶えてしまはうとする人を怨んだ意が隱然と見える。「また」の語の重疊、見ても亦見まほしく、見ても亦見まほしくといふ反復の意を、最も簡淨に表現したものである。宣長が三句を、「見まくのほしきにといふ意なり。古歌にこの格多し」と解いたのは委しくない。

雲もなくなぎたる朝の我れなれやいとはれてのみよをばへぬらむ　きのとものり

釋 ○なぎ　和ぎの意。風日の長閑なにも、波の立たぬにもいふ。○朝の　朝の如きの意。○なれや　なればやの意。○いとはれて　最晴れてに、厭はれてをかけた。

大意 空に雲も無くつて和いだ朝は、いと晴れてあるものだが、その朝のやうな自分であればかして、人に厭ひ嫌はれてばかり居て、一生を暮らしてしまふであらう。

評 「いとはれて」の秀句、狂體にちかい。

六帖には、三句以下「てる日にもおもはれまさる我や何なり」とある。

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は　よみ人しらず

釋 ○花がたみ　神代紀に籠をカタマと訓じたのは、このかたみと同語である。「花がたみ」は、花を摘み入れる籠で、籠の編み目は、所狹く竝びつらなるので、「めならぶ」にかゝる序に用ひた。○めならぶ　見竝ぶの意。即ち見比べる意。

大意 花籠の目の竝んだやうに、外に美しいのが幾人もあるので、自分のやうな人數にも無い身は、もう忘れられてしまふ事であらうわ。

評 婦人の作らしい。男がなかなかのすき者で、あちこちかゝり合ふ女が多く、そでない素振がほの見えたのであらう。直接に人を恨みず、「數ならぬ身は」と消極的に悲觀したのが、却つていよ〳〵怨意が深く聞える。四句、顯本に忘られにけむとあるを景樹は執したがわるい。こゝの部立は、まださう疎くはならぬうちに、つ

らい心の見えたのを擧げてある。もとより本文の解に從ふがよい。

○

うきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそ蜑はよるらめ

伊勢

釋 ○うきめ　憂き目に、浮き布をかけた。布は海藻をいふ。黑布、和布、昆布などの布である。○ながるゝ　泣かるゝに、流るゝをかけた。○かり　假に、刈りをよせた。

大意　浮き布ばかりが生えて流れる浦であるから、これを刈りにばかりサ、一途に海士は浦邊へ立ち寄るであらう、その如く、憂い事ばかり出來て、心ならずも泣いて暮らす自分である故、思ふ人のたま〳〵見えても、誠の志からではなくて、只假初に氣休めだけに、一寸立ち寄られるのであらう。

評　比喩に加ふるに、懸詞を用ひたので頗るうるさい。著想も平凡である。「のみ」の重複いよ〳〵拙い。二句、六帖にうきて亂るゝとある。六帖の一本には又、四句かりにのみだに、結局あまはよるらむとある。皆おだやかでない。

あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるゝがほなる

釋 ○あひにあひて　合ひに合ひて。合ふことの甚しきをいふ。○ぬるゝがほ　濡れるかたち、濡れる樣子などいふ意。

大意　よくも打ち合つて、物思をしてをる頃の、涙に濡れたこの袖に映る月影までが、おなじやうに濡れ顏であるわ。

評　もうこれでは溜らぬの餘意がある。三界唯心、心の闇に月の光もかきけちて、濡れ顏なる擬人、おなじ歎に月も沈むと見たのである。涙の語を著けないで廻護したのが、例のこの作者の小巧である。後撰集雜四に再出したのには、詞書を「物思ひける頃」とある。結句、六帖、及び家集にぬるゝかげなるとあるは甚だわるい。

秋ならでおくしら露はねざめするわが手枕のしづくなりけり

よみ人しらず

釋 ○手枕　轉寢などに、腕を枕とするをいふ。

大意　露は秋によく置くものであるが、秋でなくて床の上に置く露は、何かと思へば、物思に寢覺をする、自分の手枕から落ちる涙の雫であつたわい。

評　「寢覺」といひ、「手枕」といつたのに注目されたい。これその夜すがらの心づかれに堪へず、轉寢した趣である。しかも端なく夢が覺めると夜はなほ闇で、萬感胸に集つて、こぼれる涙は秋の夜露の如く夥しい。乃ち敍述の順序を轉倒して、まづ「秋ならでおく露」と驚訝の前提を置いて、人の注視をひいておいて、さて、それはわが物思の涙ぞと說明を下した。これら思索の間に、感愴の意の動くを認む。手枕の涙とあるべきを轉義して雫としたのは、露に應接させる爲で、涙を道破しないのは、上のと同工である。

○

須磨のあまの鹽やき衣筬をあらみまどほにあれや君がきまさぬ

釋 ○鹽やき衣　製鹽の際に著る衣。但別にさうした衣があるのではない。鹽燒く海士の衣をいふのみ。○筬をあらみ　筬が疎さに。筬は機の緯絲をとほす器具であるが、筬があらいといへば卽ち緯絲の織目があらいことになる。○まどほ　間遠。この語は通例、時間のあるにいふが、こゝはそれでは意が通じない。よつて道程のある意に解した。○あれや　あればやの意。

大意　須磨の海人の鹽燒衣は、筬があらいので、織目の間が透いて遠いやうに、道の間が遠い故かして、待てども〳〵君がお出なさらぬわ。

評「間遠にあれや」は君の來まさぬ理由を、强ひて善意に解釋して見たので、內心では男の不誠實を怨んでゐる。これが婉曲の味ひある所以である。上句の意は、萬葉集卷三、

すまのあまの鹽やききぬの藤衣まどほくしあればいまだ著なれず

を拘つたものか、否おそらくは、一首ながらこの誤傳ではあるまいか。六帖に、結句いまだ來まさぬとあるのは、いよ〳〵萬葉のに近い。藤衣まどほくとあるを、心得かねた後の心から、「筬をあらみ」の一句を加へたものか、細碎にわたつて却つてをかしくない。すべて序歌の類の構意は簡單だから、ひとへに修辭聲調のうへに、無限の姿致を要求するものであることを忘れてはならぬ。「や」の辭、廣蔭が反辭として解したのは繫である。

○

山城のよどのわかごもかりにだにこぬ人頼むわれぞはかなき

釋 ○よどのわかごも　淀の若菰。淀は山城久世郡で淀川沿岸の地、眞菰の名處で、里人はこれを刈り取つて、席や簾を織りなどした。○かりにだに　刈りに、假をかけた。

大意　山城の淀の若菰は里人が刈るが、その刈りといふ假初にさへも、自分の處には來てくれぬ人をあてにして、來るか〳〵と待つて居る自分はサ、さて〳〵たより無いことわ。

評　説明にとゞまつたのはくちをしい。これは結句の「我れぞはかなき」がわるいのである。しかし自嘲の語として聞けば、多少の味ひはある

○

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにに深めて思ひそめけむ

釋 ○みなせ川　戀二「言にいでていはぬばかりぞ」の條に既出。水もろくにない淺い川なので、こゝは反對に取り成して、「なにに深めて」にかゝる序に用ひた。

大意　あの人に逢ひ見ることが無いによつて、いよ〳〵戀しさが增さるわ、もとより水無瀨川のやうに、淺いあの人の心を、何で末かけて深く思ひ初めたのであらうぞ。

評　やう〳〵厭棄された人の作であらう。ひたすらその不明を悔いた趣は、人の輕薄無情さを反視して、怨意が

活躍する。しかも戀々として、その故を忘れかねた情合がなつかしい。「なにに」の疑問、深淺の對映、また多様の姿致を生ずる。

○

あかつきの鴫のはねがき百はがき君が來ぬ夜は我れぞ數かく

釋 ○あかつきの鴫のはねがき云々　鴫は曉方には殊に打ち頻つて羽搔くので、羽搔き百羽搔きと續けたといふ。萬葉、六帖などの歌の例では、多くその飛び立つ羽音を詠んでゐる。守部の鐘の響きに、空に舞ふ鴫の羽音のすさまじい事を敍べて、神樂歌の「しなが鳥ゐなのふし原飛びてくる鴫の羽音はおもしろきかな」を引證してゐる。○數かく　うち任せては、萬葉十一「水の上に數かく如きわが命」、又上の戀一「行く水に數かくよりも」の如く、數を畫する意であるが、顯註をはじめ、來ぬ夜の數を書き附ける意と解いてゐる。しかしこゝは、屢搔く意としてよい。廣蔭のもじ〳〵することなりといつたのは當つてゐる。千秋が宣長の解をたすけて、「數かくは、喩の鴫の百羽搔の詞によりていへるのみにて、意はたゞ歎きすることの繁き由なり」といつたのは、杜撰である。

大意 曉には鴫がしけく羽を搔き鳴すが、君が來ぬ夜は、宵から曉まで待ち通して私がサ、その鴫の百羽搔するやうに、幾度となしにもじ〳〵として歎き明かすわ。

評 所謂輾轉反側の意である。鴫の百羽搔を數へ盡し得たのは、曉まで一睡もしなかつたことを語る。卽ち君を待ちつゝ夜を明かしたことを語る。傷心の極である。「はねがき」、「もゝはがき」、「數かく」の疊語、反復の意

を表現する辭樣として適當である上に、語調音響また相協つて、字々鏗然たる感じがする。格調もやゝ古い。「君」と「我」との露骨な對照が、こゝでは却つて妙である。

顯註に、二三の句、榻のはしがき百夜がきとある由をいひ、

これは、昔あやにくなる女をよばふ男ありけり。志ある由をいひければ、女心見むとて、來つゝ物いひけるつゝ伏せりけり。榻のはしに、ぬる夜の數をかきけるを見れば、九十九夜になりにけり。明日よりは何事もえいなび給はじといひて歸りにけるに、親の俄に失せにければ、その夜えいかずなりにけるに、女の詠みてやれりける歌なり。

とある。定家は「鳴、榻共に用ふべき中に、古今の諸本一同に鳴なり」といつた。思ふに好事者鳴を榻に換へて、一場の小說を作つたのであらう。

○

玉かづらいまは絕ゆとやふく風のおとにも人の聞えざるらむ

釋 ○玉かづら　戀四「玉かづらはふ木あまた」の條に既出。葛は蔓延するものだから、「絕えず」の意にいひ續けるが常なのを、こゝはその文理を忘れて、反對の「絕ゆ」の序に用ひた。詩歌のうへにはありがちの特例である。○ふく風の　「おと」にかゝる序詞。

大意　今はもう緣を切るといふのでか、風の便りの音づれも、あの人はせずになるのであらう。

評 揣摩臆測は、遂に最後の手切れにまで到達する、その煩悶の情致が思ひやられる。たゞ序詞の疊用は繁褥らしい感がする。

○

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心にあきや來ぬらむ

釋 ○あきや　飽きに、秋をかけた。

大意 この頃一向お出の無いを悲しく思ふ私の袖に、まだその時節でも無いのに、このやうに時雨の降つたのは變つた事であるが、これは君が心に私を飽いたといふ名の、秋が來たのであらうか。

評 時雨を秋の景物として詠んである。この時代は皆さうであつた。委しくは、秋下「神無月時雨もいまだ降らなくに」の條を參照されたい。後にも、

しぐれつゝもみづるよりも言の葉のこゝろのあきにあふぞわびしき

と同じく、飽きと秋との秀句から聯想して、涙の落ちるのを、時雨の降るに比喩した。工ではあるが、眞實味はそれだけ遠ざかつてゐる。

○

山の井のあさき心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

釋 ○山の井の　離別「むすぶ手のしづくに濁る山の井の」の條に既出。山清水を堰き溜めたまでの物淺いか

ら、「淺き」にかゝる序とした。○影ばかり　一寸ほの見えたまでゝ、來てもとまらぬにいふ。

大意　山の井のやうな、淺い心では私は思はぬのに、何であの方は、その山の井に映る影程ばかり一寸見えて、落ち付いてはとまらぬのであらうぞ。

評　これは萬葉卷十六、

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさきこゝろをわが思はなくに

を本歌としてゐる。三句の下に、何故にの話を含めて解すべき格である。「山の井のかげはなる」はあまり小細工で、味ひはまことに乏しいが、調は流滑である。

○

わすれ草種とらましをあふ事のいとかくかたき物と知りせば

釋　○わすれ草　和名鈔に「兼名苑云、萱草、一名忘憂、漢語抄云、和須禮久佐、俗云如二瓊藻一音一」とあり。春宿根から長葉叢生して、秋長莖を抽んで、枝を分ち花を著ける。形は百合花の如く、色は紅黄で、紫黑の點がある。詩の衞風に「焉得二諼草一言樹二之背一、云々」とある諼草を、釋文に「諼、本又、作レ萱」と見えて、註に「食レ之令二人忘レ憂者」とある。又稽康が養生論に、「諼草忘レ憂」などあるに本づいた名であらう。

大意　思ふ人に逢ふ事が、ひどくこのやうになりにくいものぞといふことを、疾うから知りもしたらば、この苦しい戀を忘れるやうに、忘草の種を取つて置かうであつたものを。

評　忘草の名によつた落想は、夙く奈良時代に見える。萬葉卷十二の、

わすれ草垣もしみゝにうゑたれどしこの醜草なほ戀ひにけり

などの類がそれである。「逢ふ事のいとかく難きものと知りせば」といふのは、何も後悔した譯ではない。「忘草種とらましを」といふのは、必ずその人を忘れ果てたいと希望するのでもない。たゞ逢へない煩悶の餘りに出た矯語である。土佐日記に、

住の江に船さしよせよわすれ草しるしありやと摘みて行くべく

とある歌のつゞきに、

うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しき心地しばしやすめて、又も戀ふる力にせむとなるべし。

と評したのは、又うつして、この歌の評に充てゝよい。

○

こふれども逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひ茂るらむ

大意　何程戀しく思つて寢ても、夢にも逢ふと見る夜の無いのは、あの人が自分を忘れた忘草が、現ばかりか夢の路にまでもサ、生ひ茂つた事であらうか。

評　その實は戀々の情に驅られて目も合はぬので、夢も見ぬのであらう。次の「夢にだにあふこと難く」の歌も、同じ情況であつて、これは忘草のうへでいひはてゝある。「夢路にさへや云々」の趣向は、戀二の「夢路にも露やおくらむ」と同工異曲である。

この歌、後撰集戀六に再出して、二句逢ふ夜なき身はとある。身の一語却つて障碍物となつて、意の疏通を妨ける。

○

夢にだにあふ事かたくなり行くは我れやいをねぬ人や忘るゝ

釋　○いをねぬ　「い」は寢入ること。「ね」は横臥すること。

大意　せめて夢になりとも逢ひたいと思ふ、その夢にさへも、段々逢ふ事のなりにくゝなつて來るのは、自分が物思の爲に眠りかねる故か、それともまた、あの方が自分を忘れて心が通はぬのか、どちらであらうぞ。

評　その實は、人に忘られたのではないかの心配に、我がいを寢かねた爲である。それを「我や」、「人や」と兩端を叩いて疑つてゐるこの痴呆の處に、一段の詩味を生ずる。「なり行く」とあるに、日に添へてその物思のまさる趣が見える。

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける　　けんげい法師

釋　○もろこしも　「もろこし」は支那をいふ。「も」は口語のさへもの意。

大意　遠い唐さへも、夢に見た位だから近かつたわ、それに引き換へ、思つてくれぬ中は、夢にも見ることもないから、遙かに遠いことであつたわい。

評　これも物思の爲に、夢も結ばぬのであらう。かう遠近を表裏に取り成した構想は、晉の明帝の幼時、「日と長